

# ジャンゴの催眠ハーレム海賊団

シロアリさん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジヤンゴに転生した男は催眠術を極めて、ひたすらエロいことをしながらハーレム海  
賊団を作り海賊王を目指す。

目

次

エニエス・ロビーエ  
怪人ペローナ

199 184

航海士ナミ

船医カヤと姉妹丼

女剣士たしづ

王女ビビ

運び屋ミキータ

考古学者ロビン

クロコダイル攻略戦

新たな旅路へ

空島にて

目指せ黄金郷

皆の“アイドル”ポルチエ

秘書カリフア

165 147 130 117 95 77 60 49 33 21 9 1



# 航海士ナミ

「ワンツー・ジャンゴでお前はおれの性奴隸になる」

「はあ？ 何をバカなことを言つているの!?」

海賊 “1・2のジャンゴ”として生活を送つていたおれの頭にある日、前世の記憶が戻る。童貞のまま死んだという悲しい記憶が。

そのとき、誓つた。今世は遠慮しねエ。どんどん女を抱いて、後悔しないように生きるんだ。

——そう、催眠術で海賊王ヤリチンにおれはなる！

おれは催眠術を鍛えまくつて海に出た。今なら催眠はどんな能力よりも強いと断言できる。

そして、催眠術によつて色んな女を抱きまくり、様々なことを覚えた。催眠術は色んなことを可能にしてくれるんだ。

今、目の前にいるのは海賊専門の泥棒とかいうナミつて名前の女。乳はデカイし、顔もかわいい。正直言つてどストライクだ。だから、おれはこいつを手に入れることに決めた——。

「ワンツー・ジャンゴ！」

「あつ……♥」

催眠術をかけた瞬間、ナミの肩がビクンと震える。そして、彼女は惚けたような顔になつた。

「あつ ♥ あつ ♥ ご主人様あ ♥ ♥ 私はあなたの性奴隸よ ♥ ♥ この体を好きにしてえ ♥ ♥ 」

ナミはいそいそと衣服を脱ぎながら甘えたような口調でおれに話しかけてくる。

こうすれば犯すのは簡単だが、贅沢なモンでこんなことにはもう飽きちまつた。

一度、催眠状態にすると、あとは認識を弄りたい放題出来るんだ。だから、最近は色んなシチュエーションを楽しむことにしている。

「例えば——。」

「ワンツー・ジャンゴ！」

「きやつ!? な、なんで私は裸なの？ そ、そんなことはどうでもいいか。と、とにかくこいつの子供を何とか妊娠しないと——えいつ！」

「くつ、何をする！」

ナミは力いっぱいおれをベッドに押し倒して妖艶に笑つた。

そして、ズボンとパンツを脱がしておれの逸物を掴む。

「ふふつ、あなたの精子を奪つて妊娠してやるんだから覚悟しなさい。催眠術が効かな

くて残念ね。んむつ ♡ んちゅつ ♡ ちゅつ ♡ んちゅつ ♡」

ナミは一心不乱におれのブツを啄むように舌を這わせてきた。

彼女には“なんとしてでもおれの子供を妊娠しなくてはならない”という暗示をかけている。そして、気付いていないが、おれの命令には何でも従うという暗示も。

だからナミは意識を保つたまま、おれにフェラで奉仕してるのでだ。

「んぐうつ ♡ れろつ ♡ れろつ ♡ れろつ ♡ ちゅうつ ♡ れろおつ ♡ ふう、これだけ大きくなれば大丈夫ね。ふふつ……」

そして、彼女は美味しそうに逸物を舐めたかと思うと、おれに跨つて——自分の雌穴の入口にそれを当てて躊躇なく挿入した。

「んつ ♡ ……ふつ ♡ ……あんつ ♡ んんつ ♡ ——あああ ♡ あつ ♡ あつ ♡ ああんつ ♡」

「なんだ随分と気持ち良さそうにしてるな」

「あんつ ♡ あああつ ♡ う、うるさいわね ♡ 早く精子出しなさいよ ♡ あんつ ♡」

喘ぎながらも、キツとした目つきで私を睨んでくるナミ。

しかし、自分の行動に疑問は持たない。

「じゃあ、おっぱい揉んでもいい?」

「す、好きにすれば ♡ んつ ♡ ほら ♡」

おれの発言には絶対服従のナミは素直に豊かに育つたおっぱいを突き出して触りや

すいように体勢を変える。

「あつきり催眠術に引っかかりやがつて。どうせ頭に栄養が行かずにこつちの発育にばかりいつたんだろうな。なんだ、この牛みてエな乳は？ ほら、乳首がどうなつてんのか言つてみろ」

「あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ ピンピンに勃起してるだけでしょ ♪ それがなにか問題でも ♪ あんつ ♪ んんんつ ♪ ♪ ♪」

ナミの大きめの乳輪ごと勃起した乳首を乱暴に抓ると彼女の喘ぎ声は一層強くなつた。相変わらず生意気な態度であるが……。

「ほら、そんな腰使いいやいつまでも中に出してやれねエぞ。下手くそ」

「な、何ですつて ♪ あんつ ♪ ジやあこれでどう ♪ あつ ♪ あつ ♪ ダメつ ♪ あーーーつ ♪ つつつ ♪ ♪ ♪」

ナミは何としてでも中出しして欲しいと思つてるので懸命に腰を振る。しかし、催眠によつて発情状態となつたマンコは敏感になつており、彼女は快感に顔を歪めた。本人は違和感を感じておらず口調は強気のままだが……。

「イクときはちゃんと伝えろよ。それが常識だからな」

「ん、んんんつ ♪ 当たり前でしょ ♪ それくらい知つてるわよ ♪ ああんつ ♪ く、くるつ ♪ イく ♪ イくツ ♪ イくツ ♪ イつちやううううう ♪ ♪ ♪ んあああああ ♪ ♪ ♪ ♪」

ナミは騎乗位で腰をガンガン振りながら、絶頂を迎えた。

その瞬間に彼女のマンコは収縮しながらおれの逸物を刺激したが、何とかお楽しみのためにそれに耐える。

「なんだ、もうイッちまつたのか。どうする。このまま、諦めるか？」

「はあ、はあ、諦めるわけないでしょ、ほら、後ろから突いてちょうどだい。私のマンコに突っ込めるのよ。光榮でしょ」

ナミはおれに中出しをしてもらわなくてはならない義務感を持つてるので、お尻をこちらに突き出して、両手でくぱあといつたばかりの割れ目を開いて上から目線で挿入を促してきた。

さて、この女に立場つてモンをわからせなきやな。

「別におれはどうでもいいぜ。お前の臭いガキマンコなんか。もつとアピールしろや！」

「くつ……、お願ひしますから。私のこのグチョグチョになつた雌臭いクソガキ雑魚マソコにおちんちんを恵んでください！　こ、これでいい？　クソがつ」

彼女にアピールが足りないとダメ出しそると、ナミは顔を真つ赤にしながら頑張つて雌穴をパクパクとビクつかせながら、おねだりをする。

「最後が余計だが、まあ良いだろう。さつきの快感を5倍に上げてやろう」

「はあ、何それ？——つ！？ んひい♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥んはつつ♥こ、これ  
しゅごい♥イグうううう♥♥♥♥」

おれはナミを後ろから乱暴に突いてみる。すると、どうだろう。彼女は割れ目から愛液をピュツ♥と吹き出しながら簡単に絶頂まで持つていかかる。

暗示をかけて敏感になつたマンコはよく締まるので病みつきになるくらい気持ちいい。

「はあつ♥だめつ♥ま、またイクツ♥イクつ♥イクツ♥ああんつ♥イツクウウウ♥♥♥」  
「ほら、出して欲しいなら性奴隸になるつて宣言しろよ」

それから、おれはナミを何度もイカせ続けた。生意氣だつた態度は完全に無くなり、快感に屈服した彼女はただの淫乱なメスとなる。

「はひつ♥はひい♥性奴隸になりまひゆう♥らから奥にらひてせいひをくらさいいいい  
♥」

「イケッ！ ナミ！ 中出ししてやる！ お礼を言え！」

「はつひいいい♥イクツ♥イクイクイクううう♥ながらひ、ありがとうござひまひゆ  
う♥♥♥う、あああああんつつ♥♥♥」

心の底から性奴隸になりたいと願いながらナミは絶頂し、中に精子を出してもらえたことを感謝する。

まるで、命の恩人のごとく……。

そこからの彼女は可愛いものだつた。

「んむつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥……んむつ♥私のパイズリはどうかしら♥んむつ♥ん  
むつ♥私のおっぱいもマンコもアナルもお♥んむつ♥全部あなたのものよ♥ちゅつ  
ちゅつ♥ちゅつ♥」

ナミは身も心もおれの性奴隸となる。これでこいつもおれの仲間だ。  
こいつはおれに中出しをしてもらうためには何でもするし、それが自分の一番の幸せ  
だと感じるようになつた。

やつぱ、仲間は従順なメスじやねエとな。

ナミはおれの二人目の仲間になつた。えつ？ 一人目は誰かつて？

「ジャンゴさん♥おかえりなさい♥大好きつ♥ちゅつ♥」

「おう。カヤか。財産は全部金に変えておいたろうな？」

元上司のキヤブテン・クロが狙つてたお嬢様を貰つてやつた。

こいつの病気なんざ、催眠術で簡単に治りやがつたんだぜ。もう、この女の財産も心  
も全部おれのモンになつていてる。

「もちろんよ。あれは全部ジャンゴさんのモノだもの♥だからそのう♥」

カヤはナミを連れて船に帰ってきたおれに向かつて、下着を脱いでスカートを捲り、

腰を突き出しながら頬を赤くする。

「わかつてるつて、うちの大事な船医だからな。お前は。ちゃんと愛してやるよ」「ああつ・ああんつ・んんつ・ありがとう・気持ちいいわ・あんつ・」  
ゴーイングメリーアイ号の中で響き渡るカヤの艶声。

現在のジャンゴ海賊団の船員はおれを含めて三人。

船長である自分と、船医の勉強中のカヤ、そして航海士のナミである。  
とりあえず、気ままにグランドラインでも目指して楽しく旅をするぜ。  
なんせ催眠術は最強で無敵だからな。

# 船医力ヤと姉妹丼

「あんつ♥もつと激しく突いて♥ジャンゴさんつ♥あんつ♥はうんつ♥」  
おれはデツキで全裸になつて媚びるカヤの両腕を後ろから掴んで思いきりバツクから突いてやつている。

船はココヤシ村周辺の沖合いに停泊させ、こつちに向かつてくる魚人は適当にあしらつた。周りに誰もいない海の上で開放的になるは何とも楽しい。

「カヤはセツクスが好きなんだな」

「う、うん！ セツクスしゅき♥だつて気持ちいいんだもん♥あつ♥あつ♥あつ♥イ、イ  
クツ♥イクウウウ♥♥♥」

カヤは病弱だったのが嘘みたいに肉欲に溺れている。ナミも性欲は強い方だが彼女はそれを上回るほどエロい女になつた。命令しなくとも進んでいやらしいことをしてくれる彼女は何とも愛くるしい。

「幸せそうな顔しやがつて。ん？」

「ちゅぱつ♥ちゅつ♥んむつ♥んむつ♥ジャンゴ、次は私の番なんだから、早くそのちんぽ勃起させなさい♥」

カヤとのセックスを終えてひと息ついていると、ナミがおれの逸物にしゃぶり付き、手でしごき出していた。

どうやら、カヤとの情事を見てスイッチが入つたらしい。

「いや、今ヤツたばかりだし」

「はあ？ カヤだけなんて許さないわよ。こうなつたらおっぱいも使つて。じゅぼつ  
♥じゅぼつ♥♥んぐつ♥♥じゅぶつ♥♥じゅぼつ♥♥あはつ♥なんだ、まだビンビンに  
勃つじやない♥」

デカい乳で逸物を挟みムギュっと圧力をかけながらフェラをするという荒業でおれの逸物を見事に勃たせる。

ちくしょう。エロい体しやがつて。男に犯されるために生まれたような女だな。

「仕方ねエな。ケツこつちに向ける」

「これつ♥やばい♥ああああんつ♥♥ちんぽいいつ♥♥こんなの知らにやい♥♥あああ  
んつ♥♥んんんんつ♥♥んつふううう♥♥」

「お前はちんこ入れてるときだけ素直になるな」

ナミやカヤの基本的な人格に関してはおれはほとんど弄つてない。理由は従順過ぎてもつまらんからだ。

だから、ナミは結構生意気な感じになつていて。カヤはそれでも従順だが……。

もちろん命令には絶対服従だし、おれを一番大切にするように暗示をかけている。故に本気で反抗はしない。

「んつ♥あつ♥あつ♥仕方ないじやない♥あつ♥んんんつ♥はあんつ♥そんな体になつちゃつたんだもん♥んううう♥あつ♥イ、イク♥イグううううう♥♥♥♥はあんつ♥」

♥」

ナミは上に乗つて腰を振る、いわゆる騎乗位が好きだ。彼女はおれの上で存分にイキ狂い、マンコを締め付けておれの精子を存分に子宮へと吸い込んだ。

そして、おれの顔に触れながらトロンとした表情で顔を近づける。

「はあ♥はあ♥気持ち良かつた♥んんつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥」

「な、ナミさん。ズルいです。私もジャンゴさんとキスするんだからあ♥んつ♥ちゅつ

♥ちゅつ♥」

ナミがおれに何度もキスをしていると、カヤはそれを見て嫉妬をしながら彼女を押しのけて口づけをしだした。

カヤは完全に恋人気取りつて感じだな。それはそれで面白いからいいけど。

「こらこら、喧嘩すんな。仲良くしてろ。おれはちょっと魚人共に挨拶してくらア。お前らはそうだな。レズセックスでもしてな」

「はあい」

「んつ ♪ちゅつ ♪んちゅうつ ♪……♪ははつ ♪はあつ ♪はあつ ♪な、ナミさん ♪」

「んつ ♪ちゅつ ♪んむつ……、カヤつて結構上手いのね ♪んちゅうつ ♪」

おれの命令には絶対服従なのでナミとカヤは唇を重ねて、お互の秘所に指を入れながら慰め合う。

もう少し見ていたいけど、アーロンの野郎との用事を済ませておこう。

「やれやれ。性奴隸ナミを良いように使つていいのはおれだけだつづーの」

「ぐはつ……！ 下等なクソ人間がツ」

アーロンは腹を抑えて膝をついている。そして、他の魚人共には全員眠つてもらつていた。

とりあえず、アーロンは特にムカつくから一発腹をぶん殴つた。

「ああ……、下等で悪かつたなア。魚野郎ツ……」

「ごぼあアアアアツ！ はア……、はア……、て、てめエ知つてるぞ。〃1・2のジャンゴ〃だろ？ 懸賞金は確か900万ベリーの貧弱な催眠術師だつたはずだ……がハツ

……」

さらに蹴りをアーロンの顔面にくれてやると、奴は自慢の鼻がへし折れて壁にめり込む。そして、信じられないという表情でおれを見ていた。

どうやら、おれのパーソナルデータある程度は知つてゐるらしい。

「ほう。さすがに東の海イーストブルー」を支配しようとか身の程知らずなこと考えただけあつて、よくこつちの海賊について調べてるじやねエか。催眠術師が強くてなにが悪い？ 知つているか？ —— 強さつてのは、疑わないことだ。催眠術師てのはな、何でもできるって誰よりも信じることが出来るんだぜ」

「意味がわからんねエ……、げふツ……」

要するにおれは自己暗示で強くなつてゐる。それも並大抵の自己暗示じやねエ。覇氣や六式を完全にマスターした——最強の男だと信じ込んでゐるのだ。

おかげでおれは本当に強くなつた。アーロンなんて本氣で蹴ると死んじまうから加減する方が大変なくらいだ。

そう、おれは催眠術を敵に使わなくても十分に強い。まあ、大抵は催眠を使って樂して敵をあしらうけど。

おれはアーロンを死なない程度にいたぶる。プライドがズタズタになるように念入りに。

そして——。

「ここ」で、てめエラを殺るのも簡単なんだがよオ。あいつの生まれ育つた場所でひと悶着起こすのも面倒くせエ。てめエら全員、自首してこいや。ワンツー・ジャンゴ！」

「海軍に……、自首をしてくる……。あばよ……」

アーロン海賊団は自首させることにした。おれがケリを付けても良かつたが、この場所に海軍が押し寄せるのも面倒な気がしたからだ。

「さいなら。永久に……。んじや、戻つてナミでも抱いてやるか」

「あ、あんた何をしたんだい!?」

おれがメリーアー号に戻ろうと足を進めたとき、青紫色のウエーブがかつた髪で肩に入れ墨を入れたタンクトップの女が驚愕した表情でこちらを見ていた。

「んあつ？ アーロンに自首しろつて命令しただけだぜ。あんた。エロい体してんな」

「はあ？ アーロンが自首なんかするもんか。あり得ないね」

女は豊かに育つたバストに引き締まつたウエストをしていて、顔はいかにも生意気そ  
うな感じで実にそそられる。

アーロンの自首は当然信じていらないようだな……。

「それが本当なんだな。おれがワンツー・ジャンゴと唱えると、誰だつておれの言いなりさ。姉ちゃん。おっぱいを見せろ」

「なつ——!? バカなこと言うんじやないよツ！ ほら、おっぱいくらい好きに見れば良いじゃないか♥あ、あれ？」

女はタンクトップを脱ぎ去つて、ブラをペロンとずらして、胸を白日の元に晒す。彼女は自分の行動に驚いているみたいだ。

「ふむ。結構デカいな。乳首はオナニーで使つてるの？」

「んんつ♥触らないでツ！ オナニーのときは毎回、こうやつて弄つてるわよ♥ああんつ♥♥んつ♥んんつ♥♥——ツ？ な、なんで勝手に……」

色素の濃い茶色の乳首を抓みながらおれは女にオナニーについての質問をする。すると彼女はせつせと自分の乳首を弄りだして、甘い吐息を漏らしていた。  
ふーん。普段のオナニーではそうやって触るんだな……。

「なつ、おれの言うことなら何でも聞いちやうだろ？」

「わ、わかつたから、わかつたから♥ いつまで、乳首をいじらせるの？ んつ♥んんつ

♥♥」

彼女はようやくおれの言うことを信じると口にする。自分の乳首を指で抓んだり弾いたりしながら。

正気のまま弄ぶのも面白いんだよな。戸惑つている表情が何ともいえない。

「まあまあ。せつかくだし、一緒に触れ合おうぜ。セックスぐらいしてもいいだろ？」

「や、やめろ！ ふざけんな、そんなこと——お安い御用さ。ほら、ちんこ出しな。  
 ちゅつ♥ちゅつ♥んむつ♥んむつ♥ これでいいかい？ さつさと入れな♥ま、また体  
 が勝手に♥いや♥やめて♥ああんつ♥♥♥」  
 おれは女に性行為をするように促す。すると彼女は手早くおれの逸物にしゃぶりつき、それを勃たせる。

そしてズボンとショーツを脱いでいわゆるマンぐり返しの体勢になり、両手で割れ目を開いておれを誘つてきた。

おれはそんな彼女を思う存分犯す。何度も何度も絶頂させながら、この生意気そうな女を味わつた——。

「おう！ 帰つたぜ。あれま。そういうやレズセツクスの催眠かけっぱなしだったな」

「ああんつ♥いいつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥これ好きい♥はあん♥ナミさあん♥」  
 「んんつ♥カヤア♥好きよ♥ちゅうつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥」

何時間もの間、ずっと二人で愛し合つていたナミとカヤはまるで本物の恋人同士のよ

うに激しく交わっていた。

お互いがお互いの弱点を知り尽くし、イカせ合いをしており、デツキの上は二人の愛液の混ざった雌の匂いが漂っていた。

「な、ナミじゃない！　なんで、こんなところに!?　それにその子とその……。あんたがそういう性癖だつたなんて……」

「ふわあつ　♥　ノジコじやん　♥　ちゅつ　♥　こ、これはジャンゴの命令でえ　♥　んんつ　♥　あんつ　♥　あんつ　♥　ちがうのお　♥」

「ああ、お前ナミの姉のノジコか。名前聞いてなかつたぜ。ちようどいい。姉妹を交互に犯すつてのもおもしれエ」

さつきまで犯していた女がナミの義姉であるノジコだとおれはようやく気付いた。  
偶然つてあるんだな。こりやあ思つた以上に楽しめそうだ。

「なつ——!?　お前、ナミにも!？」

「当たり前だろ？　あんな男に媚びたような外見の女、性欲の発散に使わねエはずが  
ねエよ。ナミ、セツクスしてやるからこっちは来る」

ノジコはナミがおれの手元にいることで全てを察したらしい。

「うか、こんなやつと同じ空間にいて何もやらねエほうがどうかしてる。

「ほ、ホント　♥　やっぱカヤとだとここが切なくなつちやつて　♥　んちゅつ　♥　ほら、ここ触つ

て♥クチュクチュ音がするでしょ♥ずっと濡れっぱなしなの♥お願い、思い切り突いてえ♥♥」

ナミは自分の割れ目に中指と薬指を激しく出し入れしながらおれに近付いてきて、お尻を突き出しセツクスをねだつた。

最近は性行為をしようと誘うとナミもカヤも嬉しそうな顔をする。

「じゃあ、遠慮なく」

「ああああんつ♥♥イクイクううう♥♥ずっと溜まつてたから♥♥あああんつ♥♥また、イクう♥♥イクの止まらなあい♥♥」

よほどレズセツクスでもどかしい思いをしていたのか、彼女は腰を振る度に絶頂した。

中は天然のローションでヌルヌルになつており、締まりも強いので、ちょっと油断したら射精しそうになる。

「ナミ……！ 正気に戻つて！ こんなやつに媚びるような声を出すな！」

「じゃあ、ノジコもそろそろ性奴隸になるか？」

「うるさい！ ナミを元に戻せ！」

「それより、お前が近付いた方が早い。ワンツー・ジャンゴ」

そろそろノジコの反抗的な態度も飽きてきたおれは、さらに深い催眠をかけることに

した。

彼女の目は虚ろになり、惚けたような表情をする。

「んんつ♥私は性奴隸です♥粗末なオマンコですが使つてください♥」

ノジコはへらへらしたような笑みを浮かべて、全裸になつて一本の指で割れ目を開いた。

「じゃあ、こつちもつと媚びるようにおねだりしろ!」

「ノジコは粗末なダメマンコです♥♥でも頑張つて精子絞り取りますのでこのビチヨビチヨの雌穴を使つてください♥♥♥」

「そこまで言うなら仕方ないな使つてやるよ。入れてる間だけ本心を話せ」

おれはナミの中から逸物を抜いて、ノジコの中に入れて腰を振る。

ノジコの中におれの逸物が入つている間、彼女は頭で思つている本心を口出すように命令した。

「あああんつ♥♥♥く、悔しいに決まつてゐでしょつ♥あたしに力があれば殺したいくらゐ悔しいわつ♥でもつ♥気持ち良すぎて♥イつちやうのおお♥♥イグうううう♥♥

♥」

彼女は悔しがりながらもよがり狂い、快感に負けてすぐに絶頂する。

涙目になる彼女の顔はおれの嗜虐心をそそつた。

「ナミと血は繋がつてない」と聞いてたが、似たような声で鳴くなア。ナミなんて最近は手マンでもすぐにイクんだぜ。ほら」

「あんつ ♡ ♡ あんつ ♡ ♡ イクつ ♡ ♡ 雜魚マンコだからつ ♡ ♡ すぐに ♡ ♡ イグううう ♡」

ノジコの喘ぎ声がナミの喘ぎ方とそつくりだったので、確認がてらナミの雌穴に指を三本ほど入れて弄る。

その時の彼女の悦ぶ様子はやはり義姉とそつくりだつた。

「あんつ ♡ あつ ♡ あつ ♡ イクツ ♡ イクツ ♡ イグうううううつ ♡ ♡ ♡」

それがあまりにも面白かつたので、しばらくの間、二人同時に攻め続けて彼女らの鳴き声を堪能する。

この日から何日か、おれはこの場所に停泊させこの生意気な姉妹を味わい続けた――。

# 女剣士たしげ

「Z z z z z ……んあツ？ 誰だてめエ？」

「海賊、”1・2のジャンゴ”ですね。あなたを拘束します！」

「ここはローグタウン。おれはナミとカヤに買い物を任せてメリーア号のデッキで昼寝をしている。」

いよいよ、グランドラインは目前ということもあり、準備はきちんととかねエとな。  
まあ、んなこたアどうでもいい。目の前には黒髪のショートボブでメガネをかけた女  
が刀に手をかけながらおれに向かって何やら喚いている。こいつア誰だ……？

「おれア、誰だつて聞いてんだ。おれの命令に従い、オナニーしながら説明しな。ワン  
ツー・ジャンゴ！」

「何をバカなことを！ んつ ♥ ……んつ ♥ て、手が勝手に……んつ ♥ あつ ♥ んんつ ♥ わ、  
私は ♥ 海軍本部曹長のたしげです ♥ 不審な海賊船を見つけて ♥ あんつ ♥ 様子を見にき  
ましたつ ♥ あんつ ♥ ♥ わ、私に何をしたのですか ♥ あつ ♥ んんつ ♥ 」

たしげはガニ股になつて右手をズボンの中に入れて這わせ、左手はブラウスの中に入  
れていやらしく自分の胸を揉んだり乳首を転がしたりしながら、自分のことを説明しだ

した。

「ふうん。あんた海兵か。人前でオナるなんて、変態だな。普段からオナニーしまくつているんだろ?」

「それはあなたが何かしたから♥んつ♥ああつ♥♥オナニーは毎日しますが、あなたには関係ありません♥あんつ♥♥」

たしきはより一層激しく自分を慰めながら、毎日オナニーをしていることを告白する。

それがよほど恥ずかしかったのか耳の後ろまで真っ赤になつていた。

「イキたいならイつてもいいぜ。海軍らしくはつきり宣言するならな」

「は、はいい♥たしき曹長、イかせていただきますつ♥……んつ♥あんつ♥♥んんんつつ♥♥……あああつつつ♥♥♥♥イクつ♥イクつ♥んはあつ♥イつちやいまふうううう♥♥♥あんつ♥はつ!? 私はなんてことを……」

たしきはズボンとショーツを脱いで下半身を丸出しにして、腰を前に突き出しへグチュ♥と音を立てながら割れ目の中に指を出し入れする。

そして、敬礼をしながら情けない顔をして絶頂したことを大声で報告した。その姿は無様としか言いようがない。

「そんじや、自己紹介も終わつたことだし、真剣にセツクス勝負といこうじやないか。先にイつた方が負けでいいか?」

「の、望むところです。セツクスで海賊に負けるわけにはイキません! ——さあ準備は出来ました。かかつてきなさい ♥♥」

惚けた顔をしているたしきの頭の認識をさらに弄つておれは彼女にセツクス勝負を提案する。

すると彼女はブラウスとブラジャーも脱ぎ去つて素つ裸になり、尻を突き出してキリツとした表情でこちらを振り向き、右手の指で割れ目をくぱあと開き勇ましい声を上げた。

「たしきのマンコはチンコが入つた瞬間に絶頂が止まらなくなる……。ワンツー・ジャングツ!」

「な、何をバカなことを——————んつ ♥ んつツツツツツ ♥ ♥ ♥ にやにつ ♥ ♥ こりえつ ♥ ♥ ♥ イクツ ♥ ♥ ♥ イクイクイグウツ ♥ ♥ ♥ イつぢやい、ばあずうううううううう

♥ ♥ ♥ ♥ ♥

たしきの雌穴にグイツと逸物を挿入すると彼女はその瞬間に絶頂する。

彼女は獣みたいな叫び声を上げながら、ビクビクと痙攣して体を仰け反らせた。

「おいおい、瞬殺かよ。おもしれエ玩具が手に入つたなこりや。負けたんだから、謝れよ。土下座してな」

「わ、わかつてます。——私の負けです。雑魚マンコのクセに調子に乗つて申し訳ありませんでした。こ、これで満足ですか？」

たしきは屈辱に打ち震えながらも言われたとおりに土下座をして謝罪する。  
全裸で土下座までしたというのに、彼女の目はまだ死んでいなかつた。闘志はあるみたいだ。

へえ、根性はなかなかのモンだな。普通はこれだけやれば心が折れるんだが……。  
よし、気に入った。顔も好みだし、こいつを仲間にしてやろう。

「んじやあ、もう一回やるかい?」

「と、当然です。今度こそ、私のマンコであなたを倒します」

たしきは立ち上がり、ガニ股になつて腰を突き出す。そして両手で割れ目を抓んで広げながら、リベンジを誓つた。

——自分の武器はこの雌穴しかないと主張するようだ。

「じゃあ、今度はたしきが上に乗つてもいいぜ」

「後悔しますよ。今度こそ」

仰向けになつて寝転ぶと、彼女はおれに跨つて自分の割れ目に逸物をピタリと当て

る。

次は必ず勝つという強い意志を持ちながら。そのクソ真面目な表情が如何にも滑稽でおれは笑いそうになってしまった。

「たしきは、入れてるときだけ正気に戻るけどセツクスはやめられない」

そして——おれは彼女に再び暗示をかける。

「えつ ♪ 私は何を? ——ツツツツツ!?’ ひいいいつ ♪ な、なんで私、裸で ♪ ♪ あんつ ♪ 抜きなさい、んんつ ♪ あなた、私の体に ♪ んんつ ♪ 何をしたの!?’ あふんつ ♪ 」

たしきは逸物を自分の中に入れた瞬間にハツとした表情をして、自分の置かれた状況に驚愕する。しかし、セツクスは続けるように暗示をかけているで、腰は淫らに振り続けていた。

「そりやあ、おれのこと好きになつて貰おうと思つてさ」

「ああんつ ♪ ♪ そ、そんなことありえません ♪ ♪ んんつ ♪ ♪ 絶対にあなただけはつ ♪ んあつ ♪ ゆるしゃないいい ♪ ♪ 」

彼女はそんな状況に追いやつたおれに対して涙目になりながら怒り狂うも、快感が押し寄せて喘ぎ声は我慢できない。

「たしきはおれの精子を子宮で受けると、おれのことが好きでたまらなくなり、いつもちんぽのことしか考えられなくなる。今日からおれがお前の飼い主だ。ワンツー・ジヤン

「ゴ！」

「何をバカなことを♥♥あんつ♥♥んんつ♥♥だ、ダメツ♥♥氣を確かに持たないと♥で、でも♥♥これ以上は♥♥♥あああんつ♥♥♥イキますツ♥♥たしげの雑魚オマンコ、イッちやいますうううう♥♥♥」

最後の暗示をかけて間もなく、度重なる絶頂でイキやすくなっていたたしげは、あつけなく絶頂した。それに合わせて、おれは彼女の膣内に遠慮なく精液を流し込む。暗示の効果によつて、たしげはアヘ顔を晒しながらも幸せそうな顔をしていた。  
さて、ここから仕上げるぜ——。

「あんつ♥あんつ♥あんつ♥またイギますツ♥いやらしいたしげはすぐにイギまあああす♥♥♥ご主人様ア♥♥好きツ♥好きツ♥愛してまアすう♥♥んちゅつ♥♥ちゅつ♥♥ちゅつ♥♥」

三十分後、たしげは完全に堕ちていた。おれのことを誰よりも好きになつており、必死に腰を振りながら口づけをする。

すでに勇ましかつた女海兵の姿はなかつた。居るのはおれの上でいやらしく媚を売る淫乱なメスの姿だけである。

「お前は正義の海軍なんだろう？　これからどうする？」

「辞めますウ　海兵なんて辞めて奴隸になりますウ　イグウツ　またイッちやいますつ  
♥ ♥ ♥ 大好きなご主人様のための雌マンコにならせてください　♥ ♥ くうううつ  
うつ　♥ ♥ うつ　♥ あああつ　♥ ♥」

たしぎは海軍を辞めておれの性奴隸おんなになると心の底から誓つた。

何度も絶頂して、愛液を噴出しながら、涙を流しておれに尽くすと約束したのだ。

この瞬間、彼女はおれの仲間に加わった——。

「元海兵の女剣士か。暗示をかければそことこの働きはしてくれそうだな。ヘエ、ぼち  
ぼち良い刀を持つてるじやねエか」

「んぐつ　んぐつ　それは“時雨”という業物ですう　♥ ♥ うちゅつ　♥ んむつ　♥ ちゅぱつ  
♥ ♥」

たしぎは自分の刀を見ているおれの逸物を丁寧に舌で奉仕しながら、刀の説明をする。

業物か……。切れ味は良さそうだな。

「よし、たしぎ。お前に力を与えてやろう。海兵なら霸氣や六式は知つているな」「んむつ　ふはあ　♥ 知つています。使えませんが……」

彼女に戦闘用語の知識があるかどうか確認すると彼女はそれを肯定した。

知識があるなら、簡単だ。暗示さえかければたしげの戦闘力は跳ね上がる。

「いや、使えるぜ。たしげ、お前は今から霸気も六式も剣技も極めた、世界一の大剣豪だ。自分を信じろ、疑うな！ ワンツー・ジャンゴ！」

「ひうつ♥♥あああああつ♥♥——な、なんですか？ 体が軽いです。力が湧き上がります……。——ツ!? この気配はスモーカーさん？」

たしげにおける世界一の大剣豪になれるという暗示をかけた。やつたのはそれだけだ。

それで彼女はまたたく間に見聞色の霸気を使いこなし、敵の接近に気が付いたのである。

「スモーカー？ 海軍本部大佐の白獅のスモーカーか。そりやあ大物だな……。お前の上司か……」

「い、今は上司ではないです。ご主人様の性奴隸ですから」

たしげは上司という言葉を否定して甘えるようにおれの腕に自分の胸を押し付ける。なかなか男に媚びる才能がある女じやないか……。

海軍本部大佐のスモーカーのことは知っている。ロギア系のモクモクの実の能力者で、イーストブルーで無双してる男だ。

まあ、覇気がなきや弱点を突くしか倒す手段が無いやつだからこつちなら無敵に近い戦力だろう。

「たしきイ!!　てめエこんなところでナニしてやがる！　大方、そこの催眠術師に操られてんのだろうが情けないヤツだぜ！」

「たしき、命令だ。スマーカーを仕留めろ」

「承知致しました。ご主人様……」

おれが催眠で適当にあしらつても良かつたが、たしきの強さも見たかっだし。何より、全裸で戦う女剣士つてシチュエーションも楽しいから、おれは彼女に戦わせることにした。

形の良い乳房をぷるん♪と揺らしながら、たしきは愛刀の時雨を掴んで立ち上がる。なかなか面白いショードになりそうだ。

「ちつ！　同士討ちさせるたア陰湿な野郎だ！」

「スマーカー、忠告するぜ。本氣でやらなきや——」

「てめエを先に殺ればたしきは元に——なつ!?」

「斬時雨ツ——!!」

スマーカーは油断していた。たしきが弱いと思い込んでいたから……。

しかし、ヤツがおれを狙おうと体を煙に変えて突っ込んで来ようとしたとき——たし

ぎは既にスモーカーを斬り終えていた——。ありやあ、六式の剃そるを使つて高速移動したな……。

強力な武装色の霸氣により黒光りする刀はロギア系の能力者でもお構いなしに斬り伏せる。

おれの催眠術のすげエ便利なのは暗示だけで本当に仲間を強化出来ちまうところだ。もちろん素の力にも影響するが、たしげは有能みたいでスモーカーを一蹴するほどの強さを手に入れたようだ。

ちなみにナミとカヤにも強くなる催眠は施してある。霸氣や六式の理屈を教えた上で。

自分で自分を守るくらいの強さがあるからこそ、おれは二人に買い物を頼んだのである。

「——ぐはツ!? バ……力なア……!?

「やられるぜって、もう終わつたか……。たしげは行方不明つてことにしろ。ここに居ることは、誰にも喋るな。ワンツー・ジャンゴ。——まあ、いつかはバレるだろうが……面倒はなるべく後回しにしてエ」

おれはスモーカーに命令に従うように暗示をかけて、生かして返すこととした。

海軍なんざ敵じやねエかもしけねエが、内部におれの息がかかつた人間を忍ばせてお

けば、もしものときに何か使えるかもしけねエからだ。

これからグランドラインに入るんだ。何かあつたときにのための用心はするに越したことはねエ。

てなわけで、新たに剣士たしげを仲間に加えたジャンゴ海賊団はグランドラインを目指して出港した……。

「さてと、新入りもいることだし、改めて自己紹介しな」

「はい♥セツクス大好き♥チンポ大好き♥エツチな船医のカヤです♥♥♥」

カヤはピンク色のナース服を着て自己紹介する。簡単にショーツが見えるくらい短いミニスカートがエロさを際立てていた。

「年中発情している♥んつ♥淫乱マンコの航海士♥ナミよ♥♥んんつ♥」

ナミは露出度の高いヘソまで丸見えのタンクトップに、ショートパンツ姿で胸を強調しながら揉みしだき自己紹介する。今日はノーブラみたいだな……。

「ご主人様の精子をもらうためならあ♥何でもします♥性奴隸剣士のたしげは♥いつでもオマンコの準備万端です♥♥♥」

たしげはブラウスにパンツスタイルで露出度の少ない格好だが、首輪を付けており、今は見えないが乳首とクリトリスにはピアスが付いていた。

彼女はおれを悦ばせることに生き甲斐を感じて いるようだ。  
この三人と共に おれはグランドラインに入つた。さて、次はどんなやつが仲間になる  
だろうか——。

# 王女ビビ

「いやアでけエクジラにや驚いたな」

「ええ、驚いたわね♥んつ♥ああんつ♥もう、ジャンゴさんのエツチ♥」  
 「んつ♥んんつ♥あんつ♥ご主人様ア♥」

船はナミに留守番を任せて、おれはグランドラインに入つて最初の島を散策する。

カヤとたしげを先に歩かせて、おれはノーパンのカヤの割れ目の中やブラウス一枚で  
 ノーブラのたしげの乳首を弄りながら歩いていた。

「たしか、こつからいくつかのルートに分かれるんだつたつけな。グランドラインつて  
 のは」

「そ、そなんだ♥んんんつ♥さすがジャンゴさん♥下調べはしているのね♥あんつ♥  
 もうそんなにクチュクチュ音を立てないでえ♥♥♥」

カヤの雌穴は既に愛液をダラダラ垂らしており、太腿を濡らしている。外に居るのに  
 近くに人がいれば臭いでバレるくらい発情してるな。

「グランドラインを進むなら♥あひつ♥慎重に♥はあんつ♥ルートを考えなきやイケ  
 ないですつ♥だ、ダメ♥欲しくなつちやう♥♥♥」

たしきは内股になりモジモジしながら甘い声を漏らした。

「なんだ、たしきはセツクスがしたくなつたのか？」

「は、はい♥ああんつ♥船に戻つたらお情けをください♥ご主人様あ♥んあつ♥♥」  
辛抱が出来なくなつたたしきは船に戻つたあとにセツクスをして欲しいとせがむ。  
ふーん。そんなにヤリてエのか。

「じゃあここでヤルか？ 下脱いだら入れてやるぜ」

「えつ？ ここでですかあ♥そ、それはさすがに♥んんつ♥♥」

たしきは外でするのが恥ずかしいらしく、躊躇した。まあ、性奴隸になつて日が浅い  
し基本的な人格は弄つてないから仕方ねエ。そのほうが唆るし。

「じゃあカヤでいいや。おい」

「はい♥ジャンゴさん♥私のオマンコでよかつたらどうぞ♥♥♥」

カヤはニコリと微笑んでノーパンのミニスカートを捲くつて尻を突き出した。その  
カヤの様子をたしきは赤面して見ている。

「ああつ♥ああんつ♥んんんつ♥お外でするの気持ちいいわあ♥ジャンゴさん♥あ  
んつ♥」

おれとカヤは灯台の近くでセツクスに励む。カヤとは一番長い付き合いだから至る  
ところでヤリまくつた。人通りの多い町中で素っ裸にして犯したりした時はさすがに

恥ずかしがつて泣いたつけな。

今はどんな時でも何処でもセックスが出来るくらいに調教されている。

「おらつ出すぐぞ！」

「う、うん！ 中に出して♥ジャンゴさんの赤ちゃんの素♥カヤの中に出してエエ♥♥

♥あつ♥あつ♥イ、イクツ♥イクウウウ♥♥♥」

カヤの子宮に精液をドクドクと注いで、おれはひと心地ついた。手頃なマンコを持ち歩けるなんて催眠術様々だぜ。

「あ、あのう。ご主人様ア♥わ、私にもください……♥そ、そのう♥おちんぽ様を……♥」

♥」

気付けば顔を真っ赤にしていた、たしづがふるふる震えながら下半身を露出して割れ目を両手で開いていた。仕方ねエヤツだな。2回戦も外でするつもりじゃなかつたんだが。

「んはつ♥あつ♥あつ♥あつ♥んんんつ♥これすごいですう♥ああんつ♥♥」

「まつたく。さつきまで恥ずかしがつていたつていうのに」

「あつ♥そ、それは言わないでください♥まだ恥ずかしいんですよ♥ご主人さまあ♥あんつ♥♥」

外だと言うことに意識を向けるとたしづの雌穴はギュツと締まつた。どうやら羞恥

心によつてより興奮しているようだ。

「ああんつ ♡ ちんぽ様 ♡ しゅごすぎますつ ♡ ♡ もつもうイキそ�です ♡ ♡ い、イギます  
♥ ♥ たしづぎイキますつ ♡ ♡ んんんんつ ♡ ♡ んつぶううう ♡ ♡」

たしづぎは敬礼しながら絶頂を宣言してイキ散らす。おれがイクときに敬礼したのが面白いと言つたら、こいつは律儀に出来るだけリクエストに沿つてくれるのだ。

鼻息を荒くして敬礼しながら精子をゴボツ ♡ と割れ目から垂れ流す彼女は無様で可愛かつた。

「おう。満足したか？」

「ひやい♥ ありがとうございます♥ ♥」

中出しされたあとのたしづぎは幸せそうな笑みを浮かべて頷く。よしよし、これからちよつとずつ変態になろうな。

「おいおい、ミス・ウエンズデー。随分と開放的な連中だな」

「え、ええ。そうね……、恥ずかしくないのかしら……」

カヤとたしづぎとヤツてるところはバツチリ誰かに見られている。見聞色の覇氣でこちらを見ている奴らが一人いるのはずつと感じっていて、そいつらがようやく動き出した

みたいだ。それにしても——。

「カヤ……、覗き見してゐる奴らがいるの気付いてたか?」

「ええ。気付いてたけど、ジャンゴさんつて見せるの好きじやなかつた?」

「そのとおりだ。だけどな。あつちの青い髪の女。なかなか唆るタイプだ。ちよつと遊んでやりたい」

「もう。私にそんなこと言つて意地悪な人。いいわ。私が連れてくるから。たしぎさんも待つていてください」

カヤはそう一言告げて、剃そるを使つて見物してた不届き者のところに向かつた。

「クソッ! 体が動かねエ。何しやがつた!?

「か、髪留めが壊れちゃつたわ。何すんのよ。ミス・ナース道!」

カヤは体が痺れて動けなくなつてゐる二人を引つ張つてこちらに來た。彼女は目にな  
止まらぬスピードで動いて、あらゆる薬物を注射する戦法を得意としている。

皮膚が固くても注射針を武装色硬化して確実に血管に薬物を流し込むから一撃必殺的  
的な強さがある。なので、ある意味たしげよりも強い。  
痺れ薬を使つたな……。手際がイイやつだ。

「よしよし、いい子だ。よくやつた」

「もちろんよ。好きな人のために動くのは当然だから」

カヤはニコリと笑つて青髪の女をおれに差し出した。ああ、王冠かぶつての間抜けそ  
うな奴は海に捨てていinez。

「むつ。わ、私だつてご主人様のこと」

「わかつてゐるから、嫉妬すんな。仲良くな」

「んつ・わ、わかりました♥」

カヤに嫉妬するたしづの胸をひと揉みすると、彼女は素直に引き下がつた。

「くつ……、何をするつもり!?」

青髪の女は強がつていたが目の怯えは隠せてない。髪留めが外れてわかつたが、こい  
つは相当な上玉じやねエか。

さすがカヤだ。それを見抜いておれの為にわざと髪留めを壊しやがつたな。カヤと  
同様、育ちの良いお嬢様つて感じだぜ。

「や、やめなさい。何をするつもりかわからないけど。触らないで……」

「何をするつもりわからない？　おれは海賊なんだ。そして、お前は若い女。だつたら  
ヤルことは一つだろ？」

「いやッ！　いやああああッ！」

おれはチャクラムで彼女の変なグルグル模様の衣服を破いた。ほう、胸はまあまあデ  
力いじやねエか。女は恐怖で顔を歪めて涙目になつて叫び出す。

「んじや、触り心地はどうかな？」

「ああんつ♥――えつ!? や、やめて!」

ちよつと胸を揉むと女は甘い声をだした。随分と敏感になつてンな……。なるほど  
……。カヤのヤツ媚薬まで使つたな……。

女は自分が快感に耐えきれずに声を出したことに驚いている。

「へえ、随分とエロい声を出すんだな」

「んふつ♥んんつ♥♥やめなさい♥そこを触らないでつ♥♥ああんつ♥♥ど、どうして  
こんなつ♥」

おれが彼女のピンク色の乳首をちよつと指で弄ると、ビンビンに固く勃起してツンと  
前を向く。

女も声を我慢しようとしたが全く我慢出来ないみたいだ。

「んじや、下も確かめるとするか」

「ちよつと! そんなとこ! んんつ♥♥」

さらにおれはショートパンツとショーツを脱がして、彼女のあまり使い込まれて無さ  
そうな割れ目を開いてみる。

へえ、処女だつたか……。意外だな……。こういう所もカヤと似てる。箱入り娘っぽいというか……。

「いやあ♥本当にやめなさい♥んあつ♥♥んんんつ♥♥」

感度は上がつており、割れ目の中はキツそุดつたが愛液が溢れ出て彼女の太腿を伝わつていやらしい匂いを放つ。

指でくちゅ♥くちゅ♥と少し弄り回すと、粘り気の帯びた糸を引いたマン汁が指にこびりついた。

「クンクン。すげエメス臭せエな」

「そんなの嗅がないで！ ああんつ♥♥」

女は赤面して自分の愛液に塗れたおれの指を見る。生娘らしい反応がいちいち面白い。

「んじや遊ぶのは後にして、とりあえずこのガキマンコを大人にしてやるか」

「……ッ！ お、お願ひします。お願ひします。それだけはどうか……」

女は涙目になつて懇願する。処女を奪うのはやめて欲しいと。そりやあそудよな

……。

「わかつた。止めといてやるよ」

「……ほ、本当ですか」

おれが止めると口にすると、彼女は安堵した表情をした。だが、おれはその瞬間に彼女の膣内に強引にブツをねじ込む。

「嘘……に決まつてンだろ」

「えつ？——ツツツツ！？ うあツ！ あああああツツツツ！」

女は痛みと絶望に涙して絶叫した。ブチツという感触を味わうと、彼女が大人になつた証拠の破瓜の血が流れる。

「い、いたいツ！ こ、このクソ屑野郎……、許さない！」

おれを凄まじい表情で睨みつける女。気が強工な。顔もめつちや可愛いし。よし、こいつも性奴隸なつかまに入れてやるか。

「悪かった。悪かった。死ぬほど気持ちよくしてやるから、許してくれや。お前のマンコは突けば突くほど、脳揺さぶられるほどの快感を得る。ワンツー・ジャンゴ！」

「何をバカな……んんつ♥んつ♥あつつ♥んつ♥んつ♥」

おれは暗示で女の快感を徐々に強めるようにしてやる。すると彼女はだんだん甘い声を出すようになつた。

「可愛い声出すようになつたじやねエか。気持ちいいのか？」

「そんなわけない♥ふあつ♥あつ♥気持ちよくなんか♥あんつ♥んんんつ♥♥」

女は強がるが、喘ぎ声は消せない。ドンドン快感が増していく膣の締付けも強く

なってきた。

「これからおれの質問には全部正直に答える。命令には全て従え。気持ちよくなつていいだろ？」

「気持ちいいです♥あつ♥あつ♥オマンコ気持ちいい♥あんつ♥あふんつ♥♥なんでも♥私、そんなこと♥」

女は今度は素直に質問に答える。そうそう、性奴隸なまかまにするなら名前くらい聞かねエとな。

「んじやあ仲良くなつたところで自己紹介しろ。喘ぎ声はよく聞かせてくれよな」

「んつ♥んつ♥あつ♥わ、私の名前はネフェルタリ・ビビ♥んつ♥アラバスタ王国の王女で16歳です♥ふあつ♥あつ♥んつ♥あんつ♥」

女は言われたとおりに艶声を響かせて、自己紹介をする。ふーんビビって名前で16歳か……。やつぱ見た目通り若い——つて何か今、スゲエこと言つたなこいつ。

「はあ？ 王女オ？ 嘘はつけねエし、ホントなんだろうな。意味わかんねエ。まあいい。あとは感じる場所とオナニーの頻度くらいは答えでもらおうか」

おれの催眠で質問に答えてる以上、こいつは本当にアラバスタつて国の王女様なんだろう。

お嬢様っぽいって思つてたが王女とはな……。それは後で詳しく聞くとして、おれは

彼女に質問を続けた。

「んあつ♥あつ♥あつ♥あつ♥か、感じるところは乳首とクリトリスとえつと、お尻の穴です♥♥んんんつ♥♥オナニーは♥んつ♥週に2回くらいで♥ああんつ♥昨日の夜も寝る前にしましたア♥♥ふうつ♥あんつ♥ぜ、全部言っちゃつたあ♥王女つてことも♥んんつ♥恥ずかしいことも♥んんんつ♥♥」

ビビは王女とはバラしたくなかったらしく、悲しそうな顔をした。痺れ薬の効果はとっくにキレているのに抵抗する気力ももはやないみたいだ。

「よし、ちゃんと話せたご褒美にイカせてやろう。イクときはちゃんと口で伝えろよ。ビビの体は快感が一気に膨らむ。ワンツー・ジャンゴ！」

「そんな簡単にイクわけ……ああん♥なにこれ♥あつ♥あつ♥んんんつ♥♥急に体があつ♥あつ♥あつ♥やだ♥ビビ、イキますつ♥イクツ♥♥イクツ♥♥イクツ♥♥イツクうううううううううう♥♥……ツツ♥♥♥……ツツツ♥♥♥……んはあつ♥はあつ♥はあつ♥はあつ♥」

とりあえず調教しやすいように一度イカせる。ビビはマンコをギュうううと凄まじい隣圧をおれの逸物にかけながら、仰け反つて絶頂した。あまりにも締付け方がエグいので、おれも思わず射精したほどだ。

なんだ、こいつのマンコ……。世継ぎを残すのが王女としての使命なのか知らねエが

子種を吸い込む力がスゲエぞ。

「えつ？ お、お腹が熱い？ あつ……♥」

「ああ、良かつたぞ。お前の中。もうちょい我慢するつもりが射精しちまつた」「いやあああっ！ そ、そんな……、中に……」

ビビは我に返つて、中出しされたことに対する顔を青くする。

そんじやあ、こんなことどうでも良くなるようにしてやる。それが優しさだ。

「じゃあ、2回戦開始な」

「や、やめ…………んつ♥んつ♥んあつ♥あつ♥あつ♥あつ♥うそ、さつきより♥♥」

ビビは最初よりも数段快感が強くなっていることに驚いているようだ。

さて、もう一回くらいヤツたらメリーオ号にもどつて時間をかけて——。

「イキましゅううう♥あつ♥あつ♥んんんん♥これしゅき♥あつ♥あつ♥あんつ♥もつと突いてえええ♥また、イグツ♥♥イグうううう♥はあ♥はあ♥んんんつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥ジヤンゴさあん♥気持ちいいです♥♥んあつ♥んつ♥んんつ♥♥あ

あんつ  
♥ ♥ ♥」

2時間後、おれの上で淫らに腰を振るビビが居た。すっかりとおれの逸物の形を覚えた彼女のマンコは快感の虜となり、夢中になつて精子を吸取ろうとする。

暇つぶしに、オナニーをさせながら王女がなぜこんな所にいるのかと質問したところ、国が乗つ取られかけているという話を聞いた。

首謀者は王下七武海のクロコダイルで、バロツクワーワークスとかいう秘密犯罪結社を作つて色々な工作をして反乱を意図的に起こしたのだそうだ。

このままでは戦争が起こつて、国はクロコダイルの物になつてしまふ——王女の身分にも関わらずバロツクワーワークスに潜入したビビはこの事実をようやく掴んだところだつたらしい。

そして、バロツクワーワークスの仕事をしつつ国に戻る機会を窺つていたのだそうだ。

まさか、そんな面白エヤツと知り合うなんてな。王女と国を手に入れるようなチャンスがグランドラインに着て早々手に入るとは思わなかつたぜ。

「よし、ビビ。中に出して欲しいか?」

「はひつ ♥ ♥ 中にだひにくらはいつ ♥ ♥ わたひのなかにつ ♥ ♥ ジヤンゴさんの優秀な精子をつ ♥ ♥ ビビも一緒にイキばす ♥ わらひをにんひんさせてくらはいいい ♥ ♥」

呂律が回らないビビは自ら進んで中出しをせがむようになつた。なかま 性奴隸は全員、おれ

の精子を体内に入れるこ<sub>ト</sub>を最も幸福に感じるように脳内の認識を弄つてゐるから当然だが……。

「じゃあ、おれの性奴隸になるこ<sub>ト</sub>を宣言しろ」

「わ、わかりましたあ ♥ ♥ アラバスタ王国の王女、ネフェルタリ・ビビはジャンゴさんの性奴隸です ♥ ビビの口もマンコもアナルも全部ジャンゴさんのものです ♥ ♥ 便所にイク感覺で私の肉便器を使つてください ♥ ♥ ♥」

ビビはおれに跨りながら右手を上げて性奴隸になる宣言をした。  
幸せそうな表情でいやらしく媚びるように笑つて――。

「じゃあ、イカせてやろう。イクぞ」

「はひいいつ ♥ あつ ♥ あんつ ♥ んつ ♥ んんつ ♥ イクツ ♥ ♥ イクツ ♥ ♥ イグうううううううう ♥ ♥ ♥ ♥」

そして彼女はそのまま絶頂した。右手を上げて奴隸になると宣言をしたボーズのままで。

なかなか見どころのある性奴隸だぞ。こいつは……。

「ラブーンが頭を打ちつけなくなつた……。お前、何かしたのか？」

「んあつ？ あのクジラか。ガンガンうるさかつたから、催眠術で暗示をかけて黙らせたぞ。人の言葉を理解するとは思わなかつたから、ダメ元だつたけど」

「そ、そなうか。すまんな。あいつを狙う暴漢を退治してくれた上に、ラブーンを助けてもらえるなんて」

「いや、うるさいから黙らせただけだし、暴漢の女の方はおれの好みだつただけだし」「はつはつ、そういうことにしといてやろう。グランドラインを進むなら、これを持つていきなさい」

なんか、馬鹿でかいクジラを黙らせて、王女を性奴隸にしたら、この灯台守のじいさんには感謝されてログポース貰つた。

ローグタウンで買い忘れていて焦つてたから良かつたぜ。さつそくナミに渡しておこう。

「じゃあ、ビビの国はおれが助けてやろう」

「ほ、本当ですか？ ジャンゴさん」

「七武海程度だつたら、どうにでもなる。おれは性奴隸なつかまを泣かすヤツア許せねエからな」「あ、ありがとうございます。んんつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥」

おれがアラバスター王国を助けると言葉をかけるとビビは涙ぐみながらおれに抱きついて、背伸びしてキスをする。

すっかりと従順になつたもんだ。これからも可愛がつてやる。

進路はビビの護衛のイガラムとかいうヤツがいるウイスキーーク。

どうやら、賞金稼ぎが蔓延る町らしいが関係ねエ。どこでだつて女さえいればおれア楽しめる。

今夜はカヤ、ナミ、たしげ、ビビ、どの穴を使つてやろうかね——。

# 運び屋ミキータ

「び、ビビ様……、これは……」

イガラムとかいうオッサンが目を丸くして驚いている。

ウイスキー一ピードでおれらを狙う賞金稼ぎ共を一瞬で全滅させたからだ。

「イガラム。私、この方たちに國を救つてもらうわ。すごい人たちなの」

「す、すごいのは……、見ればわかります。全員がオフィサー・エージェント、いやそれ以上のこと。しかし、ビビ様、そのう。その男と腕を組んで居られますが、ええーっと、まさか……。それに格好もまた露出が多いというか……。際にどいというか……。それに使用者のような服装は王女として——」

イガラムはおれらの戦闘力に驚く以上にビビの格好と態度に驚いていた。

ビビの服は破いちまつたから、とりあえずローグタウンで買わせた胸元がぱっくり開いたメイド服を着させている。

スカートもヒラヒラしてて短いから実際にエロい……。何より、彼女はおれの腕に抱きついており、恋人のようにうつとりとした顔をして寄り添っている。

王女がこんな態度なら、変に思うのは仕方ねエだろう。

「うん！ 私、ジャンゴさんの肉便器なの！」

ビビは満面の笑みで幸せそうに自分のことを肉便器だと答えた。

「ムギュっとおれの腕に胸を押し付けながら。

「——はア？ どうやら私は疲れているらしい。あのビビ様が卑猥なことなど……」

「ジャンゴさんのセツクスつて凄いのよ♥私、何回も中出しされちゃつて、もうオマンコなんかジャンゴさんのオチンポ様の形になつちやつた♥さつきもズコバコ突いてもらつたから♥今もぐつしより濡れてるの♥」

イガラムは頭を押さえたが、ビビはさらにうつとりとした表情で性行為について赤裸々に語つた。

あーあ、こりやイガラム怒るだろうな。

「き、貴様ア！ ビビ様に何をしたア！」

「おれらの行動に違和感を感じなくなる。ワンツー・ジャンゴ！」

予想してたとおり、おれに危害を加えようとしたので、先手を打つて催眠術をかけておいた。

これでとりあえず、円滑に話が進むだろう。

「どうしたの？ イガラム。私がジャンゴさんの性奴隸なのが、そんなにおかしい？」

「いえ、なるほど。性奴隸でしたか。それなら、問題ありません」

イガラムはホツと肩を撫でおろして、安堵の表情を見せた。

こいつをボコつても問題ねエんだが、特に恨みはねエし、ビビの世話係だつたみたいだからな……。

「問題ねエなら良かつたぜ。ビビはノーパンだから、こうやつて、すぐにセックスしてやれるから安心しな」

「あんつ♥いきなり突くなんて♥でもつ♥♥気持ちいいですつ♥♥んんつ♥♥あああんつ♥♥チンポ気持ちいいですつ♥♥」

ビビのマンコにおれがおもむろに逸物をぶち込むと彼女は嬉しそうな顔して体をくねらせた。

こつちに着くまで散々イカせまくつていたから、中は十分に濡れていて突く度にジユポ♥ジユポ♥と音を立てながらマン汁を地面に撒き散らす。

「なるほど、そうやつてビビ様を悦ばせて下さつてるということですね。感謝に耐えません」

「ははっ、良いつてことよ。ログが貯まるまで、適当に遊んどく。食料やらの物資は適当に船に乗せといてくれ」

「あんつ♥♥イガラム、私はセックスで忙しいからあ♥お願ひね♥イクうううう♥♥ん

んんんつ  
♥♥♥—

「しょ、承知いたしました」

イガラムは目の前で王女が犯されているのを見ても、平気な顔をしてビビに頭を下げて出港の準備を進めた。

ありつたけの物資を略奪させて、さっさとこんな辛氣臭い町から出発しよう。  
「ちよつと、ジャンゴ。最近、王女様ばかりなんだから。私のオマンコも使いなさいよね♥ほら、こんなに涎を垂らしてるので♥♥あんたが発情させっぱなしにするから♥

♥」

「ホントだ。すげエ、濡れてんじyan。今日は何回イつたんだ？」

ビビとのセックスを終えたおれにナミが不満そうな顔をして割れ目をパクパクと開いたり閉じたりして愛液が止まらないと主張する。

確かにここに来るまで、ビビに構いつぱなしだったな。

ナミは知らない内に何回も自分で弄っているみたいだ。

「10回くらいはイつたわね♥オナニーして、カヤとレズセックスして、そのあと、またオナつたの♥」

「おいおい。そんだけイつて足りねエつてか？」

「んつ♥ああんつ♥そ、そうよ♥あなたのチンポじやなきや♥あつ♥んんんつ♥満足で

きないんだもん♥♥これよこれ♥ああんつ♥♥♥」

ナミがオナニーしまくつたり、カヤに慰めてもらつた話を聞いたおれは堪らなくなつて、彼女の腰を掴んでガンガンと乱暴に突いてやる。

彼女はマンコをキュン♥と締めながら嬉しそうな嬉しそうな声を出した。

「ご主人様ア♥キスしてください♥んんつ♥ちゅつ♥♥」

「ジャンゴさん♥私も待つてから早くシテね♥♥」

「おうおう、たしづとカヤも溜まつてみてエだな。任せろや。満足させてやるからよオ」

ナミとセックストしている最中に我慢出来なくなつたのか、たしづとカヤが甘えるような声で迫つてくる。

とりあえず、酒をメリーオ号に乗せたら中でパーティと遊んどくか。

「すげエ臭いだな。酒池肉林の宴でもしてんのか？ こここの連中」

「キヤハツ！ 肉欲を発散することぐらいしかここじやあ娯楽なんてないモンね。それ

でも王女様がこんなにヨガつているなんて思わなかつたわ。キヤハハツ！」

夜になつてそろそろログが溜まるかと思つていたとき、メリーア号に二人の男女がデッキに入つてきた。

確かに、昼間から夜までずっと酒飲んでやりまくつていたからこの辺は酒とおれらの体液の臭いが入り混じつて酷いことになつてゐる。

レモンの服を着てる姉ちゃんは割と可愛いじやねエか。

こつちに来て上玉と出会う確率が上がつてきたな。

「ひぎいつ♥ああんつ♥ケツマンコ気持ちいいですっ♥あ、あなたたちはMr. 5とミス・バレンタイン♥ツツツツ♥んほおつ♥私が王女つてなぜ♥♥イクつ♥♥」

「この状況でよく遊んでられるなてめエラ。ボスがお前に秘密を知られたとお怒りだ」「そして、あんたのことをよくよく調べたら、わかっちゃつたのよねえ。キヤハツ！」ミス・ウェンズデーはアラバスター王国の王女様だつて

どうやらこいつらは二人ともバロックワークスから来た刺客でビビの正体に気付いてるらしい。

はあ、なるほどな。それでビビのことを消しに来たというわけか。

ビビがこいつら見ても一向にアナルセックスを止めねエからワカメ頭の野郎が苛ついてるな。

「ち、違うわ♥私はジャンゴさんの♥性奴隸よ♥♥」

「キヤハハツ！ 無様ねえ。完全に海賊なんかに調教されてるじゃない」

「どうでもいい。さつさとこいつらを殺——ツ！？ ぐべぼツ！」

「何？ このワカメ頭。倒しても良かつたんでしょう？」

「ああ、問題ねエよ。よくやつた。ナミ」

ビビの恥態に目を奪われて油断していたMr. 5とかいう雑魚グラサンはナミの棒術によつて一撃で昏倒する。

何しに来たんだ？ こいつ……。とりあえず、捨てとくか……。

「ちよつと、Mr. 5！ 何、不意討ちで倒れてるのよ！」

「ほう。へらへら笑つてるお前。ちよつぴり可愛いじやねエか」

「キヤハツ！ まさか、私を口説こうとしてんの？ 身の程知らずは地面に埋めるわよ」

相方がやられてもキヤハキヤハ笑つてる金髪の女は腕に自信があるのか強気な態度を崩さなかつた。

こりやあいい。やつぱ女は生きの良い奴を食べるに限る。ビビを後ろに下げておれは女と対峙した。

「おれア気の強くて生意氣な女か大好物だ。——今からお前はおれに絶対服従な。そして、精子を奪い取ることにしか全力が出せなくなる。ワンツー・ジャンゴ！」

「はあ？ 何言つてんの？ 雑魚が鬱陶しいんだけど！ 痛い目みせてやるわ！ キヤハハツ！」

おれが催眠をかけると女はおもむろにショーツを脱いで投げ捨てる。

見た感じこの女はSつ気が強いヤツだ。相手を痛いぶつて反応を見るような趣味がある奴なんだろう。

「ヘエ。パンツ脱いでそれからどうするつもりなんだ？ お前は……」

「キヤハハ！ レイプに決まってるでしょ!? 捕まえた。キロキロの実の能力で犯してあげる♥♥」

女はおれの肩を掴み体重をグンと上昇させる。

悪魔の実の能力者か。面白れエ……。

「おおつと、体重を自在に変化させることが出来るつてわけか。重さを上げて押し倒されると動けねエ」

「そうよ。ほら、情けなく押し倒されている、あんたの勃起したチンコを入れてあげるわ

♥♥キヤハハ♥♥」

上機嫌そうな笑い声を上げて、女はおれの逸物をしごく。そして、自分のマンコにツバを塗りつけて、挿入しようとした。

「いや、参ったな。逆レイプされるたア驚いたぜ」

「んんつ・♥・ど、どう・♥・屈辱的でしょ・♥・どこの誰かもわからない女のマンコに・♥・キヤハ・♥・チンコ入れるなんてつ・♥・早くドピュツと・♥・あんつ・♥・私の子宮に精子出しちゃえ・♥・キヤハハつ・♥・♥・♥・」

女は満面の笑みを浮かべて、おれの逸物を雌穴で全部咥える。

そして、一心不乱に腰を振り出した。このままヤラれるのも悪くねエが、そろそろ本気を出すとするか……。

「余裕そうだな。んじやあ、ここからはお前は腰を振るたびに絶頂する」

「――ツ!? ツツツツツツツ・♥・♥・♥・んはああんん・♥・♥・♥・イクううううんんんんつ・♥・♥・♥・」  
おれが暗示を付け足すと女の顔色が変わり、体を大きく仰け反つて絶頂した。

腰の動きは停止してビクン・♥・ビクン・♥・と小刻み痙攣している。不意討ちが効いてるみてエだな。

「なんだ。もう終いか? □ほどにもない駄目カスマンコだな」

「うるさいわねつ・♥・ゆ、油断しただけよ・♥・んあつ・♥・だ、ダメツ・♥・イクううう・♥・♥・なんでこんなに・♥・♥・あああんつ・♥・♥・また、イクう・♥・♥・キヤハアン・♥・♥・イグのどまら、ないいいいい・♥・♥・」

女は腰を振ることに体を痙攣させながら絶頂する。しかし、何とかおれの精子を絞り取ろうとしなきやイケないという義務感を植え付けられているから、セックスを止めら

れない。

そこからしばらく、この女の悲鳴にも似た喘ぎ声が夜のウイスキーピークに響き渡つた――。

「んんつ♥許ひてつ♥わたひの負けよつ♥♥わたしは駄目カスマンコのミキータでひゆ  
♥♥調子に乗つてしませええん♥♥イクつ♥♥」

そして、キロキロの実の能力者、ミス・バレンタイン」とミキータは敗北をあつさりと認めた。

一度心が折れると驚くほど卑屈になつたな。

「んじや、ミキータ。おれの性奴隸なつかまになるか?」

「なるわア♥キヤハツ♥性奴隸になるからア♥♥もう許ひて♥イクううう♥♥イ  
クううう♥♥んあああんつ♥♥」

そして、性奴隸になることをあつさりと承諾して、度重なる絶頂に耐えきれないと泣き言を言う。

「じゃあ、体重を一番軽くしてみる」  
Sっぽいけど、本質はドMなのかもしけねエな。

「か、軽く？　こ、こうかしら　んあつ　♥」

「おつ、こりやいいや、片手で掴んでも上下に簡単に動かせる。軽いから面白エくらい早く動くじやねエか」

ミキータが極限まで体重を軽くすると、駅弁状態でも片手でお手軽に動かすことができる。

こりやあ他の連中では出来ない芸当だな。手コキ感覚でマンコの感覚を味わえるのは新しい。

「ふぎイツ　♥　♥　イグう　♥　♥　イグううう　♥　♥　イグイグううう　♥　♥　ひやめてええええ　♥　♥　ああんつ　♥　♥　ずつとイクの止まらないのオ　♥　♥　イグイグううう　♥　♥　んああああツツツツ　♥　♥」

「いつけね。ヤリ過ぎて、気絶しちまった」

だが、ミキータを物みたいに乱暴に振りすぎたせいで、何度も押し寄せる絶頂の波に耐えきれなくなつた彼女は口から泡を吹いて泣き叫びながら気絶してしまつた――。

とりあえず、こいつはこのまま寝かせとくとして、ログも溜まつたことだしさつさと出発しよう――。

# 考古学者ロビン

「イガラムが……」

「まさか、こんなに早く追手が来るたアな。クロコダイルつてヤツア用心深いんだな」

イガラムがエターナルポースで先にアラバスタ王国に囮になつて行くとか言って出港して速攻で船を沈められた。

呑気にセツクスばかりしてたら、ラツコとハゲタカはおれらの絵を書いてそれをクロコダイルに報告に行つた。

いや、あんまり見事な裸婦画を書くもんだから思わず拍手しちまつたぜ。喘いでるナミの表情とか最高ですよ。

「大丈夫ですよ。ビビさん。ご主人様は強いですから。誰よりも」

「そうです。ジャンゴさんにかかれば王国なんてすぐに元通りですよ」

「まつ、そういうこつた。クロコダイルがどんなに策を練ろうが関係ねエ。おれアその根幹を搖るがすことができる。つまり勝負の土俵にすら、ヤツは立てねエんだ」  
クロコダイルがどんなに周到な手を用意したとしても、おれの能力はその根幹にある人間の行動を自在に操れる。

ヤツの計画を破綻させるのは造作もないだろう。

「とにかく行くんでしょ。なんだかんだ言つてあなたはそういう偽善者だし」

「そうだ。おれの好きなヤツを泣かせていいのはおれだけだ。つまりクロコダイルはおれの逆鱗に触れてるつてこつた」

「ジャンゴさん……」

「とにかく出港だ。ミキータも連れてな」

「幸せそうな顔して寝てるわね」

「ご主人様にイカされ続けたら、誰だつてこうなります」

全裸でグース力寝ているミキータを乗せたままメリーアー号はウイスキーピークを発進した。

ログの指示示す方向へ――。

「無事に船は出せたけど……」

「これから、どうするかですね」

「この船の中にいる侵入者を、ということですよね？」 カヤさん

「まあ、お前らは気付いてるよな。そりやあ、そうだ」

「えつ？ 皆さん、何を言つてますか？」

出港して間もなく……ビビを除いた全員がある気配に気付いた。

この船に侵入者がいるのだ。ビビとは性行為という名の調教ばかりしていたから、強さを引き出すのを忘れていた。

故に、一人だけ見聞色の霸気が使えない。後で暗示での強化をヤツておいてやるか。氣配がする方を見てみると、黒髪で青い目をしたとびつきりの美女が居た。長身でスタイルも良く、非の打ち所が見当たらねエ。性奴隸なつかまにしよう——と、ひと目見て決めたくらいだった。

「あら、驚いたわ。勘の良い子が揃つてているのね。この海賊団は——。ミス・バレンタインは人質にでも使うつもりなのかしら？」

「み、ミス・オールサンデー！」

「誰だ？ そりやあ」

「バロツクワーカスの副社長でボスとペアを組んでいる女です。私は彼女を追跡してボスの正体を突き止めました」

またバロツクワーカスかよ。絶対にクロコダイルの野郎、顔で採用してるだろ。ビビ、ミキータときて、この女だ……。まあ、男なら美人を何人も並べてエつて思う

気持ちはわかるけどな。

「正確には追跡させてあげたんだけどね」

「ふーん。まあ詳しいことは後で喋つてもらうとする。これからお前はおれの言いなりだ。だが、それには気付かねエ。ワンツー・ジャンゴ！ ゆっくりと服を脱げ」

とりあえず、この女はクールで知的な感じだな。ちょっと面白い遊びを考えたぞ。

おれは女に催眠術をかけて服を脱ぐように命令した。

「ふふつ、催眠術師なんて初めてみたわ。でも残念。私には効いてないみたいよ」

女はバカにしたように笑みを浮かべてゆつくりと衣服を脱ぎ始めた。

うおつ胸デケーな。ナミよりもあるぞ。ちょっと垂れてるけど問題ない。美人のストリップはいつ見てもいいもんだ。

「ほう。なんで素っ裸になつてんだ？」

「今日は暑いから。汗をかくのは苦手なの。それが何か？ 催眠術とやらを早く見せてくれないかしら？」

女は完全に自分の意思で服を脱いだと想い込んでいる。

自分の行動に違和感を感じない暗示の効果だ。

「胸を触るぞ。ほら、こつちに来い」

「胸を触ったからつてどうなるの？ 別に構わないけど」

女はおれの真正面に立ち、胸を持ち上げておれに差し出す。

「じゃあ、遠慮なく触らせてもらおうか。

「おれに触れられると発情しろ——ワンツージヤンゴ！ やつぱ、デカイな。オナつて  
るときは使うのか？」  
「これ」

おれは遠慮なく女の豊満な胸を揉みしだき、乳首を弾く。

「この乳はいいな。指が沈んで吸い付く。いくらでも揉んでいられる……。」

「んんつ♥ そうね。自慰行為するときは乳首は絶対に弄るようにしているわ。んはつ

♥」

女はオナニーの話をしても平然としている。

しかし、敏感になつた乳首を弾いたときだけは甘い声を漏らしていた。

「ここからはオナニーをしながら話せ」

「んつ ♥ んんつ ♥ こ、これでいいかしら ♥」

おれが女にオナニーをするように命令すると、彼女は乳首を弄つたり、舐めたりしなが  
がら、割れ目に指を出し入れしてグチュグチュ ♥ と音を立てる。

それでも、彼女は平然としていた。発情させているから、気持ち良さそうな声は出で  
いるが……。

「随分と乳首弄りまわすんだな。だからか知らねエけど、結構黒ずんでデカくなつて  
る

ぞ

「そ、そうね♥んんつ♥乳首は自慰をする時はよく弄るの。感じやすいから……んふつ  
♥それより次の島に呑気に行くのはおすすめ出来ないわ♥あんつ♥このエターナル  
ポースをあげる♥んんつ♥んつ♥これは♥んんつ♥アラバスタ王国の一つ前のなにも  
ない島に続いてるの♥んんつ♥あつ♥航路は私以外知らないから追手も来ないわ♥あ  
んんつ♥♥」

女の色素が濃くなつた乳首は勃起して驚くほどデカくなつた。こりやあいい。爆乳  
の上に乳首までデカいなんて完璧だ。

なんか、すげー近道出来そうなエターナルポースくれるみてエなこと言つてるが、話  
の内容が入つてこない。

「ジャンゴさんどうしましよう？ 罷だと想ひますが……」

「なんか罷は仕込んでるのか？ 全部話せ」

「んんんんつ♥♥なにも仕込んでないわ♥単純に面白いからよ♥あんつ♥王女様が迷走  
する姿が♥んんつ♥だから、どっちでもいいの♥あんつ♥使つても使わなくてても♥」  
おれが催眠して質問しているから、女は絶対に嘘はつけない。

こいつ、近道のエターナルポースをくれてやるなんて何考えてんだ。マジでビビの反  
応を見て楽しんでいるのか？

「あつそ。じやあ近道するか。辛そうな顔してんな。遠慮なくイつてもいいぜ」

「そう♥優しいのね♥じやあ、お言葉に甘えて♥イかせてもらうわ♥……んつ♥んん  
んつ♥♥んんつつ♥♥……あああつつつ♥♥♥♥♥」

おれがイクことを許可すると、女は激しく割れ目の中の指を搔き回し、乳首が引っこ  
抜けるんじやねエのかつていうくらい勢いで、強く引っ張る。

すると彼女のマンコから洪水のように愛液が噴出した。暗示をかけた結果とはいえ  
思つた以上に乱れやがつたな……。

「なんだ。クールぶつてるけど、結構、激しくオナるじやねエか」

「久しぶりに自慰行為をしたから気持ち良くなつただけよ。それより哀れな王女様ね。  
こんな偽催眠術師が船長の海賊団が頼りなんて」

女はあれだけ激しくオナつてたくせに上からの目線は崩さなかつた。

ここまでキレイに暗示が掛かるなんてな。玩具の才能があるぜ。この女は……。

「とりあえず、マンコにチンコでも入れてゆっくりとしてけ。洗いざらいお前のこと聞  
かせてもらうから」

おれは仰向けになり、女が浅ましく濡らしたマンコに逸物を入れるように指示する。  
さて、具合の方はどうかな……。

「まだ、茶番を続けるの？ もう諦めたら？ 私には催眠術など効かないわ。それじや、

腰を下ろすから♥んつ♥んつ♥じゃああなたたちは♥んはつ♥このエターナルポース  
を♥んんつ♥使うのね♥んんつ♥ああんつ♥♥』

女は催眠術は効かないと言いながら、全裸でおれに跨り、割れ目を開いてゆっくりと逸物を挿入した。

ふんわりとした膣圧だつたが、肉壁全体が別の生き物みたい蠢いて、優しくねつとりと逸物を包み込む。女が腰を振れば振るほど、彼女をじっくりと味わえる魅惑的な性器だ。

女は全身が敏感になつてるので、乳首をちよつと撫でるだけで声を漏らすようになつてゐる。

「おう。お前さんの名前はなんだ？ コードネームじゃなくてよオ」

「な、名前？ んんつ♥♥に、ニコ・ロビン♥♥ああんつ♥♥」

おれが女に名前を聞くと彼女は『ニコ・ロビン』と答えた。

ロビンか……。よし、ロビン、今から本気でお前を堕とす――。

「ロビン。セックスの感想を伝えろ」

「そ、そうね♥♥わ、私の膣があなたのペニスにズコズコ突かれて♥♥ああんつ♥♥泣  
いているわ♥♥もうイキそうになるくらいの快感よ♥♥はううんつ♥♥」

おれはロビンを押し倒して正常位に構えて、全力でピストン運動をする。

それに合わせてロビンは息を乱し、イキそうになつてゐるくらい快感に喘いでることを伝えた。

「じゃあ、今からイカせてやるから、快感に応じて声を『デカくしろ』

「わかつたわ♥♥んんつ♥♥イクつ♥♥イつちやうわ♥♥んああんつ♥♥あああんつ♥  
♥んんんんつ♥♥♥イクううう♥♥♥」

ロビンは快感に身を委ねて大声で叫びながら絶頂した。

体を大きく痙攣させて、全身でセックスの感触を貪るように。この乱れ方は暗示だけじゃねエ――」いつ、随分とストレスを抱えて生きてそうだな。

「気持ち良くなせてもらつたら、笑顔でピースサインを出しながらお礼を言うのがマナーだぞ」

「はあ、はあ……、こんな私とセックスしてくれてありがとう♥はい、ピース♥これでいいかしら♥」

ロビンはニコッと微笑んで両手でピースサインを送る。

ドクドクと割れ目から精液を垂れ流しながら。しかし、彼女は自分の行動に違和感を感じていないと。

さて、バロツクワーカスの副社長つて言つてたし、洗いざらい喋つてもらおうか……。

「ジユル♥♥ジユボジユボ♥♥ちゅつ♥♥れろつ♥♥ジユル♥♥ぷはあ、それで、私はクロコダイルを利用してポーネグリフを♥♥んむつ♥♥ジユボ♥♥ジユボ♥♥」

ロビンに口で奉仕せながら、おれはこいつの半生についてまで全部聞いてしまった。

なかなかハードモードな人生を送つてやがるな。空白の歴史を知るつてそこまでされることなのか……。

夢中で逸物に吸い付いているロビンにおれは同情していた。守つてやりたいと思つた……。

もちろん、エロいことはするけど……。

「ほう。なかなか壮絶な人生だな。8歳で賞金首になつて、そつから20年間政府から逃げ続けてるとは」

「オハラに向けられたバスター・コール——。その話は聞いたことがあります」

元海軍のたしきは知識として聞きかじつたことはあるらしいが、本人から語られた話は凄惨なもので顔を歪めていた。

「凄い話を聞いてるのに、ジャンゴさんがロビンさんで遊んでるから内容が入つてこないわ」

そして、カヤはシリアルスな話をフェラやパイズリをさせながらおれが聞いていたので、呆れ顔をしている。

「そりやあ、好きな女のことは全部知らなきやならねエだろ。口もおっぱいもマンコもアナルも全部具合を確かめなきや……。」

「まあ、この人も色々と大変だったつてわけね。今、現在進行形で大変そうだけどナミも壮絶な生い立ちだつたからなのか、ロビンには同情的だつた。半分は今の状況に対する同情かもしけねエが……。」

「ど、とにかく、ミス・オールサンデー。アラバスター王国にそんな歴史的な文献があるつて本当なの？ それに古代兵器なんか……」

「んぐつ♥♥ジユポジユボ♥♥ちゅつ♥♥れろつ♥♥ジユル♥♥」

暗示はおれの言うことを聞く暗示なので、ロビンはビビの質問を無視してフェラを続行する。

それにして上手いな。舌が何本もあるみてエに絡みついてやがる。

いや、これは本当に舌が何本生えてるぞ……！？ あ、悪魔の実の能力か……！

舌を増やせる能力つて……何の実だ……？

「ロビン……、ビビの質問に答えろ」

ロビンの人並み外れたフェラに感動を覚えながらも、おれは彼女にビビの質問に答え

るよう促した。

「ちゅぱつ♥♥んんつ♥♥場所はあなたのお父様であるネフェルタリ・コブラ国王が知つてゐるはずよ。ちゅつ♥♥」

「だそうだ。古代兵器か……。興味はねエが。クロコダイルのヤツが手に入れると、面倒なことになりそうだ。ロビン、今何がしたいかはつきりと答えろ」

ロビンによれば、ビビの父親である国王が古代兵器やボーネグリフの在り処を知つているらしい。

クロコダイルの野望が叶つちまうのはやつぱ氣に食わねエな。

「んむつ♥♥ちゅぱつ♥♥何がしたい？ そうね。私のびしょ濡れになつた膣の中にこのペニスを挿入したいわ♥」

ロビンはおれに触れたり触れられたりするとどんどん発情するように暗示をかけている。

彼女はフェラをする間にマンコからは愛液がポタポタと止めどなく流れ落ちて水たまりを作るほどだつた。

「そつか、そつか。性奴隸になると誓え。そしたら、いくらでも相手をしてやるし。お前をずっと愛してやるぞ」

「ずっと愛して？ ふふ、馬鹿なことを言わないで。性奴隸くらいならなつてあげて

も良いけど、私が背負ってきた闇は重いのよ。あなた如きが背負えるはずがない♥  
それに私、恋愛には興味がないの♥いつでも入れていいわよ♥♥

ロビンはまんぐり返しの体勢になり、両手で割れ目を開きおれを誘う。彼女は自分の抱えてるモノの重さを語り、誰も愛するつもりはないと主張する。

「ロビンは絶頂するたびに幸せな気持ちになり、精子を子宮に受けとるとおれのことを誰よりも愛して、愛情を感じるようになる。ワンツー・ジャンゴ！」

「残念ね……。催眠術師さん。あなたの気持ちは嬉しいけど。私は誰も愛さない……。  
んんつ♥♥な、なに♥♥んんんつ♥♥さつきと全然違うわ♥♥あああんつ♥♥」

新たな暗示を加えて、おれはロビンの膣内に逸物をぶち込む。

彼女はかなり敏感になつていて、入れた瞬間に体を痙攣させて絶頂した。ロビンは最初のセックスとの違いに驚いているみたいだ。

「へえ、そんなんだらしねエ顔もできるんだな。どこか触つて欲しいところはあるか」

「ああつ♥♥ああつ♥♥ち、乳首♥♥乳首を強く抓んで♥♥」

彼女は涎を垂らしながら、恍惚とした表情で乳首を抓んで欲しいとねだる。

その間にも何度も絶頂する彼女は自らも淫らに腰を振つておれの逸物を離そうとしなかつた。

「お安い御用だ。ほら、これでどうだ？」

「んはあつ ♪ ♪ イクつ ♪ ♪ 乳首、気持ちよすぎて ♪ ♪ イクツ ♪ ♪」

乳首を攻めるとロビンは乱れに乱れた。マンコからは愛液が吹き出して、度重なる絶頂に顔を歪める。

「はあ ♪ はあ ♪ なに、この気持ち♪ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ こ、この人のモノになりたい ♪ あんつ ♪ 今までこんな気持ち初めて ♪ んんつ ♪ あああつ ♪ ♪ ああんつ ♪ ♪ あんつ ♪ ♪ 」  
そして、さらに腰を振り続けると目をキラキラさせながら、幸せそうな笑みを浮かべて性行為を心から楽しむようになった。

甲高い声を響かせて、突く度に絶頂してゐるかのように全身を震わせている。

「そろそろ、射精するけどよオ。これを子宮で受けるとロビン、お前は完全におれの奴隸になる。どこに出してほしい？」

「んはあつ ♪ はあ ♪ はあ ♪ しゃ、射精？ んつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ 中につ ♪ 膣内につ ♪ ♪ 出してえええつ ♪ ♪ ♪ あなたの子種をつ ♪ ♪ 私の子宮なかに出して欲しいの ♪ ♪ 」

ロビンは性奴隸に身も心も堕ちる覚悟を口にした。

絶叫しながら中出しをせがむ彼女は雌としての本能が開花したように見える。  
「よし、受け取りな。そして、おれの性奴隸なかまになれッ！」 ロビン！

「はいっ ♪ ♪ イギばずつ ♪ ♪ はあつ ♪ ♪ はあつ ♪ ♪ はあつ ♪ ♪ はああああああつつ  
ん ♪ ♪ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ 」

足でおれの腰をガツチリとホールドした状態で、彼女はおれに射精をさせた。

一滴も子宮から精子を逃さないようにして——。

「んちゅつ ♡ ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ なんで、キスが止められないの？ ちゅつ ♡ ちゅつ ♡ はあん♥」

ロビンはおれを心から愛するようになった。そして、慈しむような表情をして、何度も何度もおれにキスをする。

キスをするたびにニコリと笑つたり、照れたりする彼女の闇は少しは晴れただろうか

……

「じゃあ、グランドラインに入つて早くも3人の新入りが増えた。自己紹介しろ！」

「は、はい。アラバスター王国の王女、ネフェルタリ・ビビです♥今はジャンゴさんの性奴隸として立派な肉便器になれるよう頑張つてます♥♥1番感じるところは子宮の方とケツマンコです♥♥お料理なんかも作りますので、よろしくお願ひします♥♥♥」

まだ16歳で未発達な部分もあるが、エッチの素質十分のビビはとにかく天真爛漫で好奇心旺盛だった。

カヤもそうだったが、こういう箱入り娘が性行為を覚えると歯止めが効かなくなるの

か、とにかく性欲が強くなる。

ビビは一味で誰よりもセックスが好きな女だ。

「キヤハツ！ ウエストブルーの運び屋ミキータよ♥ 懸賞金は750万ベリー♥♥ キロの実の能力者で体重を自在に操作できるわ♥♥ 感じる場所はそうねえ……、クリトリスかしら♥♥ 普通かもしれないけど、オナるときは大体ここを弄つているの♥♥ これから、いっぱいエツチしてもらうんだから♥♥♥」

ミキータは自在に体重を変化させることができる能力者。

六式や霸氣との相性は良く、体重を変化させての攻防は目を見張るものがあった。

普段はSつ気のある気の強い彼女だが、本性はドMもいいところ。乱暴に扱われたりすると、涙目になりながら感じまくる。

普段とのギャップが堪らなく可愛い。

「名前はニコ・ロビン♥ 懸賞金は7900万ベリー♥ ハナハナの実の能力者で至るところに自分の体のパーツを咲かせられるわ♥♥♥ セックスの時に触つてほしいのは乳首よ♥♥ 思いつきり乱暴に抓つてもらえたなら簡単にイク体なの♥♥ たくさん愛してもらいたい♥♥ 失った気持ちを取り戻すために♥♥♥」

舌を増やしていたのはハナハナの実の能力だった。ロビンの能力は性行為にはもつてこいだ。

複数でプレイをするときなんか、よく手を増やしたりして一人で無双してたりする。愛が重いやつだが、それがいい。体を重ねると、一番幸せそうな顔をするのはロビンだ。

こうして、ビビ、ミキータ、ロビンを新たに加えた、『ジャンゴ』海賊団はアラバスタ王国を目指す。

「よしつ！ アラバスタ王国に乗り込むまでの間は毎日ヤリまくるぞ！」

「ジャンゴさん。いつもと同じよ。それじゃ

「じゃあカヤは後回しね。最初は私だから♥」

「な、ナミさんずるいです。ご主人様ア。たしきのマンコを使つてください♥」

誰もがS級の美女ばかりの海賊団。彼女らが自らの体を使つて誘惑してきたら——我慢できるはずがねエ。

おれたちはアラバスタ王国の一つ前の島とやらに着くまで、体の至るところを使つて親交を深め合つた——。

# クロコダイル攻略戦

おれたちは無事にアラバスタ王国についた。

途中でワポルとかいう訳のわからん尊大な野郎に出会ったので、すげえ善人になるよう人格を弄つてやつた。

まあ、そんなことはどうでもいい。

おれは今、ビビを連れ出して歩いている。面白い遊びを思い付いたからだ。

「じゃ、ジャンゴさん……」、こんなところですのですか？」

ビビとおれはアラバスタ王国へと足を踏み入れた。彼女は目隠しをしており両手を後ろ手に縛つた状態で歩く。

さらに格好は素っ裸にマントを一枚羽織つているだけで、これを取つちまつたら彼女は国民の前で裸体を晒すことなる。

「久しぶりに故郷に帰つてきたんだ。国のみんなに成長した身体を見せてやれよ。せつかくいやらしく育つたんだからさ。大丈夫だつて、バレやしねエよ」

「んあつ♥そ、そんなあ♥んんんつ」

おれは人通りの多い町中でビビのマントを剥ぎ取つた。ビビは身体を隠そとする

が、手を縛られているので、隠すことはできない。

慌てて動いて、ツンと張りがある美乳がプルプル揺れるのは何ともエロかつた。

「お、おい見ろよ！　あの女、こんなところで裸になってるぞ」

「すげえ。変態だ……」

「痴女つて初めて見たぜ」

商店街にいる男たちはいきなり素っ裸になつた、目隠しの女に視線を集めた。

そりやあ誰だつてそうなる。目隠しはされていてもスタイルが良く、肌艶も良い女が裸体を晒しているのだから。

「み、見られてる……♥ 国の人たちに♥な、何でこんなに♥んんつ♥じゃ、ジヤンゴさん♥あのう♥あんつ♥♥」

町中で全裸になつたビビの雌穴に中指と薬指を入れてみると、中はぐつしより濡れていた。

指を少し動かすだけで彼女はビクン♥と痙攣して切なそうな声を出す。

「安心しろ。連中は見てるだけだ。何も余計なことはしねエよう暗示をかけておいた。だとしたら、どうしてほしい？」

「お、オチンポ様♥オチンポ様が欲しいです♥♥私の濡れマンコに入れてください♥ひゃんつ♥んんんつ♥あつ♥あつ♥ああんつ♥♥」

もちろん、周りの連中には何もできねエよう暗示をかけている。行為が終れば忘れるように。

そう安心感を持たせるだけでビビは簡単に淫乱な本性を露わにした。

泣き叫び出しそうな大声でおれの逸物をねだり、後ろからマンコをひと突きすると喘ぎ声を町中に響かせたのだ。

「おいおい、こんなところでヤリ始めたぞ」

「なあ、あの女。ちょっとビビ様に似てないか？」

「バツキヤロー！ ビビ様をあんな変態と一緒にするな！」

「しかし、あの青髪といい、口元といい、確かにそつくりだ……。もちろんこんなことをするはずがないが」

「だつてよ。目隠し取つたら、あいつらどんな顔をするかな？」

「あつ♥あつ♥んんつ♥そ、そんなこと言わないでえ♥は、恥ずかしいです♥んんつ♥んんつ♥♥」

周りの人間は彼女の痴態を見て、『王女ビビ』を連想したがすぐに否定した。

その声は当然本人の耳にも届いており、彼女の顔は羞恥によつて面白いくらい赤くなつている

「その割にはいつもよりも締めつけが激しいじゃないか。興奮してんのか？」

「はあんつ♥んんつ♥は、はい♥見られて興奮しちやつてますう♥あんつ♥んつ♥んつ♥だめつ♥み、みんなが見てるのに♥イツちやう♥オマンコがイつちやう♥イクつ♥イクつ♥はあんつ♥♥♥んつ♥んあつ♥んんつ♥♥」

しかし、すっかり淫乱な身体に育つた16歳の王女はこの状況に大いに興奮して、浅ましいくらい膣を収縮させて子種をねだつていたのだ。

そして、守るべき国民のたちの目の前で王女は絶頂を宣言して、盛大にイつた——。「よしよし、えらいぞ。つーか。王女なのに国民の見てる前でセックスするなんて恥ずかしいこと良くできるよな。お前……」

「そつそんな……。んんつ♥私、なんてことを……」

一度、絶頂して少し落ち着いて来たときに耳元で冷静に状況を伝えると、ビビはまた耳の後ろまで顔を赤くして羞恥心を思い出す。

「なんてな。ほら、このまま後ろから突いてやるから、もう少しお前の乳がブルンブルン揺れるところを見せてやりな

「は、はい♥んんんつ♥あんつ♥♥気持ちいいです♥見られるの♥んつ♥んつ♥んつ♥♥」

そんなビビの雌穴にもう一度挿入して、今度は両腕を掴んで先程よりも激しく突く。

すると彼女は恥ずかしさを忘れて淫らに快感を貪る雌へと簡単に姿を変えた。

「おいおい、ありやあ、とんでもねエエロい女だぞ」

「ビビ様と似てていると思うと腹が立つ」

「あんなおっぱい揺らして喘ぎ声とマン汁を撒き散らす変態とビビ様を比較なんてするな！」

「イクつ♥イクつ♥イッちやううううう♥♥ああああんつ♥♥♥♥」

愛する国民の目の前で王女は何度も幸せそうに絶頂を繰り返した――。

その後、しばらく目立たぬように行動して、反乱やら何やらを無事に食い止めることにおれたちは成功した。

反乱軍のリーダーとやらがビビの幼馴染で、そいつを説得すりやあ良いだけなので簡単だつた。

ロビンの話で反乱軍にはバロツクワークスの連中も紛れ込んでいることは確認済み。

催眠術を駆使してそれを炙り出して、クロコダイルに何一つ報告はしないように暗示をかける。

ついでにビビのペツトのカルガモには彼女の父親の国王に向けた手紙を出させておいて、反乱が終わり、すべての黒幕はクロコダイルだということを伝えさせた。

最後にたしきに伝電虫を使わせて、間抜けにおれらを追つてきているスマーカーをこつちに呼び出すようにさせる。後始末を任せるために。

おれたちはその間に、バロツクワーフスの最高戦力であるオフィサーエージェントとやらが、クロコダイルの元に集う瞬間に立ち会うこととした。

ここでヤツらを一網打尽にすればこの話が終わりだからだ。

クロコダイルの経営するレインベースカジノの地下——ここにオフィサーエージェントは集合していた。

「遅エぞ。ミス・オールサンデー。こいつらにはもう、最後の指令は出しておいた。てめエ、次、遅刻したら命がねエと思えよ」

「ごめんなさいね。次は……無いわよ。M r . 0。あなたの計画は今日失敗するのだか

ら」

遅刻したロビンにクロコダイルの苛ついた言葉を投げかけるが、彼女はあつさりと彼の計画の破綻を宣言する。

そう、ユートピアとか何とか言つてゐるクロコダイルはもはやただのピエロだつた。

「はア？ 何言つてやがんだてめエは！」

「だから、あなたの計画は終わつたのよ。サー・クロコダイルの野望はすべて。んんつ♥」

♥

こんなときもおれはロビンに黒のレザータイプのミニスカートを履かせてノーパンにさせていた。

格好をつけたセリフを言い終わつた瞬間に割れ目の中を弄ると、彼女はピュツ♥と愛液を垂らして甘い声を漏らしてしやがみ込んだ。

さて、敵のボスに挨拶するかな——。

「ご苦労、ロビン。んで、どうも初めまして。王下七武海——クロコダイル。いい顔してンじやねエか。何が起こつたのかわからんねエつて面だ。おれア大好きだぜエ。てめエみてエなヤツが狼狽えてんのを見るのが

「クロコダイル！ この国の反乱ならもう止めたわ！ 觀念なさい！」

ロビンに続けて、おれとビビがクロコダイルに話しかける。

ビビには可愛らしい踊り子の衣装を着させている。あまりに似合うから普段からこの格好にさせとくかな。

「……ニコ・ロビンは裏切り。王女ビビがここに……。そして、反乱を止めただとオ！？」

クハハハハツ！ バカも休み休み言え！ 反乱軍の動き、そしてコーナーへの接触者は全部確認している。確かに幼馴染である王女の言葉なら、ヤツは踏みとどまるだろう。だが、お前がコーナーに接触したという報告はねエ！ ハツタリに騙されるか！」「てめエが騙されようが騙されまいが関係ねエ。だつて、お前はここですべてを失うんだからな」

「クハハハハツ！ 名前も知らねエような小物が何を言つてやがる！ 裏切り者や逆らうヤツがどうなるか見せしめだ。おれが直々に肅清してやる！」

クロコダイルは何にも気付いていない。だから、裏切り者や王女ビビを片付ければまだ計画は遂行できると思い込んでいるのだ。

彼はまずはビビを仕留めようと、彼女に向かつっていく。

「クロコダイル！ あなたは私が許さない！ „クジャツキ孔雀“！ „ストリング一連スラッシャー！』

ビビは振り子の付いた鋭利な鎖をカウンターの要領でクロコダイルに飛ばした。

クロコダイルはロギア系であるスナスナの実の能力者だから、物理的な攻撃は無効である。

だからこそ、彼は油断していた——武装色の霸氣を纏つた彼女の一撃に。

「くだらねエことを……。——ツ！」

しかし、さすがに七武海になるだけはある。百戦錬磨の経験によつて得られる勘に

よつてヤツはビビの攻撃をギリギリで躱した。

まあ、頬はざつくりと切れて血を吹き出しているが……。

「ちつ！ 外した!?」

「さすがに能力にかまけた愚図じやねエつてわけか」

「ぐつ……てめエのような小娘に傷を負わされるとはな。どうやつてそこまで鍛えたのか……。——ちつ、お前らは仕事にさつさと向かえ。消されたくなかったらな」

クロコダイルは内心の動搖を必死で抑えて、威圧感を出し、部下に命令をする。

ここから出ていって指令に従えと……。実際はビビの予想外の強さに面食らつてい るのだろうが……。

「いくぞ……」

「何が起こつてるの？」

「ジョーダンじゃないわよー！ あちし、びっくりして回つちやおう。クルクル回る わア」

「バカなこと言わないで早く仕事にいくガネ。ボスは苛ついている。我々もとばつちり を受けカネん」

「…………」

「フォー、フォー」

「早く動け！ このノロマ！ このノツ！ „ノツ“だね。お前は！ „ノツ！』  
 オフィサーエージェントたちは動き出す。ボスの指令に従つて——。  
 さて、戦闘開始だ。おれが全員を催眠術にかけて仕留めても良いんだが、性奴隸たち  
 にもそれなりに戦闘経験を積ませとかなきや、おれの目の離れたときに身を守ることが  
 出来ねエ。だから——。

「お前ら、適当に相手してやれ。おれの分は分かつてるよな？」  
 「はいはい。好きになさい」

「ご主人様のために戦います！」

「キヤハツ！ 誰を這いつくばらせようかしら」

「エツチな命令以外だと雑なんだから。ジヤンゴさんは」  
 ナミ、たしげ、ミキータ、カヤはそれぞれが戦闘態勢をとりオフィサーエージェント  
 に飛びかかる。

“剃”<sup>そる</sup>を使いこなして、音もなく高速で——。

「そんな棒で私のキャンドルはビクともしな——ダバダアあああああッ！」

ナミは頭に“3”的マークの付いた蠍人間の蠍を武装強化した棒術で蠍を粉々に破  
 壊して、一瞬でその男を仕留めた。

あれ？ こりや、訓練にもならねエぞ……。

毎日余興みたいな感じで全裸で模擬戦みたいなことをさせてるからかな……。

「あちしのオカマ拳法は無敵よ！ そう無敵なの！ くらえ！ オカマ拳法——」

「あつ！ 興味ありません……！」

「にぎやああああ～～ツ！」

力ヤは武装強化させた鋭利なメスを何本もオカマ野郎の急所に突き刺して勝負を決める。相変わらず素早くて、敵には情け容赦がねエな。こいつ……。

ついでに絵の具を持っているガキも注射器を指して昏倒させていた。

「残念だが、剣士ではおれに——」

「いえ、この黒い“時雨”に斬れないモノはありません——！」

“月歩” ツ！

たしぎの相手は全身刃物人間、他の連中よりも何ランクか上の実力者だ。彼女は“月歩”を駆使して高い天井付近まで駆け上がる。

「空を……！」

「“天翔・二斬時雨” ツ！」

「なツ——！ ぐはアツ……！」

落下の勢いを加えた、たしぎの強力な連撃が見事に決まり、彼女も全く苦戦せずに敵

を仕留めた。

「こりやあ、どういうことだい!? とにかく逃げないと……。ぐつ、腕が体に!?

「セイスフルール六輪咲き』……」

「や、やめツ……!」

「クラツチツ!」

「みぎヤあああああツ!」

しゃがみ込んでいたロビンはようやく立ち上がり、モグラババアを関節技で軽く捻り潰した。

へえ、あの能力つていやらしいこと以外にも使えるんだな……。

「フオ～! フオツ? フオツ?」

「キヤハツ! 動けないでしよう? Mr. 4。これが覚醒したキロキロの実の力よ!

あなたの体の上の空気の重さを1万キロにしたの」

ミキータはMr. 4とかいう巨漢の頭上に手をかざして動けなくさせていた。

彼女の悪魔の実の能力は暗示によつて“覚醒”した。

これによつて、自分以外のモノにも影響を及ぼすことが可能になつたのだ。

「フオ～～ツ!」

「重さ？スピード——それはすなわちパワー！ キヤハハ！ 剃<sup>そり</sup>ツ！ 武装色強化

——“一万キロ・指銃”ツ！」

「…………ふおくくく。ふ…………」

ミキータは自らの体重を極限までに増加させて全速力で突つ込み、強力な 指銃<sup>しがん</sup>を M r. 4に突き刺す。彼はその場に倒れることしか出来なかつた。

「嘘でしょ……、一瞬でオフィサーエージェントが……。M r. 1まで……。んんつ

な、なに♥下半身が熱いわ♥♥んはあんつ♥こ、こんな状況で♥あんつ♥あんつ♥な、な  
んで♥ああつ♥♥」

そして、おれは青いパーマがかつたセミロングヘアの女の雌穴に逸物をぶつ刺してい  
る。

ボンテージ衣装を身に纏うようなやらしい女だけあつて中々具合は良かつた。

ちなみに彼女にはおれの存在に気が付かない暗示をかけている。なので、こうしてズ  
コバコ突いても、服に手を入れて乳を揉んでも、何が起きているのか認識出来ないのだ。  
簡単に言えば透明人間になつてしているのと同じだ。

「あんつ♥あんつ♥あんつ♥こ、こんなときなのに♥い、イクつ♥んあつ♥んんんつ♥♥  
——なんで、私……」

女は何が起こつているのかわからずに、体を仰け反らせて絶頂した。仲間がやられて

る目の前で痴態を披露した罪悪感なのか、彼女の顔は青ざめていた。

「そろそろ気付くようにしてやるか」

おれは再びピストン運動を再開させながら、おれの存在に気付くように認識を変換する。

すると、彼女は喘ぎながら驚愕の表情を浮かべた。

「あんつ♥んんつ♥んあつ♥な、なにあんたつ♥いつの間に私を♥んんつ♥ああんつ♥」

「結構、感じやすいじゃねエか。マンコの締まりも悪くねエ。おらつ」

おれの存在に驚きながらも、いつたばかりの敏感な体は正直な反応をして、愛液はしあたり、逸物の滑りを良くして、キウン♥と締め付けるマンコはおれに快感を与えてくれる。

「んあんつ♥♥このクズ野郎！ 私に何をしたア!? んんつ♥なんで♥ああんつ♥こんなつ♥い、イクうううつ♥♥」

「戦闘中でもイツチまうなんてやらしい女だ。肉便器としてはそこそこ有能だな。よし、もつと感度を上げるように暗示をかけてやる。ワンツー・ジヤンゴ！」

「ちくしよう！ なんで能力が使えないのよ♥んんつ♥あはんつ♥待つて、いつたばかりで♥んんはあんつ♥敏感に♥んんんんあああんつ♥♥また、イクう♥イクつ♥イ

クうううつ♥♥はあ……♥はあ……♥んんつ♥♥♥」

さらに敏感になるように暗示をかけられた女は何度も何度も絶頂した。女は最初は声を抑えようと努力していたが、徐々に快感に身を任せて、大きな喘ぎ声を響かせるまでになっている。

「ジャンゴさん。遊び過ぎよ。ビビさんが頑張つて戦つてたのに。マンコなら後で私のと思う存分使えばいいわ♥」

そんなおれを力ヤガたしなめてきた。後でヤリてエなら、素直にそういうえばいいのに。

「んあつ？ ビビか。まだ戦つてんのか？ あいつ……」

「当たり前でしょ？ 七武海よ、七武海！ ジャンゴ、あなたなら倒すのは簡単でしょ？ あと、力ヤは抜け駆けしないこと。私だつてオマンコして欲しいんだから♥」

ナミはおれなら簡単にクロコダイルを倒せると口にする。まあ、そりやあそうなんだけど……。

「んつ？ まあ、簡単だけどよオ。ビビがケリをつけてエつて言うから

「そんなこと言つてビビさんにもしものことがあつたら……」

「ああ、心配ねエから。それ」

「えつ？」

ビビはクロコダイルを倒したいと志願した。ならば、その気持ちは汲んでやろうと思う。

だが、それでもおれの目の黒い内はビビの安全は保証されている。

「クソオ！ なぜ当たらねエ！」  
“砂漠の宝刀”<sup>デザート・スパード</sup>！

「ご主人様、クロコダイルはなんであんな明後日の方向に攻撃をしているのですか？」

「催眠で人を怪我させられねエように暗示をかけた。あいつはもう赤ん坊すら傷つけられねエよ。無自覚だから、攻撃が当たらないと錯覚してるんだ」

そう、おれは最初からクロコダイルに催眠をかけていた。誰も傷つけることが出来なくなる暗示を。

だから、ヤツはもう戦闘では誰にも勝てない。

「嵐脚<sup>ランキヤク</sup> ツ！」

「ぐつ！ クソがツ！」

ビビの蹴りから繰り出される斬撃は大理石の壁に大きな亀裂を生み出す。クロコダイルは回避に失敗して傷を受けて、顔を歪めて肩を抑えた。

「孔雀<sup>クジャツキ</sup>」——「ストリング一連スラッシュヤー！」

「そんなモンに当たるわけ——」

「ないでしようね。でも、懷に入り込む隙は出来た……。クロコダイル。あなたとの決

着をつけるわ……」

ビビはクロコダイルが避ける方向を見聞色の覇気を駆使して予測し、彼に急接近する。

アレを使う氣か……。六式を極めた者が繰り出せるあの技を――。

「な、何をするつもりだ……!?」

「遅い！」  
“六王銃”<sup>ロクオウガン</sup> ツ！

「——ツツツツ！？ ごぼあつ……」

ビビの武装色強化された両拳から繰り出されるのは内部破壊に特化した純粹な衝撃

内臓に直接強力なダメージを与えられたクロコダイルは吐血して、その場に倒れた――。

アラバスター王国の王女、ネフェルタリ・ビビは国の乗つ取りを企んだ元凶を自らの手で仕留めたのである。

「この勝負。おれたちの勝利だ……」

おれは勝利宣言をした。これで、ビビの望みは叶えてやれたな。さて、次はどうすつか――。

「ジャンゴさん。まだ、ヤツてるわ」

「あつ ♥ あつ ♥ あつ ♥ んんつ ♥ イクつ ♥ イクつ ♥ ♥ あああん ♥ ♥ んんんつ ♥ ♥ ♥ 」  
地下では、倒れたクロコダイルの傍らで女の喘ぎ声が響き渡っていた。  
おつと、ビビの戦いを見ていたから、射精することを忘れてた——。

## 新たな旅路へ

「ビビ、本当に来るんだな」

「もちろんです。ジャンゴさんに、こんな体にされちゃったのですから♥これからも愛してください♥」

メリーアー号のすぐ側でビビはおれたちに付いてくることを宣言した。

一国の王女よりも性奴隸の海賊を選んだのである。

まあ、彼女に入るにあたつていくつか仕込みは行つたが……。

「あのミス・ダブルフインガーだつけ？　あの人を替え玉にして大丈夫なの？」

「まー、多分、大丈夫だろ。城の連中や城下町の連中にはビビに見える暗示をかけて、さらにはビビ王女は病気つてことにして外には出さねエよう城の連中とあの女に念入りに暗示をかけたからな。んで、ビビには外に出るときや誰かと会うときはこれをつけてもらう」

「ちょ、蝶の仮面……」

おれはアラバスター王国の連中が王女の失踪に気が付かねエよう気を配つた。

ミス・ダブルフインガーコト、ザラつていう青髪の女に自分をビビ王女だと信じ込ま

せ、国の連中にもそういった暗示をかける。

そして、彼女の病気という設定も信じ込ませて、外の連中も気付かねエようには気を配る。誰にも会わせないように徹底するよう暗示をかけて。

そして、外に出たビビも正体が分からぬように、仮面を着用するように義務付けたのだ。

「偽名なんざ何でもいいがミス・パピヨンとでも名乗つときやいい。万が一、賞金首になつちまつてもそれで通るし、簡単には正体はバレねエだろう」

「大丈夫かな……。雑な気がするけど……」

おれはビビにこれから外では変装して“ミス・パピヨン”として通すことにするよう命じた。

カヤは雑だと心配していたが……。

「考えてみろ、アラバスタ王国の王女が海賊になるなんて荒唐無稽を誰が信じる？ そもそも、国民ですら目隠ししただけで誰一人としてビビだつて気付かなかつたぞ。まあ、全裸で公衆の面前でセックスしてたからかもしれないエが」

「キヤハハ！ どう考へても原因そつちじやない。でも、どうだつた？ やつぱり興奮した？」

「えつ？ う、うん。ちょっとだけ♥」

目隠しであり得ねエことをしたら国民すらビビだとは思わなかつたことは証明済だ。つまり、海賊になるなんてことがあり得ないのだから、多少似てると思われても問題はない。

ちなみに、ビビがあの件以来……露出プレイにハマつちまつた……。

「お待たせ。ポーネグリフを確認させてくれてありがとう。王女様」

そんな会話をしていると、ロビンがこの国に隠されていたポーネグリフを確認して戻ってきた。

コブラ王に催眠をかけて場所を聞いて、彼女にそこへ行かせたのである。

そして、ポーネグリフの確認を良しとする許可はビビが出したので、ロビンは彼女に礼を言つたのだ。

「私はミス・パピヨンよ！」

「…………ジャンゴ。これはどういう趣向なの？　あなたの性的な趣向は100%理解しておこうと思うから教えてもらえると助かるわ」

ビビが蝶の仮面をつけて偽名を名乗つたのが、おれのプレイの一環だと勘違いしたロビンは真剣にどういう意図なのか質問する。

こいつは、こいつで、頼めばどんなにエロい要求にも悦んで応える女になつたからな。

健気でいい女だぜ……。

「いや、これには事情があるのですよ。ロビンさん」

「事情……？」

カヤがおれよりも早くロビンにビビの変装の必要性について話そうとする。  
まあ、聰明なロビンのことだ。すぐに察するとは思うが……。

「それよりどうだつたんだ？ 知りてエ歴史とやらは分かつたのか？」

「いいえ。古代兵器のことしか書かれて無かつたわ。聞きたい？」

ロビンはお目当ての情報は手に入らず、おれに“プルトン”とかいう古代兵器の情報を  
について知りたいかと尋ねてきた。古代兵器ねえ……。

「うんにや、おれアロビンのこっちにしか興味がねエからな」

「んんつ♥わかつたわ。後でたつぶりとご奉仕させてね。ちゅつ♥」

相変わらずノーパンのロビンの膣内を弄ると、彼女はうつとりとした表情して、おれ  
にキスをする。

船に乗つたらすぐに可愛がつてやるぜ。

「おう。じやあ、出発するか。アラバスタ王国も後は海軍に任せりやあ問題ねエだろう  
」「はい！」

そして、おれたちはメリーア号に乗り込みアラバスタ王国を出発した。

次の島を目指して——。

「どう？ 私のおっぱい気持ちいいかしら？ んつ・んつ・あなたがして欲しいこと何でもするわ♥遠慮なく言つて♥」

メリーア号の一室でロビンはその豊満な乳でおれの逸物を挟み込み、圧力をかけながら懸命に扱いていた。

彼女は本当に何でもしてくれるエロい女である。

「キヤハツ♥射精しそうなの？ ちゅつ・ちゅつ・我慢せずに出せばいいのに♥」  
そして、ミキータは至るところに舌を這わせて口で奉仕する。

普段はこのように強気な態度なのに、ちょっと攻めるだけでヘタれて弱気になる彼女は嗜虐心を誘い虐めたくなる。

「いや、まだ出さねエよ。さてと、ロビン。どうやつてして欲しい」

「あんつ♥じや、じやあ♥後ろから思いきり突いて欲しいわ♥乱暴にして欲しいの♥」

ロビンの乳首を弄りながら、どんな体位でヤリてエのか質問すると、彼女はベッドから立ち上がり、尻を突き出して指で割れ目を開きながらバックで犯して欲しいと懇願した。

「いいだろう。ついでにミキータの中もお前の能力で濡らしといてくれ」

「お安い御用よ♥」

ロビンの次はミキータとするつもりなので、おれはロビンに彼女を適当にイカせるよう指示を出した。

すると、ミキータの至る場所から手が生える。

「へつ？ あつ♥んはつ♥あああんつ♥そ、そんな一度に♥♥んんんつ♥くふんつ  
♥あつ♥あつ♥あつ♥」

両方の乳首やマンコ……さらに口の中までありとあらゆる性感帯をロビンは攻める。ミキータは一度に押し寄せる快感に耐えきれずに弱々しく喘ぎ声を出す。

「じゃあ、いくぞ」

「んんつ♥気持ちいいつ♥あなたと一緒になれて♥あつ♥あつ♥あつ♥こんなに満たされた気持ちになるなんて♥んはつ♥あんつ♥もつと♥もつと♥もつとお♥んんんんつ

♥♥♥」

ロビンはすでにセックス依存症みたいになつており、体を重ねたときに至福の表情を

浮かべる。

そして、激しく乱暴に扱わると悦ぶ性癖の持ち主だ。首を締めろとか物騒なこと言うときもあるし……。

——ロビンは何度も絶頂を繰り返し、おれもそろそろ限界を迎えていた。

「よし、そろそろ出すぞ」

「——ツツツツツ♥んあつ♥またイクつ♥イクつ♥あつ♥あつ♥あなたも♥あんつ♥私の中に♥んんつ♥精子出して♥お願いつ♥出してええええ♥♥んあああああつつ♥♥♥」

必死で膣内射精をねだるロビンの子宮が精子を受け止めたとき——彼女は獣のような叫び声を上げて絶頂した。

それは普段の彼女からは考えられないくらいの乱れぶりだが、もう日常となつている。

ニコ・ロビンはセックスのときに野生的な本性を露わにする女だ。

「ジャンゴ！ 大変よ！ どうしよう！」

「なんだ、ナミ。取り込み中だぞ」

ロビンとの一回戦を終えてひと息つこうとしてたとき、部屋の扉が開いてナミが困った表情を見せる。

「ごめん。でも大変なのよ。ほら、ログポースが上に向いちやつて」

「なんだ。空島にログを奪われたのか」

「空島？」

ナミは指針が上を向いているログポースを見せたので、おれは空島にログを奪われたことを知る。

催眠を駆使してグランドラインの情報をかき集めているときに、たまたま“空島”なるものの存在を知ったが、まさか本当にそつちにログを持つていかれるとはな……。

「グランドラインの中でもマイナーな島だ。ロビンも知ってるだろ?」

「ええ。行き方までは知らないけど。空に浮かぶ島があるみたいよ」

「そ、そんなところが……?」

博識なロビンも存在は知っている空島。しかし、彼女の言うとおりおれも行き方は知らねエ。

「しかし面倒になつたな。空島なんざ、行つても仕方ねエんだが……」

「私! 行つてみたいです! 空島!」

「んっ? 空島に興味あるのか? お前……」

適当に船を探して他のログポースかエターナルポースを奪うか、島を探してログを溜め直すとか考えていたら、ナミと一緒にやつて来たビビが目を輝かせて空島に行きたいと声に出した。

「だつて、空の上を冒險出来るなんてワクワクしますもの」

「なんか、イキイキしてるわね」

「じゃあ、仕方ねエな。行つてみるか。空島に」

ビビが行きたいって言うなら空島とやらに行つても良い。どうせ、どこに行きてエとか目的がないし、空にだつていい女は居るかもしけれねエし……。

「そんな簡単に決めてしまつてもいいの？」

「可愛い性奴隸なつかまの言うことだ。出来るだけ叶えてやるさ」

「んもう。甘いんだから」

普段、身体を好き勝手にしてる以上はそれ以外の望みは出来るだけ叶えてやりてエ。

そう思えるくらいの女しか乗せてねエからな……。

「そう言うな。ナミの願いも叶えてやるからよ」

「じゃあ、考えとく。とりあえず、後で私もロビンと同じくらい愛して欲しいかな。

ちゅつ  
♥

「任せとけつて」

ナミは今度わがままを言うと口にして、後で肉欲を満たしてほしいとお願いした。  
生意気だけど、可愛げがあるやつだ。

「ジャンゴさん！ 大変よ！」

「なんだ、今度は」

「そ、空からガレオン船が落ちてきたの」

ナミたちの話が一段落つくと、今度はカヤが駆け足でこちらにやつて來た。  
どうやら、空からあり得ない落下物があつたみたいだ。

「いよいよ。空島が現実味を帶びて來たな。おし、お前らデツキに行くぞ」  
「ええ」

「わかつたわ」

「うん」

「ふあい♥イクつ♥んんつ♥♥」

「――ツ!?」

「デツキに上がろうと声をかけると、ミキータがアヘ顔を晒しながら返事をする。  
おれらがそつちをみると、彼女はロビンの手によつて未だに虐められ続けていた。  
「あら、ミキータ。ごめんなさい。イカせ続けてたの忘れてたわ」

「あ、あんたねえ……！　ひやうん♥」

「ふふつ……」

「ロビンさんもミキータさんも、遊んでないで来てください」と上げる。

「わ、私は遊んでないわよ！」

カヤはそんな二人に注意をして、ミキータはムツとした表情をしながらも手早く服を着てそれに従つた。

「たしき、こりやあどういう状況だ？」

「ご主人様！　そのう、空からガレオン船が落ちてきたかと思えば、あの大きな船がやって来て。サルベージをするとか言つてました」

「サルベージだあ？　ふーん。なるほどな。あの猿みたいな男が船長か？」

デッキに上がると目の前でデカい船がサルベージをしている。

指揮を取っているのは、猿顔の巨漢だ。

「おいコラア！　誰が猿上がりだつて！？　あんま、褒めんなよ。この野郎！」

「サルベージしたもので目ぼしいものがあれば差し出す。ログポースまたはエターナルポースがあれば、それも差し出す。ワンツー・ジャンゴ！」

奴らが何か調べてくれるなら、それはありがてエ。おれらは奴らの戦果と物資をいただくとしよう。

「あっさりとエターナルポース手に入りましたね」

「サルベージしてるつてこたア。この辺に拠点となる島があるつてことだからな」

「サルベージをしていたマシラ海賊団から『ジャヤ』という島へのエターナルポースを奪い取ることが出来た。」

「こんなに都合よくエターナルポースが手に入るなんて幸運だぜ。」

「キヤハッ！ ガレオン船からは目ぼしいものはサルベージ出来なかつたみたいだけど」

「でも、この地図にはなにかありそう。スカイピアって書いてある。もしかして空島の地図かも」

ビビは楽しそうにサルベージされたモノの中から出てきた地図を眺めていた。

スカイピアかあ。確かに空っぽい名前だが……。

「ロビンの拾ってきたのは——なんだ？ そのガラクタ」

「わからないけど。何か文明的なモノの形跡を感じたから……」

「ふーん。とにかく、このジャヤつて場所で空島の行き方を探るぞ。んで、もしも見つからなかつたら、ログが溜まるのを待つて次に行く。それでいいか？」

ロビンは謎のガラクタを興味深そうに眺め、おれは空島への行き方を探るタイミングツトをジャヤでのログが溜まるまでとした。

「ありがとうございます。ジャンゴさん。大好きです！」

ビビにそれを伝えると、彼女はおれに抱きつきながら、満面の笑みを見せる。

「キヤハッ！ 空島なんて本當にあるのかしら？」

「まつ、信じてねエヤツは多いだろうぜ。おれだつて話に聞いたことがあるだけで半信半疑だ」

「聞き込みなんてしたら、笑われそうですね。ご主人様」

おれだつて、空島の存在を完全に信じちやいねエ。確率は高いと思つてゐるが。

質問のやり方によつちやあバカな連中を相手にしなきやならねエかもしけない。

「だろうな。頭がおかしい奴らだと思う奴もいるだろう。だから、おれは聞き込みなんざしねエよ」

「悪い顔してるわね。何企んでんの？」

「なーに、いつも通りだよ」

おれは面倒臭エことは嫌いだ。手つ取り早くて、一番早い方法を実践するつもりでいる。

さて、ジャヤはどんな島かな……。

「ば、ば、バカな……懸賞金5500万ベリーザの大型ルーキーのベラミーがあんな弱そくな女に手も足も出ねエなんて……」

ジャヤのモックタウンという町はならず者が集まる町だった。そこで、おれはここで幅を利かせているベラミーという男の話を聞いて、ある酒場でそいつに喧嘩をふっかけた。

ベラミーはあつさりとそれに乗つて、後ろに控えていたカヤにボコボコにされたのだ。

その後、ベラミー海賊団とひと悶着あつたが、勝負は一瞬でついた。ベラミーも再び

立ち上がりつたが、今は倒れている。

酒場の中は騒然としていた——。

「お前らんとこの船長やられてるけど、なんか感想とかあるか？」

「あつ♥あつ♥あつ♥にやいです♥あつ♥あつ♥ベラミーが雑魚にやのが悪いでしゅう  
♥んはつ♥あんつ♥んんつ♥ジャンゴ様あ♥ああんつ♥♥」

「んんむつ♥ちゅつ♥ごめんなさあい♥ちゅぱつ♥んむつ♥んむつ♥じゅばつ♥弱小海  
賊団のくせに♥ちゅぱつ♥ちゅつ♥じゅるつ♥粹がつていましたあ♥だから命だけは  
♥ちゅつ♥ちゅつ♥たしゆけてくださいあい♥」

赤いバンダナとサングラスを身に着けた金髪のリリーという女は手マンされながら、  
泣き叫び、ピンク色の髪と泣きぼくろが特徴的なミュレという女は、必死でフェラしな  
がら命乞いをする。

たまには、催眠を使わず恐怖だけで女を屈服させるのも楽しいな……。

「おう、可愛い女の子にや暴力は振るわないぜ。おれたちやよオ」

「くそッ！ ナメやがつて！ スプリングツ——

「キヤハツ！ まだ動けるのね。諦めなさい。一万キロ・プレスツツ」

「ガハツ……！」

「良い椅子が出来たわア」

意外とタフなベラミーがまた立ち上がるうとしたので、ミキータが椅子にする。

ベラミーは女の尻に文字通り敷かれて屈辱的な表情を浮かべていた。

「なんつー強さだ。この女ども……無名の海賊団なのに……」

「さて、てめエらに時間をやる。実は空島行きてエんだが、行き方がわからねエ。そこでてめエらに方法を探してもらおうと思つてな。この辺りじや顔が利くんだろ？ ベラ

ミー海賊団は」

そして、おれはベラミー海賊団に空島への行き方を探るように命じた。

この町に詳しい連中が頑張つたほうが効果があると思ったからだ。

「そ、そんな……空島なんてあるはず……」

「バカ！ 殺されるぞ！」

「そういう議論はいらねエや。全力で空島の行き方を探したくなる。ワンツー・ジヤンゴ！」

「うわああああッ！」

そして、おれは連中に必死で空島への行き方を探つて来るよう暗示をかける。

ベラミー海賊団はこぞつて酒場から出て行つて情報を探りに行つた。

「有無を言わせないやり方ね」

「ベラミーをわざと挑発して、乗つた彼を痛めつけ、恐怖政治……そして、命令……」

「しばらく待つてりや、なんか分かるだろ」

ナミとロビンがおれのやり方に感心している。

知らない場所で自ら動くより人を動かした方が早いからな……。

「でも、ジャンゴさん。女性の方も解放したのね。珍しい」

「そりやあ、カヤたちを抱いてるから、最近は他の女たちがどうしても見劣りしちまつてよ」

「まあ、じやあ私のここ使う？ ううん、入れて欲しいわ、ジャンゴさん！」

リリーやミュレもいい女だつたんだが、カヤたちと比べると面白味に欠ける。それを伝えるとカヤはにつこりと微笑んで、スカートを捲り、何も履いていない下半身を露わにして雌穴を開きながらおれを誘つた。

「こういう躊躇なくどこでもマンコを出せるところがカヤの良さだぜ」

「んふつ、あんつ、あんつ、ちゅつ、ちゅつ、んんんつ、♥♥」

カヤはヤリたくなつたら場所を問わずに誘うくらい思いきりのいい女になつた。やはり、最初にこいつを自分のモノにしたのは正解だつたな。

おれは椅子に腰掛けながら、その上で必死で腰を振る彼女を見ながらそう思う。

「それにしても、カヤも随分と乳がデカくなつたよなア」

「それは、んんつ、あんつ、♥ジャンゴさんが毎日揉むからあ、あつ、あつ、♥イクツ、♥イ

クツ・んあんつ・♥・♥

カヤは出会ったときと比べて格段に発育が良くなつた。

病気が治つてよく食べてよく動くからかもしれねエが、今じや、胸もこのとおり揉みごたえがある。

嬉しそうにマンコをギュッと締め付け、彼女は絶頂した。

「おいッ！ この店は貸し切りかア！」

「んつ？ 悪イな、バカ騒ぎしててよオ。好きに飲んでて構わねエゼ」

しばらく、カヤを抱いていると黒い髪が特徴的な巨漢が店の中に入つて大声を上げたので、おれは貸し切りを否定する。

ヘエ、今まで見た奴の中で一番の貫禄があるな。

「ゼハハハハ！ 昼間からお盛んだな、兄ちゃん！ ヤリてエときにはヤル。海賊らしいじやねエか！」

「これだけが楽しみで海に出てるからな。好きに抱ける女を何人作れるかがおれの人生の指標みてエなもんだ」

男はカヤとヤツてる最中の ore に遠慮なく話しかける。

なんだ、こいつ……。空気読めねエのか……。

「バカバカしいことを言つてやがるのに覇気がすげエ！ 兄ちゃんの懸賞金はいくらだ？」

「900万ベリー……」

「なんだそりやあ？ あり得ねエだろ？」

そして、そいつは無遠慮におれの懸賞金を聞いて首を傾げた。

懸賞金が低いことが不満みてエだ。

「生憎、そつちで名を上げる野望ねエんだよ。お前と違つてな。運がいいぜ。おれの懸賞金が高かつたら襲いかかつて来ただろう？ そしたら、お前……死んでたかもしねエゼ」

「ゼハハハハ！ お見通しつてわけか。ちよつと、名を上げる必要性が出来てな。高額賞金首を探してゐるんだが……その覇氣でその金額のヤツが居るとは思わなかつた」

黒い髪の男の目はギラついていた。まるで、獲物を狙う野生の獣のように。どうやら、こいつは高額賞金首をぶつ倒そうと躍起になつてゐみたいだ。

結局、男はアテが外れたからなのか、何も注文せずに出ていった。

「何？ あいつ、ジャンゴのこと狙つてたの？」

「おれというか、大物賞金首を狙つてたんだろう。億を超えるような賞金首をな」

そう、あの男は目的を持つて探しまくっているみたいだつた。高額賞金首を……。

「ジャンゴさんが懸賞金を上げようとしないのつて……」

「ああいうバカを相手にしねエためだ。手つ取り早く、この海で名を売る方法は懸賞金が高エヤツに喧嘩を売つてぶつ倒すことだからな。ああいうのはキリがねエんだよ。そんなくだらねエことで、お前らの相手をする時間が潰されんのは勿体ねエ」

おれは面倒が嫌いだ。賞金を上げても変な連中につけ狙われるだけでいい事など1つもないのだ。

おれはバカの相手よりも女の相手がしてエ……。

「ゞ」主人様がそんなに私たちとの時間を大切にしてくれてるなんて……。そのう、今度はたしきのここを使つてくれますか♥』

それを聞いて、今度はたしきが下半身を丸出しにして、おれを誘つてきた。

こいつも随分と積極的になつたじやねエか。

「そんなに恥ずかしがるなつて。こつちに来い」

「はい♥じやあ入れますね♥あつ、おつきい♥んつ♥んつ♥あんつ♥んんんつ♥♥」  
たしきは自分の割れ目におれの逸物をゆつくりと挿入する。

こいつは対面座位がお好みらしいな……。

「胸を見せろ」

「わかりました♥ 乳首のピアス引っ張られて♥ あんつ♥ 感じちゃつてます♥ んつ♥ んあああつ♥♥」

おれはたしづに胸を見せるようになると、彼女はピアスのついた乳首を露わにした。

これを少し引っ張ると、彼女は喘ぎ声を大きくして、膣を締める力が強まつた。

「クリトリスの方のピアスはどうだ？」

「ひやいつ♥あんつ♥あんつ♥ずつとどんなときも刺激されて♥んつ♥んつ♥ノーパンのときは♥特にズボンに擦れて♥ビンビンに勃起してえ♥発情してまあす♥あつ♥あつ♥イクつ♥イッちやいますうううう♥♥」

たしづはクリトリスにもピアスをつけているせいで、そこが刺激されると簡単に発情してしまう。

力強く彼女の雌穴を突くと、恍惚とした笑みを浮かべながらたしづは絶頂した。

「キヤハ！ 次は私の中にお願い♥」

「ミキータ！ 次は私よ！ ほら、このいやらしいおっぱいでご奉仕するからあ♥」

それから暇つぶしに出かけたロビンが『モンブラン・クリケット』なる男の情報を仕入れて来るまで、おれたちはここで酒池肉林の宴に興じた。

結局、ベラミー海賊団は役に立たなかつたな……。

# 空島にて

「すぐ」一い。大きなエビが一気にメリーアー号をここまで運んできたわ』  
おれたちは今、空島にいる。話せば長げエんだが、黄金郷とかいうモンを探してゐるモ  
ンブラン・クリケットとかいうおつさんが、空島への行き方を知つていて、教えてもら  
えた。

連中の協力もあつて、ノックアッペストリームとかいう下から突き上げる猛烈な海流  
に乗つて空まで上がつて積帝雲という雲の塊まで乗り上げて來たんだが、ナミが居な  
きや危なかつたかもしけれエ。彼女の卓越した海流を読む力でメリーアー号はぐんぐん上  
昇したのだ。

んで、その後、雲の上を彷徨つていたら、変なゲートみたいなところを発見して老婆  
と会つたんだ。

「でも、あのお婆さん見るからに怪しくて、結局、怪しかつたわね。不法入国者とやらを  
意図的に出そうとしてたみたいだし」

その婆さん。入国料を払えとか抜かす割に、払わなくて通つていいとも抜かしやが  
る。

催眠でどういうことなのか調べてやると、金を払わなかつた不法入国者は犯罪者として捕まえるように通報してゐるらしいんだ。

このスカイピアとかいう場所を締めてる神が民衆への見せしめにするために……。だから、おれらは老婆に金を払つたと認識させてここまで無料でやつてきたのだ。

「罠が所々に仕掛けられてそう。確実にこの場所には悪意が蠢いてる」

「でも、楽しそうです。見てください。この幻想的な景色。天国に来たみたいですよ」

ロビンは罠の存在を懸念するが、実際に罠だらけだろうな。神とか如何にも胡散臭い。

ビビは無邪気に空の上のビーチに目を輝かせていた。確かに白一色の海に見たこともね工植物。女の子にやこういうのが幻想的に映るのかねえ……。

「キヤハツ！ あんな化物海流に乗つたんだもん。本当に天国に行つてもおかしくなかつたわよ」

「ご主人様、このままだとメリーア号は……」

「ああ、わかつてる。どつかでメンテナンスしねエとな。まあ、せつかく空島に来たんだ。そういうのは帰つてから考えりやあいい」

空に來た代償は大きく……たしきが懸念するとおりメリーア号の損傷は激しかつた。

どつか船大工のいる場所で修理できねエかな。

「空にビーチがあるなんて、考えもしなかつたわ。あんつ♥もう、エツチね♥」  
 「こんなにゆつたりとした気分で船を下りるなんて前は考えてもみなかつた。んつ♥ん  
 んつ♥したくなつたら、いつでも言つて♥」

雲のビーチで横たわりながら、おれは右手で隣に寝転がるナミの胸を、左手でもう片  
 方の隣で横になるロビンの胸を揉んでいる。二人を抱き寄せながら。

もちろん、下着は着けさせていないのでそのままの感触を味わえる。  
 「しばらくはこうして楽しんでるぜ。やっぱお前らはいい体してるよな」

ナミの張りと弾力がある巨乳とロビンの指が吸い込まれるくらい柔らかい爆乳を同  
 時に堪能出来るおれは既に世界を手に入れたと言つても過言ではない。

ずっと揉んでいられるが、ちよつと悪戯してやるか。

「あつ♥あつ♥あつ♥んんつ♥」

「乳首、そ、そんなに弄られると♥んあつ♥ああんつ♥♥」

ナミとロビンの乳首を抓んだり、転がしたり、弾いたりして遊んでみる。

二人とも敏感になつてるので、甘い声を上げながら、おれにしがみついてくる。

美女二人に甘えられるのも悪くねエ。

「おいおい、ナミは耐えてんのに、ロビンはちよつと怪しかつたな、今」

「う、ごめんなさい。軽くイッたわ。最近、さらに敏感になつて。勃起乳首を虐められた  
らすぐイクの。んんあツ。」

ロビンはちょっと乳首で遊んだだけで、簡単にイッた。

体を震わせながら、息を大きく吐き出しながら。

「ロビンったら、節操がないんだから。ひやんつ。もう、そこは反則。くふんつ。ああ  
んつ。」

「偉そうなこと言つて、ナミの中、洪水が起きてるじゃねエか」

ナミの割れ目の中に指を突つ込むと、中は既にヌルヌルしており少し指を動かすだけで止めどなく愛液が溢れてきた。

「し、仕方ないでしよう。あんたがそうなるように調教したんだからあ。んんつ。私の  
マンコの弱点知りつくして。あつ。弱いところばかり。んんんあああつ。」

ナミの感じる場所を重点的に指で弄ると、彼女は段々と声を荒くして、おれの腕にデ  
カい乳を押しつけながら体をくねらせる。

さらに指を激しく動かすとプシャーッ。愛液を噴出しながら、体をいやらしく痙攣させた。

「おお、すげエ潮吹いたな。ほら見てみろよ。お前の雌臭いマン汁でベトベトになつち  
まつた」

おれはナミの愛液まみれの手を彼女の顔に近づける。

手からは彼女から発せられる淫らな臭いが漂っていた。

「み、見せないでよ♥そんなの♥そ、それに、臭くなんかないわ♥あんつ♥」

ナミは自分のマン汁をみて恥ずかしそうに顔を赤く染めて、ちょっと反抗的になつたが、クリトリスを指で弾くと大人しくなる。

「じゅぶつ♥じゆるつ♥じゅぶつ♥ずずつ♥じゆるるつ♥」

「おい、ロビン。いきなり口で奉仕し始めんなよ」

ナミの体で遊んでいると、ロビンがおれのズボンを脱がして勢いよく逸物を咥えこんできた。

彼女のフェラテクは性奴隸なかまの中で断トツで上手く、おれがフル勃起するのに時間はからなかつた。

「じゅぶつ♥ここをおつきくしてくれたら、入れてくれると思ったから♥じゅぶつ♥じゆるつ♥」

「浅ましいやつだ。口でおねだりすりやあいいのに、フェラするなんてよ。まあいい。お前が勝手に腰を振れよ。おれはナミの体触つてるから」

おれはロビンの強引なおねだりに応えてやろうと、彼女に跨がるように指示した。

まあ、その間もナミの体で遊ぶのは止めねエけど。

「わ、わかつたわ♥あんつ♥ぜ、全部はいつた♥あああつ♥ああつ♥ああつ♥やつぱりこ  
れじやなきやダメみたい♥んんんあつ♥♥」

ロビンは嬉しそうに自分のマンコを開いて、おれの逸物を手慣れた手つきで自分の中  
に入れる。

そして、ガンガン腰を振つてヨガリ声を上げていた。

「んつ♥んつ♥あんつ♥今度はもどかしい所ばかり♥んんつ♥そんなにされたら……。  
ああんつ♥♥」

その間、おれはナミの膣の中でもあえて快感が少ない所ばかりを触る。

焦らすようにねちつこく、ゆっくりと……。

すると、ナミは困つたような表情を見せて目がトロンと零れそうになつた。  
「そんなにされたらどうなんだ? ナミ、正直に言え」

「つ、次は私のいやらしく発情したあ♥んんつ♥オマンコ使つて欲しくなつちやつた  
のぉ♥♥んあつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥」

ナミのスイッチが入つて、むさぼるようにおれにキスをしてきた。

普段は生意気でも、彼女は発情すると誰よりも甘えてきて何度もキスをする。

「あああつ♥ああつ♥ああつ♥ああつ♥いいつ♥♥イクつ♥♥イクつ♥♥イクウツ♥♥

♥」

しばらくナミとイチャイチャしていると、ロビンがおれの上で激しく体を反らしながら絶頂した。満足そうな表情を浮かべながら。

「うふつ♥ 次は私の番ね♥ ああつ♥ どうしたのジャンゴ♥ んんつ♥ いきなり立ち上がりて♥♥ んんんつ♥♥ あああんつ♥♥」

ナミが自分の番だと喜んでいるとき、おれは立ち上がりながら彼女を起こす。そして、彼女の腰を掴んで後ろから思いきり突いた。

「いや、向こうに天使がいてよ。こっち見てるから、挨拶しようと思つてな」

「天使？ だからってえ♥ あんつ♥ このままつ♥ んあつ♥ 歩き出さなくともお♥ ああんつ♥♥ んつ♥♥ んつ♥♥ んつ♥」

なぜ、立ち上がったというと、ちょっと離れた場所にハープを奏でている可愛い天使のような娘を発見したからだ。

おれはナミとセックスしながらそちらに向かつた。

「ジャンゴ、あの人こっちを見てるというより、動けないみたいだけど」

「そりやあ、ここから目が離せないように暗示をかけたからな」

「こんなに遠くから、かけられるの？ 耳も聞こえないのに」

「簡単な命令ならな。このチャクラムの揺れを見れば、視覚から催眠をかけられる。あ

の子は戸惑つてゐるはずだぜ。なんせ、ナミとおれのセックスから目が離せずに発情して  
いつてるんだからよ」

おれの催眠は視覚か聴覚、どちらかに干渉出来れば発動する。最初は簡単な暗示でも  
繰り返せば繰り返すほど、深く暗示がかかるようになる。

あの女の子にはおれたちから目が離せなくなり、段々と発情するよう暗示をかけ  
た。今はそれで十分だ……。

「んんんつ ♥ ♥ あんつ ♥ ♥ あああつ ♥ ♥ もうダメつ ♥ ♥ イつちやうつ ♥ ♥ イつちやうつ  
♥ ♥ イグううううう ♥ ♥ ♥ ♥」

「おいおい、だらしねエぞ。ナミ」

「ひやんつ ♥ ゴ、ごめんなしやい ♥ 気持ち良ひゆぎて ♥ しゅぐにイッひやつた ♥」

天使のような女の子の目の前でナミは大声を上げながら絶頂した。

そして、呂律が回らなくなりながらも、謝罪する。

「んで、お嬢ちゃん。名前は？」

「こ、コニスです。へそ！」

「お、おう。おれら、今、こつちに着いたばかりでよオ。知らねエことばかりなんだ。お  
れの命令に従つてくれたら助かる。ワンツー・ジャンゴ！」

ハープの演奏を中断して、女はコニスと名乗った。『へそ』という言葉の意味はわからぬエが……。

「そ、そ、うなんですか？　それなのに……、あんなこと……♥私でよろしければ、何でも聞いてください」

「何でもねえ。んじや、とりあえずコニスのオマンコについて色々と知りてエな」

「おれは何でも質問してくれていいと言つてくれたコニスにマンコの解説を頼んだ。

「はい。わかりました。私のオマンコについてですね。ええーっと。これで見えますか？　まず、恥丘ですが私の陰毛はこんな感じで少ししか生えてません♥」

コニスは下着を脱いで、スカートを捲くつてM字開脚をしながら自分の性器をおれに見えやすいようにする。

彼女の言うとおり、金色の陰毛がうつすらと生えていた。

「このとおり大陰唇にもちよつとだけ陰毛が生えています♥小陰唇のビラビラはよくオナニーするときにつつてたら大きくなっちゃいました♥んつ♥そうです、そんな感じで触つてます♥あんつ♥」

コニスは清楚そうな見た目とは裏腹にビラビラが大きく、特に右側が肥大化している。

おれがその小陰唇を軽く抓むと彼女はビクン♥と体を震わせた。かなり発情している。

るみてエだな……。

「膣口にはまだ膜があります♥ コニスはまだ処女だからです♥ クリトリスはこのように皮が被つてますが、こうやつて♥んつ♥んあつ♥んんんつ♥丹念に指で刺激を与えると♥んんんつ♥勃起して少しだけはみ出します♥」

コニスはそのまま割れ目を指で大きく開きながら自分が処女であることを告白した。そして、クリトリスを指で転がすように弄り勃起させて見せる。

このときの彼女の表情はスケベな本性が丸見えになつていていやらしい声が漏れても違和感がなかつた。

「じゃあ、今からコニスちゃんの処女、貰つていいか?」

「もちろんですよ♥粗末な処女マンコですが、貰つてください♥どうぞ♥」

コニスに処女を貰つても良いかと質問すると、彼女は笑顔でそれを受け入れる。

それじや遠慮なく頂くとしよう。

「悪いな。んじやあ、特別にコニスのマンコは痛みが全部快感に変わる。痛けりや、痛いほど気持ち良くなつてヨガつてしまふ。ワンツー・ジャンゴ。これで、コニスちゃんの初めてはいい思い出になるぜ。イクときはちゃんと教えてくれよ」

おれは前のビビみたいに泣き叫ぶのを見たいという気分ではなかつたので、コニスには痛さが快感になる暗示をかけた。

そして、逸物をコニスの割れ目に当てる。

「は、入つてきます。はうううつ——ツツツツツツ　あああんつ　♥　♥　♥　イクつ　♥　イ  
クつ　♥　イクううつ　♥　♥　♥　あつ　♥　あつ　♥　あつ　♥」

ブチブチとした感触とともに彼女の雌穴からは破瓜の血が漏れる。

しかし、それと同時にコニスは泣き叫び出しそうな声を上げながらいきなり絶頂した。

体はガクガクと痙攣して、口からは涎が、鼻からは鼻水が、目からは涙が溢れ出ている。

こりやあ、ヤリすぎちまつたか……。

「よつぽど痛かつたんだな。挿入しただけでイつちまつた。動かすぞ」

「ああんつ　♥　♥　き、きもちいいです　♥　んあつ　♥　んんつ　♥　奥まで当たつてます　♥　ああつ  
んんあつ　♥　あつ　♥　あつ　♥　あつ　♥　んつ　♥　はあ　♥　あつ　♥　あつ　♥　あつ　♥」

最初のひと突きが強過ぎたことを自覚したおれは、今度は優しく腰を振る。するとコニスは快感に身を任せて艶やかな声を出すようになった。

「こ、コニスさん！　な、何をしているのですか!?　あなたたち！」

そんな中、変な乗り物に乗っているおっさんが血相を変えてこっちに来た。誰だ?

こいつは……。

「ち、父上……？あんつ♥あつ♥あつ♥」

「なんだ、父親か。おれらの行動の違和感が消える。娘の処女を貰つてやつたおれに感謝する。ワンツー・ジャンゴ！」

コニスは喘ぎながら、彼を自分の父親というようなセリフを吐いた。  
なるほど、父親か。んじやあ、適当に暗示をかけておくか。

「い、今♥んつ♥んあつ♥この人につ♥あつ♥あつ♥処女を貰つてもらいました♥あつ  
♥あつ♥んんつ♥あつ♥」

「そ、そうでしたか。すみません。娘の処女を受け取つて頂いてありがとうございます」  
コニスが父親の前でセックスを披露しながら、処女が奪われたことを告白するも、彼  
は頭をペコペコ下げてお礼を言う。

「なあに、どうつてことねエよ。おら、処女マンコの中に出してやる。コニスはそれが一  
番の幸せだよな？」

「ひやいつ♥♥んんつ♥♥中に出して貰えたら嬉しいですつ♥♥んああつ♥♥イッちゃ  
いますつ♥♥あああんつ♥♥んんんんんつ♥♥♥」

コニスはエロい笑みを浮かべながら、絶頂したので、おれは遠慮なく彼女の処女マン  
コに精液を注いだ——。

それにしても、ここに着いた時から無遠慮な気配を感じるな……。  
おそらくこれは、この島全体を覆うような巨大な見聞色の霸氣——。  
あのババアの言つてた神とやらのそれなのか……。コニスたちに後で聞いてみるか  
——。

# 目指せ黄金郷

「ゴッド・エネルねエ。せつかくコニスちゃんと気持ち良くなつてたのに、その最中に喧嘩を売つてくるとはなあ」

空島で起こつていることを全て、コニスに質問して答えてもらつてた。

話をするだけじや暇だから彼女とセツクスをしながら。

可愛らしい喘ぎ声を出しながら真面目に質問に答えるコニスはエロくて良かつたのだが、エネルに対する質問に答えた直後、空から雷撃が降つてきやがつた。

どうやら、エネルはロギア系のゴロゴロの実の能力者で見聞色の霸気とその能力を広範囲に併用することで、国中を盜聴しているみたいなのだ。

で、コニスがヤツがこの島全体を恐怖で支配していると不満を漏らしたから、神の鉄槌を気取つた攻撃がこちらに来たというわけだ。

「コニスさんも、あんな避け方をされるとは思つてなかつたでしようね」

おれはコニスと繋がりながら、その攻撃を躱した。彼女は驚いて小便を漏らしちまつたが……。

そのあと、すげえ恥ずかしそうにしてたから、めちゃめちゃ犯してやつたぜ。

そこで、せつかくの楽しみを邪魔しやがつた、エネルとかいうクソ野郎をぶつ倒すために、おれらはアツパー・ヤードとかいう奴の居住地に足を踏み入れたんだ。

「合体しながら、ジャンプですかあ。ねえ、ジャンゴさん。今度、私としたときもやってみてください」

「キヤハツ！　あんた、段々と性癖がアブノーマルに偏ってきてない？　どんだけ冒険心が強いのよ」

ビビはエツチなことに何でも興味津々な、いやらしい娘になってしまった。

あの露出で吹つ切れたのか、ロビンやミキータにどんなプレイをしたのか事細かに質問したりする。

「それにしても、気になるわね。この森の生態系——巨大だけど、ジャヤとそつくりなの。サウスバードも居るし」

「そういえば、妙ですね。あの鳥つて特殊な環境にしかいないのでは？　も、もしかして、ノックアップストリームで……」

「カヤ、私も同じことを考えているわ。クリケットから聞いたノーランドという男の逸話も含めて推理すると」

「ここは昔——ジャヤだつたつてことですね」

ロビンとカヤは妙に気が合うらしく、よく学問やら何やらを楽しそうに語り合つて  
る。

もつともカヤがロビンから色々と教えて貰つてゐる感じだが……。  
彼女らはここが昔ジャヤだつたと仮説を立ててゐるな……。

「ちょっと、ロビン、カヤ。何を言い出すの？ このアッパーヤードつて場所がジャヤ  
だつたつてこと？」

「たしきさん、スカイピアの地図を持つてますか？」

「え、ええ。ここにありますけど」

ナミもその話が気になつたらしく、それについて質問すると、カヤはたしきにスカイ  
ピアの地図を出すように促した。

そう、あのスカイピアとはこの島全体のことだつたのだ。

「ジャヤの地図とスカイピアの地図をこうやつて重ねると——」

「ドクロマークになつたわね。キヤハハ、これは何かの偶然かしら」  
「偶然じやないわ。ここは確かに昔はジャヤだつたのよ。環境の変化で植物や動物が巨  
大化しているけど……。もしかしたら……黄金郷は……」

「こ、ここにあるかもしけないってこと？ 黄金郷を髑髏の右目に見たつてノーランド  
は言つてたみたいだし。ねえ、ジャンゴ！ 聞いてる？ 黄金郷よ、黄金郷！」

ノーランドがかつて見つけたという黄金郷。後にそれは見つかなかつたとして、彼は嘘つきの汚名を着せられ処刑された。

ヤツが探した黄金郷がノックアップストリームによつて空まで吹つ飛ばされたとしたら——このアッパーアードに黄金郷はあるということだ。

「聞こえてるよ。金かア……確かに魅力的な響きだな。よし、そいつを頂こう」「そうこなくつちや！」

ナミは黄金郷にテンションを上げて、おれの腕に胸を押しつけながら絡みつく。まつ金なんざ、いざとなつたら幾らでも稼げるが、頂けるモンは頂いちまおう。たまには海賊らしく……。

「で、エネルとやらは色んなヤツの恨みを買つてるつてわけか」  
「襲つてきたゲリラはおそらくこの場所の先住民ね」

エネルからこの大地を奪い返そうと、ジャヤから昔吹き飛ばされたこの場所の原住民の子孫たちがゲリラ活動をしていて、おれたちにも襲いかかつたので、返り討ちにした。

「ふーん。まあ、奴らがどうなつても良いが、いい女には死んで欲しくねエナ」

「あなたが犯すため？」

「そういうこつた。見ろよ、この体……格好までもエロいときてやがる」

そのうちの一人がなかなかの上玉だったので、おれは催眠で眠らせて連れてきたのである。

ヤルのに手頃な場所に。

この女、戦士だからなのか暑いからなのか、やたらと露出度の高い格好をしていた。ヘソと谷間が丸出しな上に、スカートまで短い。こりやあどう見ても、犯されるための格好だ。

「遊びも程々にしてね。ジャンゴさん」

「ご主人様、私たちは先に行つてきます。でも、後でそのう……」

「おう。すぐに追いつく。ああ、後でたくさん愛してやる。そんな顔すんなよ」

「はい。お願ひします」

カヤたちは見る趣味はないからなのか、おれを置いて先に黄金郷へ向かつていった。まあいいや。これから、この戦利品で楽しむのだから。

「よしここに座れ、お前の名前は?」

おれは女を盛り上がつた木の根の上に座らせて名前を尋ねた。おおつ、張りがあつてデカさもちよどいい乳だな。衣服の上からでも揉むとわかる。

「……すうー、すうー、ラキです。んんつ♥」

「へえ、ラキっていうのか。とりあえず、今からはオナニーしながら話せ。今からおれがお前のご主人様だ。命令には絶対服従だ。ワンツー・ジャンゴ」

胸を揉まれて寝ながらでも少しだけ感じているラキという女に絶対服従の暗示をかけて、オナるよう命じた。さて、どんな感じでこいつはオナニーするのかな？

「わかりました。ラキは今からオナニーをします。ご主人様……。んつ♥……ふう

……ふう♥んんつ♥」

ラキは眠りながらショーツの上から股間を弄りだす。指で股間を擦り続けると感じて来たのかショーツがゆつくりとシミを作る。

程なくしてラキのショーツは愛液でずぶ濡れとなつてしまつた。

「随分と手慣れてるな。普段からそうやつてオナニーばかりしてるのか？」

「は、はい。んんつ♥……ふう♥やることが無いときは、毎日2回くらいオナニーしてます」

あまりにもスムーズにショーツが濡れるほど感じていたので、オナる頻度を質問すると、こいつは暇な時は2回もやつてるらしい。済ました顔して淫乱なやつだ。

「オナニー好きなんだな。お前は。パンツ脱いでいいぞ」

「んんつ♥……ラキはオナニー、大好きです……んつ♥……あんつ♥はあつ♥はあつ♥はあつ♥はあつ♥はあつ♥」

ラキは眠りながらショーツを脱いでオナニーを続ける。

最初はゆっくりとしていた指の動きも段々と激しさを増してきた。割れ目の中で指

を前後させるクチュクチュ♥という音と共に愛液がラキの股から大量に滴り落ちる。

「イキそうになつたら、ちゃんと言えよ」

「んんつ♥はあつ♥はあつ♥ご、ご主人様、イキそうです♥んんつ♥ああつ♥ラキのオマ  
ンコはもう限界です♥」

ラキはイキそうになつたと切なそうな声を出す。股間を突き出しながら、指の動きは  
さらに激しさを増して。

「よし、イつた瞬間、意識だけ起きるんだ。イつて良いぞ」

「はつ♥わかりましたつ♥んつ♥んんつ♥ああつ♥んんつ♥んんつ♥あつ♥あつ♥あつ

♥あつ♥あつ♥イキますツ♥ラキのオマンコがイキますつ♥♥んあつ♥♥んんんつ

♥♥♥——はつ!? わ、私は何を? お、お前はご主人様! な、何を言つてるんだ

……私は」

愛液を撒き散らしながら彼女は絶頂を宣言する。

そして、いやらしく腰をくねらせながら、イつた余韻に浸ろうとしたところで、彼女は目を覚ました。

「おれをご主人様と呼んでいることに戸惑っているな……。」

「おはようさん。オナニーが大好きなラキ」

「あんつ♥くつ……、ご主人様！ 私に何をしたんだ？！ くそつ！ どういうことだ！」

「ひんつ♥んんつ♥」

「ラキはキツと鋭い視線をおれに送つたが、マンコの中に指を入れると彼女は快感によつてビクン♥と体を震わせる。

「やつぱこばかり触つてたから、弱点はここか」

「ああつ♥ああつ♥やめろつ♥ご主人様つ♥ああんつ♥あんつ♥あんつ♥んんんつ♥

♥」

「彼女がオナニーをしていたときに、よく弄つていた場所を集中的に中指と薬指で刺激する。」

「グチヨグチョに濡れている中を弄ると、ラキの膣は愛液を噴射しながら収縮しておれの指を締め付けた。」

「あーあ、ラキが節操なくイキ散らすから、お前のマン汁でこんなに汚れちまつた。謝れ」

「な、なんだと!? そんなこと……。ラキのオマンコが雑魚すぎてマン汁を吹き出してご主人様の手を汚してすみませんでした」

彼女にマン汁まみれになつた指を見せながら、謝罪を要求すると、彼女は頬を赤く染めて素直に謝る。その姿は無様で笑えてきた。

「じゃあ舐めてきれいにしてくれよ」

「くつ……! わ、わかりました。ペろつ ♡ ペろつ ♡ ちゅつ ♡」

そして、ラキは自分の愛液の匂いに顔をしかめながら、舌を出してきれいにそれを舐めとつた。

屈辱に打ち震えた彼女から発せられる殺意がなんとも心地良い。

「じゃあそろそろ具合を確かめてやる。工口いおねだりを笑顔でしてくれ。頭悪そまだが、出来るよな」

「バカにして! 女をなんだと——あはつ、ラキの発情したいやらしい雌マンコをご主人様の逞しいオチンポ様でいっぱいヨガらせてください ♡ やめろつ! やめてくれ! 殺す! 絶対に殺してやる! ご主人様あああ!」

彼女は命令に従つてへらへらと笑いながら、立ち上がり、ケツを突き出しながら割れ目を開いておれにおねだりをした。

そんなに言うなら仕方ないな……。

「じゃあ、頂くぜ。シャンティアの戦士とやらのマンコをな」

「あつ♥んんつ♥あんつ♥やめろつ♥くそつ♥んんつ♥あつ♥あつ♥あつ♥絶対にい♥  
絶対に殺してやるう♥んんつ♥んんんつ♥♥」

ラキのマンコはいつたばかりなので敏感になつていてるのか、突くたびに絡みつくように締め付けてきた。

彼女はおれのことを罵倒するが、すぐに快感に負けてヨガリ声を上げる。

「で、感じてるのか？ こんなところで犯されて」

「か、感じてる♥あつ♥あつ♥あつ♥き、気持ち良すぎてイキそなくらい♥ああんつ♥  
んんつ♥あああんつつ♥♥♥」

彼女の身体はもう既に絶頂寸前らしく、悔し涙を流しながら、膣圧を強めていた。

その屈辱に晒された表情がおれには堪らない。ついつい、突く力を強めてしまう。

「気を付けたほうがいいぜ。いつたら、おれのことが好きで堪らなくなる暗示をかけと  
いたからよ。あと、イクなら、イクって言えよ」

「そんにやのありえない♥♥こ、こりよしてやる♥くしょおおお♥ラキのオマンコ♥イ  
クつ♥きもちよしゆぎてイクう♥イクツ♥イクツ♥イクうううう♥♥♥ああああ  
あつつつ♥♥♥♥♥」

ラキにかけた暗示は絶頂とともにおれへの好感度が最高潮に上がる暗示だ。

彼女はよだれと涙を流しながら、森中に響き渡るくらい大声で絶頂すると宣言する。身体を大きく痙攣させたあの彼女は恍惚な表情を浮かべていた。

「んむつ♥んむつ♥んむつ♥ちゅつ♥おいひいです♥ごひゅじんしやまのチンポ♥ん  
むつ♥んむつ♥」

その後の彼女は従順そのものだつた。

ラキはおれのことを、好きになり美味しそうに逸物をしゃぶつてゐる。今まで、何人もこうしてきてけど、楽しいんだよなこれが。

「まあまあ、上手いぞ。このまま出しても良いか?」

「ひやい♥精子飲ませてくだひやい♥じゅぶつ♥じゅぶつ♥んんつ♥んんんつ♥」

おれは彼女の口の中に出すと、ラキは嬉しそうにそれを受け止めた。

この支配してゐる感覚は催眠術じやねエと味わえないよな。

「口を開けろ。よし、飲んでいいぞ」

「あーん♥ゴツクン♥お、美味しかつたです♥ありがとうございます♥」

ラキは口に溜まつた精子を見せて、ゴクリとそれを飲み込み、頭をペコペコ下げてお礼をいう。

とりあえず、飽きたからこの女はもういいや。

「じゃあ今日から毎日、最低でも10回はオナニーしてイつておけよ」

「は、はい♥毎日いっぱいオナニーします♥ご主人しやまあ♥」

彼女はニコニコと笑つてさつそくオナニーをし始めた。

やつぱ、強気で固い女が淫乱になる様子を見るのは止められね工な。

「——黒刀・飛時雨ツ！」

「ヤハハハハツ！ 斬撃など、私には——ぐはつ！ な、なにい！ お前も私を……」

太鼓を背負つてる変な笑い声の男に、たしきの飛ぶ斬撃がクリーンヒットして、やつはダラダラと血を流しながら驚いた顔をしていた。

「今よ！ みんな！」

「ぎにやああああツツツ」

そして、スキだらけになつた男は、ナミたちによつて一齊にフルボツコにされる。

時折、雷によつて攻撃をしたりしてゐるから、あいつがゴロゴロの実の能力者か……。動搖してゐるせいで、精度が酷いな。全然、当たつてねエジやねエか。

「で、エネルつてのはお前か？」

「はあ、はあ……、この女共は何者だ!? この神である私に！ 何度も攻撃を!? な、なんだそれは？ 武器か？」

チヤクラムを揺らせて見せながら、おれが彼に話しかけると、彼は焦り顔をして消え去つた。

逃げ足は随分と速いやつみてエだ。

「あつ！ 逃げたわ！」

「ジャンゴさん、遅いです」

「雷の速度なので、捉えるのが大変なのよ」

「キヤハツ！ ロビンが金玉握りしめた時の慌てた顔は傑作だつたわ」

「むにむにしたわ……」

「さつきばつちり暗示はかけた。大丈夫だ。もう、あいつは無力だよ」

エネルは逃げ出したが、言いなりになる暗示はかけておいたし、既にやつはおれの見聞色で居場所は突き止めている。

つまり追跡は簡単つてことだ。

おれたちはエネルを追いかけていつた——。

「何、この船は……」

「大きな船……こんなの何の目的で……？」

「ヤハハハハツ！ 貴様らのような連中に付き合つてられるか！ 行け！ マクシム！」

「私をフェアリー・ヴァースまで運ぶのだ！」

エネルは大きな方舟のようなものを作つて、空に浮かばせようとしていた。  
どうやら自らの能力を動力として飛ばそうとしているらしい。

「面白そうな船だな。おれらも乗せろよ」

「し、仕方ないな。さっさと乗り込め」

「おう。悪いな。エネル」

「なんか面白そだつたので、エネルに乗せるように口を出すと、奴は素直にそれに従つた。

「どんなに強からうが、こうなるともう奴は無害だ。」

「黄金の鐘？ そんなものはなかつたぞ。いや、待て……。ヤハハツ！ 心当たりがある。こっちの方向だ。飛べ！ マクシムよ！」

その後、エネルに黄金郷のことを聞いただと、彼は黄金を既にこの船に持ち込んだらしい。そういや、この船にはやたらと金が使われているな……。

さらに、黄金の鐘については知らなかつたようだが、ロビンの話を聞くと心当たりがあるようなことを言つて、船を空に向けて走らせた。

「うわあ、すごい。船が空を飛んだわ」

「絶景ね」

「ゴロゴロの実の力の恐ろしさが分かりますね。霸氣を覚えてなかつたらと思うと……」

エネルの奴は大した能力者だ。霸氣を覚えてねエヤツからすると無敵の強さを発揮するだろう。

見聞色の霸氣まで使えるから、武装色を覚えてたら面倒だったかもしけねエ。

「ジャンゴさん。その、ありがとうございます。こんなに楽しい冒険に連れていくつてくれて」

「なんだ、ビビ。改まつて」

空飛ぶ船の旅を楽しんでいると、ビビがおれにお礼を言つた。

少しだけ頬を桃色に染めながら。礼を言われることなんざやつてねエんだけど。

「嬉しいんです。毎日、ドキドキして過ぐせる今がとつても幸せで。好きな人とこうしてきれいな景色が見れることも。だから、これからも——」

「安心しろ。お前はおれの性奴隸だ。ずっと愛してやるよ」

「はい。愛しています。ジャンゴさん♥」

ビビは毎日楽しいと嬉しそうに語り、おれに飛びついて愛を語る。

大事にはしてやるぜ。その代わりに好き勝手やつてるからな……。

「キヤハツ！ 本當だ！ 見えてきたわよ！ 黄金の鐘！」

「これで、ノーランドの言つてたことが全て本當だつて分かつたわね」

「ああ……、そうだな。だからなんだつて話だが……。まつ、とりあえず鳴らしてみるか？ どんな音がするか興味がある」

「エツチ以外の時は割とお人好しなのね。あなた。クリケットさんに教えてあげるつもりなんでしよう？ 黄金郷があつたつて

「バカバカしい。そんなんじやねエつて。それよか、さ。あとでビビと一発ヤルんだが、ナミも一緒にどうだ？」

「んつ♥揉みながら誘うのはズルいわよ。あとでいっぱいご奉仕させてね♥ちゅつ♥」

とりあえず、空には黄金郷は確かにあった。

なんか、空島には領土問題とか色々とあるみてエだが、んなことには興味はない。てめえらで解決しろってんだ。とにかく、空の冒険はこれで終わりにする。

黄金の鐘なんざ目立つモンは持つて帰つても面倒になりそだつたから、エネルの蓄えてた黄金を拝借してミキータの能力でさつさとメリーア号に乗せた。

おれらにや、これで十分だ。そもそも、金にはあまり興味がねエし。

そして、コニスに空からの帰り方を教えて貰つて、タコバルーンとやらを使つてさつきと元の海に戻つた。

最後の夜の寂しがつて必死で縋つてくるコニスとヤツたのには興奮したなあ。あいつは、もう普通のセックスじや満足しねエだらうな……。

# 皆の“アイドル”ボルチエ

「デービーバックファイト？」

「おう。海賊達の楽園“海賊島”で生まれた、より良い船乗りを手に入れるための海賊が海賊を奪い合う、いわゆる“人取り合戦ゲーム”ってやつだ」

空島の次の島は細長いモノが多い島だった。そこで出会った銀ギツネのフォクシーという海賊から“デービーバックファイト”というゲームに参加しねエかと話を持ちかけられたのだ。

「そんなのジャンゴさんに必要ないじゃない。仲間が欲しかつたら、どうとでもなるんだから」

「そ、そうですよ。海軍にいた私だつてその……、ご主人様に身も心も絶対服従させられましたし。あつ、全然後悔とかしてませんよ。愛してもらえて幸せですし」

「まあ、ヤル必要はねエんだけどさ。単純にログが溜まるまでの暇つぶしさ。既に相手連中には催眠術をかけてるし、ルールもおれの思うがままなんだから」

実際、こんな話に乗る必要性はゼロなんだが、このフォクシーという男は面白い奴で、色々なゲームを用意できる準備があるという。

女たちがゲームをする姿を見るのも面白エと考えたおれは話に乗ることにした。

「まさか、あなたエツチなゲームを私たちにやらせようとか考えるんじやないの？」  
「ええっ！ ジャンゴさん！ 本当にですか？ すつごく面白そうです！」

「キヤハツ！ あなた……、最近、王女だつたこと完全に忘れてない？」

「いいじやねエか。海賊らしく乱れるのも。どうしても嫌ならゲームにや参加しなくて  
もいいぜ」

そう、フォクシーに催眠術をかけてエロいゲームでデービーバックファイトを開催させることにした。

ビビは楽しみだと言っているが、嫌なやつを無理やり出すつもりはない。今回は遊びだからな。

ヤリたい奴がやればいい……。

「そ、そんなこと言つてないじやない。あなたが喜ぶならゲームくらいするわよ」「私もそれであなたが楽しんでくれるなら、何だつてするわ」

「そつか。そつか。やる気になつてくれてありがとな。じゃあ連中を待たせてるし、行くとしようか。一人どうしても欲しいやつが居るんだよ」

「はいはい」

それはそうと、フォクシー海賊団に性奴隸にしたいと思つた上玉が居た。

おれはそいつを頂いちまおうと考えている。今日は特別に相手の土俵のゲームに勝つことで。

そして、デービーバックファイトは始まった。

ルールは“3コインゲーム”という三本勝負となつており、ひと勝負ごとに仲間を奪い合うという形式のゲームだ。

つまり、三回ゲームをやつて全試合が終了となる。

『さあ！ デービーバックファイトの時間がやつて來たよ！ 今日はスペシャルな競技で勝負するから大いに楽しもう！ そして特別ルール！ 今回のファイトでは同じ人が何回出ても許されるよーー！ まずは第一回戦！ 女子限定競技！ バランスボールレースだア！ 巨大なバランスボールの上に2人が乗つて、トラックを先に一周したチームが勝利だ！』

第一回戦はバランスボールレース。出場選手はナミとビビだ。  
どんな勝負を見せてくれるのか楽しみだぜ。

「キヤハハ、何よそれ。普通の競技じゃない」

「確かにご主人様が考えるにしては——」

『ただし、バランスボールには特大ディルドが付いているよ！ こいつを膣内にぶち込

んで、ボールをバウンドさせてゴールを目指せエエ!』

「そんなことだと思つたわ』

「うふふ。さすがジャンゴさんです』

デイルド付きの特製バランスボールに二人が跨つて跳ねながらゴールを目指す  
ちよつぴりエロい競技をおれは提案した。

フォクシーの準備は実によくて、すぐに希望のバランスボールを作つてくれた。さす  
がは大所帯を抱えているだけある。

『さらにもー! 競技者たちにはもれなくマイクロビキニを着てもらおう! こいつを着  
てバウンドしたらアーーー!? あとはご想像にお任せするぜ!』

そして、追加ルール。選手には生地の異様に少ないエロ水着を着てもらう。だつて、  
その方が楽しいし。

『それでは選手の紹介だ! まずはジャンゴチーム! 航海士ナミ! 謎の女ミス・パ  
ピヨン!』

『続いてフォクシーチームは我らがアイドル、ポルチエちやくん! そしてお色気船大  
工のジーナ姉さん!』

おれが欲しいのはこのポルチエという鼻の高い、緑色の髪の女だ。こいつは可愛い上  
に絶対にめちゃめちゃエロい。

ぜひともお持ち帰りさせてもらいたいところだ。

「ちよつと、この水着、乳輪見えちゃうじゃない」

「ほ、ほとんど紐ね。お尻なんて丸見えだし」

「いやーん。この水着えっちい」

「いい趣味してるねえ」

マイクロビキニは本当に極小で、乳輪がデカいナミなんかは完全にはみ出している。  
下もケツは丸見えで陰毛も少し見える絶妙な作りだ。

『それでは、各自——用意したバランスボールに跨つて、デイルドを挿入してくれ!!』

「はいはい。これを割れ目の中に……、んつ ♪ んあつ ♪』

「わあ、おつきい ♪ んふつ ♪ ……あんつ ♪』

「いやん ♪ この競技考えた人、変態ね ♪ んんつ ♪ あつ ♪』

「朝飯前だよ、これくらい。ふあつ ♪ んつ ♪』

そして、選手たちは自らの割れ目を開いてバランスボールに付いているデイルドを挿入する。

こういうのは真剣にやるほうが面白い。入れた瞬間の表情が何ともいやらしくて、  
ゲーム開始前から観客は盛り上がっていた。

『四人ともデイルドはしつかりと咥えたかい？

抜けると失格になっちゃうから注意し

てくれ！ それでは！ よーい！ スタ～トッ！』

司会の合図でレースはスタートした。要するに騎乗位でセックスしながら移動するゲームなわけで、これが中々大変だ。

「んつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あつ ♪ あああつ ♪ ♪」

「んんつ ♪ お、思つたより ♪ あんつ ♪ 刺激が ♪ んんつ ♪ あんつ ♪」

『ジャンゴチームのナミ選手、さつそくマン汁がまだ漏れだア！ ミス・パピヨンはあまりの揺れに既に右側のおっぱいが早くも顔を出したア！ ピンク色のきれいな乳首に野郎共の視線は釘付けです！』

ナミの巨乳とビビの美乳がブルンブルンと揺れながら、バランスボールは進んでいく。

ビビは気持ち良さそうに腰を振っているが、既に右乳は隠せずにいてビンビンに勃起している乳首が露わになつていた。

「んつ ♪ いやんつ ♪ とろけちゃう ♪ あんつ ♪ あんつ ♪ ああんつ ♪ ♪」

「ポルチエ情けないよ ♪ これくらいで喘ぐなんて ♪ んつ ♪ んつ ♪ んつ ♪」

『リードしているのは、我がフォクシーチーム！ アイドルポルチエちゃんのおっぱいは溢れそうになつてているが、まだ乳輪までしか見えない！ ジーナ姉さんはまだまだ刺激が足りないと余裕の表情！ さすが乱交で100人斬り達成の伝説は伊達じやな

い！』

フォクシーチームもかなりいやらしい連中を取り揃えているな。

こういうゲームを前にもやつたんじやねエのかつてくらいヤリ慣れてやがる。

『さて、レースも中盤、媚薬入り水鉄砲部隊は用意はいいかい？ 選手たちは気を付けろ！ こいつにかかると処女だつてヤリマンになつちまう代物だぜ！』

フォクシーハイ賊団の連中は選手たちに向けて媚薬の入った水鉄砲を放つ。

彼女らはそれを避けることが出来ずに浴びてしまつた。

「い、急がないと♥ああんつ♥な、なにこれ♥急に体があつつ♥♥あつ♥あつ♥あつ♥イ  
クつ♥イクつ♥イグうううう♥♥♥♥」

「な、ナミさん？ えつ♥んつ♥んんつ♥あつ♥あんつ♥あんつ♥だ、ダメ♥が、我慢できない♥イつちやうううう♥♥♥♥」

「んんんつ♥いやくくん♥なんでこつちにもかけるのお♥しゅごい♥これつ♥んあつ♥  
んんんつ♥んあつ♥はあん♥イクううう♥はああああん♥♥♥」

「ま、マンコ♥んつ♥き、気持ちいい♥んつつ♥♥んつ♥んつ♥んんつ♥はふんつ  
♥——ツツツツツ♥♥♥♥」

媚薬の効果は抜群みてエで、全員がその場で激しく腰を振つて絶頂した。

いや、これは中々の見世物じやねエか。

『噴き出したアア～～～！ 辺り一面、潮、潮、潮オオオ～～！ アイランドクジラも  
びつくりの大噴射アアアアアア！』

この絶頂が思った以上に足止めになり、遅れていたナミとビビも、フォクシー海賊団  
の連中に追いつく。

何度もイキながらも、彼女らは必死になつてゴールを目指す姿は最高にエロい。

『さあて！ いよいよ最後の直線を残すばかり！ ここに来て、両者横並びの一直線！  
すでに四人ともおっぱいを曝け出しながら、必死に腰を振つていてるぞオオオ！ ナミ  
の大きめの乳輪もエロいが！ ポルチエちゃんはまさかの陥没乳首だつた！ これは  
眼福の一言オオ！ 野郎共！ ありがたく拝み倒せエエエエ！』

「いやん♥ 気にしてるのにつ♥ んんつ♥ あつ♥ あつ♥ ああんつ♥ あつ♥ あつ♥ あつ♥  
くふうううんつ♥ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪」

「んつ♥ イクつ♥ ああんつ♥ イクの止まらないつ♥ あんつ♥ で、でも♥ あつ♥ あつ♥ な、  
ナミさん♥ もう少しで♥ 勝てしよう♥ あつ、またイキそうに——」

「んんつ♥ そうねつ♥ が、頑張りましょ♥ あんつつ♥ んはつ♥ イクつ♥ あつ♥ あつ♥ ま  
たイクつ♥ イクつ♥ も、もうゴールかが側なのに♥ イクのが——」

フォクシー海賊団のポルチエが大きく絶頂して止まつたスキにビビたちはゴールに

向かう。

これならこちらの勝ちだと思ったそのとき——。

「ノロノロビーム!!」

「えつ♥」

『勝者はフォクシーチームだア!!!』

ノロノロの実の能力者のフォクシーがビームによつてナミとビビの動きをスロー モーションにしやがつた。

おかげで、樂々とポルチエたちが先にゴールしておれたちは負けちまつたのだ。

「ちょっと、ジャンゴさん！ ナミさんたち負けちやつたじやない。何してるの？」

「いや、普通にナミとビビのアヘ顔を堪能してた。妨害無しにするとつまんねーから なア」

「キヤハハ！ ダメだこの人……、せつかくの強さがエロに負けてる……」

「ノロノロの実の能力おもしれーな。ナミもビビもイク寸前でゆっくりにされたから—

—

「イグうううううううううううううう♥♥♥」

イク直前で長く寸止めされたあとに、それが解放されて、ナミとビビは激しく体を仰

け反つて絶頂する。

彼女らはあまりの快感でデイルドが抜けて転倒してしまった。

「すごい乱れっぷりね。まさか、ジャンゴはこれが見たくてワザと……」「溜まつてた快感が一気に解放されたのですね。恐ろしい力です」

スマン。ノロノロの実の効果がどうしても見たくて負けちまつたぜ。

次で勝てば問題ないから、許せ……。

『さア、取り引きの時間だ！ 指名権は勝利チームの船長のオヤビン！ 一体誰を指名するのかなア？』

「フエツフエツフエツ！ 剣士たしきだ」

「わ、私ですか？ きやつ!? ご主人様、何を？」

「取り決めで、クルーを受け渡すときは全裸でつて決めたんだ。ほら、取り返してやるから堂々と行つてこい！」

指名された彼女の衣服をおれは剥ぎ取る。

そして全裸に刀だけ持たせて、彼女をフォクシーの元に送つてやつた。

「は、恥ずかしいです♥」

「うおつ！ すぐえ工口い剣士じやねエか！」

「乳首とクリトリスにピアスついてるぞ」

「んんつ・♥引つ張らないでください♥」

フォクシー海賊団の男たちは興味深そうにたしげの体を弄った。

たしげは當時発情した状態だから、堪らず愛液を垂らしながら、体をくねらせていた。

「こういうのも、何か新鮮でいいな」

「ジャンゴさんのバカ！　たしげさんを取り戻しますよ。ロビンさん、ミキータさん！」  
たしげが男たちに弄られまくつてゐるのを鑑賞していると、誰よりも性奴隸なつかまに優しい力  
ヤが怒り出して、たしげを取り返そうと気合を入れて、マイクロビキニを着用した。

「ええ、問題ないわ」

「キヤハハ、次は勝てるようになつてるんでしょ？」

「もちろん」

ロビンとミキータも同様の水着を身に着けて、次の勝負へと移つた。

『2回戦！　ストリッパーシューティングを制したのはアアアア！　ジャンゴチーム！

大勝利イイイ！』

「はあ♥はあ♥も、もうダメ♥イっちゃう♥♥♥」

「んんんつ・♥ああつ・♥んああああつ・♥♥♥」

「キヤハン♥い、イクうううう♥♥」

競技が終わつた瞬間に三人は同時に絶頂した。  
かなりの快感が体を駆け巡つていたみたいだ。

今回のゲームもかなりエロかつたなー。考えるのを頑張つてよかつたぜ。

「お疲れさん。エロくて良かつたぞ。三人とも。んじや、たしげは帰つて来い」「ゞ、ゞ主人さまあ♥あ、後で私の体を♥めちゃめちゃに犯してくださいあい♥ぐすん♥」

そして、二回戦を制したおれたちのチームは景品として、もちろんたしげを選んだ。  
彼女は涙目になりながら、激しくセックスをしてほしいとせがむ。まつたく、可愛いことを言うじやねエか。

さてと、次は——。

『お待たせ致しましたア！　本日のメインイベント！　“セックスバトル”！　まもな  
くゴングだよ～ツ！』

そう、最後のバトルは考えるのが面倒になつたのでセックスにした。  
シンプルだけど、盛り上がるだろう。

『まずはレフトコーナー！　連戦に繼ぐ連戦で既にイつた回数は50回以上！　セク  
シー&amp;キュートな彼女の乱れる姿にみんなが釘付け！　フォクシーセクシー海賊団の可  
愛いの頂点に立つ女！　我らがアイドル！　ポルチエちゃんだア！』

「いやん♥頑張っちゃうわよ～～」

催眠術でポルチエを連戦にさせた。そのため同じ人物が何度も出て良いとルールを変えて。

ポルチエの身体は度重なる絶頂でかなり敏感になつていていたはずだ。

『次にライトコーナー！ 懸賞金900万ベリーモもいい女は付いてくる！ 今回のゲームの発案者！ “1・2のジャンゴ”！』

そして、当然のごとくおれが選手になる。やつぱゲームに勝つだけじゃなくて、心も堕としてやりてエからな。

『ルールは簡単！ ポルチエちゃんは降参したら負け！ ジャンゴはポルチエちゃんが降参する前に射精しちまつたら負けだ！ つまり根性と根性のぶつかり合いってこと！ それではバトル開始！』

司会の合図で最後の試合が始まつた。やつぱいい体といい表情かおだ。

こんなのフォクシーにや、勿体ねエだろう。

「うふつ、結構いいモノ持つてるじゃない。でも、私のテクにかかるばどんなチンポもイチコロよ」

「ワンツー・ジャンゴで触られれば、触られるほど、感度が増してくる」  
おれはポルチエに暗示を追加して、彼女の股間に手を伸ばす。

既に割れ目はスキだらけなので、ヌルリと簡単に二本の指が吸い込まれてしまつた。

「んつ♥あんつ♥う、上手いわね♥えつ？ んんつ♥んんつ♥んんんんつ♥イ  
クううううつつ♥♥♥」

おれは指をポルチエの割れ目から出し入れする。

すると、彼女はいとも簡単に潮を吹いて絶頂した。

その瞬間の指を咥え込む力はかなりのモノで、彼女のなかが名器であることを期待させる。

『おつと、これはどうしたア！ ポルチエちゃん、ちよつと手マンされただけで簡単に  
イッた～～!!』

「はあ♥はあ♥い、今のは油断しただけよ♥んんつ♥あはんつ♥ち、乳首そんなに弄らな  
いでえ♥ああああつ♥♥♥♥」

そして、ずつと気になつていたポルチエの陥没乳首。

これを丹念に指を使つてこねくり回して――。

『さらに！ 執拗な乳首攻め！ すると、何ということでしょう!? ポルチエちゃんの  
陥没乳首がひよつこり顔を出したぞ！ あの恥ずかしがり屋さんが今はビンビンに主  
張している～～！』

ポルチエの乳首は出てくるや否や、これでもかと言わんばかりにいやらしく主張し始

める。

勃起した乳首の感度はなかなか高く、抓んで弾くと彼女は軽くイつてしまつた。

「あんつ♥そつちばかりズルいわ♥シツクスナインで勝負しましょ♥」

「いいだろう。受けて立つぜ」

ポルチエはこのままだと危ういと思ったのか、シツクスナインでヤリ合おうと提案する。

おれに断る理由はなかつたので、彼女はおれの逸物と対峙して、おれはポルチエのマンコと対峙した。

さてと、取り敢えずここかな……。

「いやんつ♥クリをそんなにつ♥んんつ♥負けないわあ♥んむつ♥んむつ♥ちゅつ♥ちゅつ♥精子出しちやえ♥んむつ♥じゅぶつ♥」

『これはポルチエちゃんのすごいフェラテク！　まさにサキュバス！　男の精を貪る悪魔の吸引！』

「や、やるじやねエか。これからポルチエのマンコは舐められる度に絶頂する。ワンツー・ジャンゴ！」

クリトリスを吸われながらも果敢にフェラを続けるポルチエの根性に驚きながらも、おれは彼女に暗示をかける。

「ふあつ・い、イクうううううつ・あつ・あつ・イクうううううつ・んんつ・んああああつ  
•またイクつ・イクのとまりやないいいい・♥♥♥♥」

ポルチエは雌穴をひと舐めするだけで、絶頂するようになつたので、おれは彼女のマ  
ンコに何度も何度もしやぶりついた。

『どういうことだ!? ポルチエちゃん！ イクのに夢中でフェラが出来ない！ 潮を吹  
きまくつてのたうち回つてるだけだぞ！』

「ひんじやう・ひんじやうつ・ああんつ・♥♥」

ポルチエは泣き叫ぶのに近い声で喘ぎ出してきた。  
こりやあ、そろそろだな……。

「さて、ここから決めるぜ！ 今度は突かれる度にさつきよりも大きな絶頂が体を駆け  
巡る」

おれは彼女を強引に押し倒して、割れ目に逸物を思いきりぶち込んだ。

すると――。

「えつ？ い、いやん・今は敏感に・んつひいいいいいつ・♥♥♥♥♥ イつきゆうううう  
・♥♥んああああつ・♥♥♥♥ああああんんんんつ・♥♥♥」

絶頂に絶頂を繰り返し、極限まで敏感になつたマンコの奥を突くとポルチエは白目を  
もいて体を電気ショックでも受けたように痙攣させた。

膣内はパニックを起こしているのか、大量の愛液を噴出させながらギュウううつと物凄い圧力をかけてくる。

『おおーーと！ ついにセックスが始まつたア！ と、思つたら、ポルチエちゃん、さつそくアヘ顔全開でイつちやつてるぞ！ とんでもなくチヨロいマンコだア！』

「ゆるひてえ♥♥♥ゆるひてちようらいいいい♥♥♥んはつ♥♥♥ずつとイつればかりでつ♥♥♥ひぐううううううう♥♥♥ダメえええつつつ♥♥♥またイグのおおおおおお

お♥♥♥♥♥♥

涙を流しながら、涎と鼻水を撒き散らして、彼女は許しを乞う。

子宮は完全に下りてきて、奥を突く度に子種を欲しがり、浅ましくマンコは収縮を繰り返す。

「降参するか？ それとも続ける？」

「むりつ♥♥しんじやうつ♥♥このままりやとつ♥♥ひんじやうつ♥♥」

続けるという言葉にポルチエは青ざめて、無理だとはつきりと伝えた。

これで勝負はあつたと思つても構わねエんだろうが、やはり敗北宣言ははつきりと言つてもらわねエとな……。

「じゃあ、降参しろ。性奴隸なまかまになるつて誓いながら」

「ひますつ♥♥いやんつ♥♥♥あああんつ♥♥♥こうひやんつ♥♥♥こうひやんひてつ

♥ ♥ ♥ どれいになりまひゅつ ♥ ♥ ♥ ご主人様の ♥ ♥ ♥ どれいにつ ♥ ♥ ♥ イ  
クううううう ♥ ♥ ♥ イクツツツツツツツツツツツツ

ポルチエは涙ながらに降参して、性奴隸になることを誓った。

最後まで押し寄せてくる快感に顔を歪ませながら。

そうそう。この顔を見るためにこの勝負を受けたんだ。

『出ました～！ ポルチエちゃん！ 無念の降参宣言！ そして、奴隸になると自ら  
懇願したぞオオオ！ ゲームを制したのは！ “1・2のジャンゴ”！ そして、デー  
ビーバックファイトはこれにて全試合が終了～！』

「ああつ ♥ ♥ ♥ んあつ ♥ ♥ ♥ んんんつ ♥ ♥ ♥ ……ツツツツツツツツツツツツ

「思つた以上に粘つたな。こりやあいい拾いモンをしたぜ」

おれは新たな性奴隸なつかま、ポルチエを獲得した。

彼女は何の人格を弄らなくとも口ひだすから、どんな風に調教しよう……。

とにかく、楽しみがまた一つ増えた。デービーバックファイトか——なかなか面白  
かつたぜ。

## 秘書カリファア

「いや〜ん！ やっぱり、何かこの船ボロくな〜い？」

デービーバックファイトが終わって、ログが溜まり次の島へと出発したおれたち。そんな中でポルチエのヤツがメリーア号について不満を漏らした。

「失礼なこと言わないでください。ポルチエさん。メリーア号は……あれ？」  
「キヤハハ！ 言つてる側から床が抜けたわよ」

「ジャンゴさん。こつちも壊れてるみたいですね」

「へいへい。ちょっと待つてなつて」

メリーア号の補修をしていると、別のところも壊れたとビビから報告をうける。

今度は床が抜けただと？ いよいよやベエな。

「最近、こういうことが多いわね」

「そもそも、ノックアップストリームに乗ること自体が無理なことだつたから」

空島に行つたあたりからこういうことが増え始め、帰つてきたらしょっちゅう船が破損するようになつちまつた。

おれも大工仕事は知識がねエから適当だ。暗示で手先を器用にはしているが、応急処

置にしかならねエ。いい加減こりやあ限界かもなア。

「えく。まさか、この船つて船大工も居ないの?」

「そいうや、居ねエな。考えてもみなかつたぜ」

「あー、なるほど船大工か。そりやあいい考えだ。

居たらおれはこんなことしねエで済む。なんで今まで考えなかつたんだろう?

「エツチなことしか考えてないからでしょ? というか、もしこの船が沈没したら私たち仲良くお陀仏よ」

ナミの言うとおりだ。おれはエツチなヤツしか目に入つてなかつた。

实用性は二の次にしていたんだ。たまたまナミが航海士として有能だからここまでスムーズに来れただけだし……。

「かアく、そりやそうだ。んじや、買い替えるか。新しい船に。人数も増えてきたことだしよオ」

ともかく金塊は大量にある。金があるなら、デカい船を買おう。

ポルチエも入つてきたし、おれはまだまだ人数を増やすつもりだからな。

「それはいい考えですね。どうせなら大きなベッドとか入れませんか?」

「いいな。それ。採用」

たしきの言うように5人くらい横になれるベッドがありやあ、なかなか夜も捲りそうだな。

絶対に買おう。基本的に各寝室には力を入れて作りてエ……。

「バスルームも大きめがいいわ。そしたら、お風呂で」

「ロビンも乗ってきたな。最高じゃねエか」

ロビンは風呂で色々と出来るようにして乗り気になつて希望を口にした。  
あんま人の中に馴染めないタイプの女かと思っていたが、そんな心配は杞憂だつた  
な。

「…………」

「カヤ、この船に思い入れがあんのか？」

一人だけ浮かない顔なのは、この船の持ち主であるカヤだ。

こいつとは、キヤプテン・クロを殺つてからそれなりに長い間二人でこの船で旅して  
たからな。他の連中よりは思い入れは深い。

「ええ。この船でジャンゴさんといっぱい冒険して、たくさん愛して貰つたから。でも、

みんなの命の方が大切……だから感謝して送り出すわ」

「やつぱいい女だな。おめエはよ。次の船に乗つたらもつと愛してやるから覚悟しろ  
よ」

「んつ・わかってる・私だつていっぱい大好きつて気持ちを伝えるんだから♥」  
カヤはそれでも安全を優先して大人の態度だつた。

そして、次の船でも思い出を作ると笑いながら、背伸びしておれの頬にキスをする。  
いつまで経つても可愛い女だ。敵には容赦ねエけど。

「船を買い替えて、あとはいい女の船大工でもいりやあ完璧なんだがなア」

「ジーナ姉さんも入れれば良かつたのに」

「フォクシーが居なくなる前ならそうしてらア。あんときや、ポルチエの可愛さに夢中  
だつたからよお」

そうフォクシーの所に居たんだよ。エロい船大工が。

だが、おれの頭ん中は如何にしてポルチエとエロいことをするかしか無かつた。

そうなると不思議なモノで他のヤツのことは割とどうでも良くなるんだ。

「いやん！ ゴ主人様つたら、正直者なんだから。じゃあ、今からする？ 私のここ、  
使つて欲しいわあ♥」

「ちよつと、あんた。団々しいわね。次は私がやるのよ」

「ナミさん、しつと順番抜かさないで下さい！ 次は私のマンコを使つてもらう番で  
す！ ゴ主人様ぐうお情けをください♥」

ポルチエとナミとたしげがいそいそと服を脱ぎながらおれをベッドに誘う。

面倒くせエから、3人まとめて相手にしてやるよ。

あーあ、やっぱりデカいベッドは必要だな。こりやあ。

「“水の都” ウォーターセブンか。あのババア曰く、世界一の造船の技術を誇る町つてことだが——」

ウォーターセブンと呼ばれる造船都市にやつてきたおれたち。

船大工や新しい船を見つけるなら最適な場所だ。

最悪、船大工の腕はどうでもいいんだ。催眠で何とでもなるから。知識さえあれば。

とにかく美女であることが大前提。都合のいい女を探さなきやな。

船の見張りにたしげを残して、おれたちは金塊の換金へと向かつた。

「キヤハハ！ ロビン。あんた出歩いて大丈夫なの？ 政府の人間も出入りしてるらし

いわよ」

「関係ないわ。誰が来ようとも、守つてもらえるもの」  
 ここに着く前に海列車の駅に辿り着いたんだが、そこにいたココロつてババアにこの街のことを聞いた。

どうやら、政府の連中がよく出入りして何かを探つてゐるらしい。  
 連中はロビンを20年も探してゐるから、見つかると厄介事にはなるだろう。  
 「任せとけつて。何があつてもおれは愛する性奴隸なつかまを離したりはしねエよ」

「ええ。信じてるわ」

「たしきさんは手放したじやない」

「ありやあ演出だよ。演出。ホントに手放すわけねエだろ」

「はいはい。取り敢えず、現金を作るわよ。それで、新しい船を買うの」  
 まあ、おれにとつては政府だろうが関係ねエ。どんな奴がロビンを狙おうと返り討ちにしてやるよ。

金塊を換金かあ……。これ、何ベリーケくらいになるんだろうなア。

「ほう。10億ベリーか。思つたよりあるな」

空島での金塊は10億ベリーになつた。デカいカバン10個に札束をパンパンに詰めている。

「ジャンゴが催眠でもつと買い取り額を釣り上げれば良かつたのに」

おれは10億ベリーという金額に満足して、特に値を釣り上げようとしたが、ナミは不満みたいだ。

「おいおい。10億ありやあ十分じやねエか」

「いやん！　すつごい守銭奴ね」

「あなたたち、お金で苦労したことないの？　いくらあつたつて邪魔にならないんだから」

ナミは金が無くて色んなものを失つた。だから、金持ちになると安心するのだろう。こいつが欲しいんだつたら、今度はもつと金を手に入れておくか。確かにやろうと思えば幾らでも引き出せたからな……。

「んで、おめーらは人様の金をどうしようつてんだ？　ワンツー・ジャンゴ！」  
「ふ、フランキーのアニキに届けるんだ！」

「兄貴が『宝樹アダム』を手に入れたいと願つてゐるからな！」

そんな中でおれらの金を狙う怪しい男共を制止しようと催眠をかけた。別にこいつらの使い道なんぞどうでもいいんだけど……。

しかし、ロビンが『宝樹アダム』という言葉に反応をする。

「『宝樹アダム』——確かに、戦争が耐えないと島にあつて砲弾が降り注ぐ中でも立ち続けるという巨大な『樹』よ。世界に数本しか生えてない貴重なモノだけど——船を作るには最高の素材ね」

ロビン曰く、その宝樹とやらが船の最高の素材になるらしい。

おいおい、マジか。こいつらそんな貴重なモンを手に入れようとしてんのかよ。だつたら話は違うよな。

「ロビンは何でも知つてんな。おい。そのフランキーってやつは船大工なのか？」

「ち、違う。アニキは解体屋だ」

「解体屋が何で最高級の材木を欲しがる？」

「し、知らねエよ。んなこと。だが、アニキが必要ならおれたちや何したつて手に入れるぜ！」

「フランキーってやつはともかく、宝樹とやらは欲しいな。どうせなら最強の船にしてエし。よし、フランキーのところに案内しな」

「は、はい……」

こいつらのアニキ分とかいう解体屋のフランキーは最高の材木を手に入れようとしているみたいだ。

金があれば買えるということは入手ルートを知っているということだろう。ならば、おれらはそいつが手に入れた宝樹とやらをそつくり預いちまえばいい。

「へえ、あんたの師匠がゴールド・ロジャーの船をねえ」

「しかも、古代兵器の設計図まで持つてるなんて」

フランキーって野郎は気性の荒い男だつたから催眠術で大人しくさせて知つていることを全部話させた。

まさか、こいつの師匠のトムつてヤツが海賊王の船を作つていたとは思つてなかつたぜ。

面白い話だつたから色々と聞いてみたらこの街で政府の関係者が何を探つているのか大体のことがわかつた。

連中は古代兵器の設計図を探している——。

「ロビンと同じでこいつも政府から狙われそうだな。いや、こいつと言うよりアイスバーグっていう市長か。そいつならあるいはロビンに対する政府の動きも知ってるかもしねエ」

「紹介状を持つてるから、後で会いましょう」

政府は同じ理由でロビンも追っている。もしかしたら、アイスバーグってヤツはそんな政府の動きを知っているかもしねエ。

彼に接触して、情報を引き出しておけば動きやすいだろう。

「私が居ると警戒されるんじや」

「構わねエよ。おれが居るんだ」

「いやん！ いきなりシリアルな展開!?」

「キヤハハ！ 面白い話じやない」

「とにかく、フランキー。てめエに金をやろう。そして、おれらの最高の船を作りやがれ」

「……わかつた！ スーパーな船を作つてやる！ 任せろ！」

フランキーってヤツは海賊王のオーロ・ジャクソン号を超えるような最高の船を作るという夢があるみてエだ。

腕は確からしいから、こいつに新しい船作りは任せるとしよう。

「じゃあ、私たちはアイスバーグのところに行つてみる？」

「そうだな。世界政府つて奴がどんな動きをしているのか聞いてみるか。おれの催眠で」

「いやん！ 真面目なご主人様、かつこいい♥」

「仲間のためにはキチンと動くもんね」

「キヤハツ！ ただのエロいだけの男じゃないわ！」

とにかく、ロビンはおれが守るつて決めたんだ。手出しは誰であつてもさせねエよ。  
おれは真面目にやるときやあ、やる男なんだぜ——。

「あんつ♥あんつ♥あんつ♥あつ♥あんつ♥ああんつ♥ああんつ♥」

「「…………」

メリーオ号で響き渡る女の艶声。おれは今、この街で見つけた最高の上玉を抱いている。

ベッドの上でおれに跨つて喘いでいるのは金髪で眼鏡をかけた美女だ。いやあ、アイスバーグの秘書がこんなにエロい女だと思わなかつたぜ。

「キヤハツ！ 誰よエロいだけの男じやないつて言つたのは」

「あんたでしょ」

「アイスバーグさんには何も聞かずに秘書の人をお持ち帰りして下さいましたね」

「いやん！ セツクス激しすぎ～」

如何にも気が強そうな、このカリファという女を見たおれは我慢出来なくて、催眠術で意識を飛ばしてお持ち帰りしてしまつた。

とりあえず、具合を確かめたかったので、半分眠つた状態にしておれはセツクスを楽しんでいる。

いや、腔内の感触も身体の感度もいい素質を持つてゐるぞ。それにしても、こいつすげエ身体鍛えているな……。

「あんつ♥あんつ♥あんつ♥イクツ♥イクうううあああああああつ♥♥」

「で、お前カリファだつけ？ お前、なんでこんなに鍛えてんの？ ただの秘書には見え

ねエけど。正氣に戻つて質問に答える」

おれはこのカリファを性奴隸なつかまにすると決めた。アイスバーグの秘書なら造船の知識もあるだろうし暗示を使えば船大工に出来るかもしない。

性奴隸なつかまにするなら、おれはこいつのことを何でも知つとかなきやならねエ。というわけで、おれはカリファを正氣に戻して質問をすることにした。

もちろん。正氣になつてもおれの言いなりだが……。

「あんつ♥あんつ♥——ツ!なんで私は裸になつてゐるの?私はC P 9……世界政府からアイスバーグの持つてゐるプルトンの設計図の場所を探れと命じられているわ。んつ♥んんつ♥♥ど、どういうこと?」

カリファは自分の現状に驚きながらもスラスラと自分について話し出した。

“じーぴーないん”?なんだそりやあ?

とにかく、こいつは政府に雇われてアイスバーグのスペイをしてるつてことか……。

「C P 9——つまり政府の諜報機関が動いてるということね。殺しを許可された暗躍機関が……」

ロビンはその“じーぴーないん”とやらを知つてゐるんだな。カリファは世界政府の諜報機関に所属してゐるんだな。

「ニコ・ロビン……弱小海賊團にいるなんて思つていなかつたわ。んつ♥んふつ♥私を

捕まえていい気になつてゐるかもしないけど。んあつ・んんつ・あなたも、仲間も、もうおしまいよ。なぜなら——』

「余裕あるな。もうちよつと感度上げるか。ワンツー・ジャンゴ」

カリファは嘲るような表情をしてロビンを見て、おれたちが終わりとか抜かすから、こいつの体をさらに敏感になるように暗示をかけてやつた。

「あつ・あつ・きゅ、急に体が熱くなつて・んんつ・あんつ・あんつ・んんんつ・♥・♥」  
「おつ、締りが良くなつてきたな。とりあえず、一発膣内なかに出しとくわ」

カリファは鍛えた下半身の筋肉を活かして、ギュンつと膣圧を向上させる。

それと同時に喘ぎ声も大きくなつていつた。こいつの子宮も精子を欲しそうにしているから、リクエストに答えてやろう。

「ぶ、無礼者！ そんなことおゆるさないわ・んんんつ・♥・♥・イクつ・イフクウううう

◆◆◆あつ・あつ・あは・あは◆◆◆

おれがカリファの一番深い所を突いた瞬間に思いきり射精すると、彼女は怒りながらも体を痙攣させて絶頂した。

こうやつて敵意を丸出しにした女を犯すのつて何でこんなに気持ちいいんだろう。

「お前ら、ロビンに何かしようとか思つてねエだろうな？」

「よくも、中に汚らわしいモノを出したわね！……ニコ・ロビンは捕まえて、CP9の長官であるスパンダムの待つエニエス・ロビーへと護送する計画があるわ。んつ♥んつ♥その際に彼女とあなたたちにアイスバーグの暗殺の罪を着せる手はずなの。んんつ♥んつ♥——なぜ、私は言いなりになつていてるの？ む、胸をそんなに♥あんつ♥」

おれはカリファの胸を揉みながら彼女に知つていることを全て話させようとした。

ロケット型にツンと前を向いている美乳は張りが良くて触り心地がいい。

「へえ、あのおっさん暗殺されたのか。んで、お前らはおれらに罪を着せて、ロビンを連れ去るつてか？ 残念だつたな。お前らの計画は失敗だ」

「わ、私がいないことに違和感を感じないCP9じゃないわ。あんつ♥んつ♥きつとここを突き止めるはずよ。はあ♥はあつ♥それに、ニコ・ロビン。んんんつ♥あなたに対してバスタークールを発動させる権利も長官は握っているの。んはあつ♥♥どのみち、あなたたちはもう終わりよ」

カリファは乳首とマンコを弄られてもなお、強気な姿勢は崩さなかつた。

諜報機関に所属いるだけあつて、精神力も鍛えているみたいだな。

「ば、バスタークール……？ そ、そんな……」

「個人に対してもんなことが……？ 歴史を知りたいだけで……？」

「いや、おそらく古代兵器を独占してエんだろ。世界政府は……。ロビンはそれを復活

させるための鍵だからな。手に入れるか、殺すか……どっちかしねエと休まらないつて  
こつた』

バスター・コールという言葉でロビンの顔色が変わった。

世界政府はどうやら古代兵器を自らの手に収めたいんだろう。だから、設計図を持つ  
ていると思っているアイスバーグを探つたり、ロビンを追つたり躍起になつてゐる。

「これでわかつたでしよう? ニコ・ロビンという女はあなたたちの手に負えないわ――

』

「ああ、わかつたぜ」

「ヤンゴ……」

カリファの言葉におれが返事をすると、ロビンは不安そうな顔をする。

そんな顔をすんなつて。おれの前でさ。

「これから、お前を犯しまくる。身も心も全部、おれに服従するよう徹底的に――。そ  
して、いけ好かねエCP9とやらを全滅させて、エニエス・ロビーにいる長官もぶつ倒  
す。それで終わりつてことがな」

だつたら、おれは全部叩き潰す。政府だろうが、なんだろうが……きれいさっぱりロ  
ビンから憂いを消し去つてやる。

「はあ? 無礼者が何を言つてるの? 私は訓練されてゐる。ここにいる安っぽい女と

同じだと思わないでほしいわ。セックスなんかで墜ちないように鍛えられているのよ」

「いやん！　言つちやつた」

「キヤハツ！　安っぽい女からのアドバイスだけど、諦めた方が身のためよ」

「ちょっとカリフアさんが羨ましいかもしません……」

「たしきさん……それはちょっと……」

カリフアが自分はおれの性奴隸なつかまと違うと口にすると、ポルチエたちは彼女に同情する

ような視線を送る。

「んじや、催眠術の恐ろしさを思い知りな。正気のまま、立派な性奴隸なつかまにしてやるぜ」

おれはありとあらゆる暗示をカリフアにかけて彼女に女の悦びを教え続けた。

彼女も最初は強気な態度で悪態をついていたが次第にその態度も軟化していく――。

そして、数時間後――。

「おらつ！　カリフア！　訓練してんだろう？　まだまだヤルつもりだけど、平氣だよな

?』

「んあつ♥ごめんなひやいつ♥ひいつ♥ひいつ♥調子に乗つていまひたつ♥はぐうつ  
♥」

泣き叫びながらカリファはおれに謝罪している。

何百回という絶頂を重ねて……それでも終わらない性行為。

最終的に彼女だけ時間の感覚をずらして、何日も犯され続けたような錯覚をさせると、驚くほど従順になつた。

カリファはおれに両腕を掴まれてズンズン突かれている。

「お前、どんなに犯しても絶対に折れないって言つてたな？　まだまだ、大丈夫だろ？  
安っぽいマンコじやねエんだからよ。数日と言わずに、1ヶ月くらい、いや1年くらい  
ヤラれても平気なんだろうなア」

「ひいいいい♥♥あああんつ♥♥んひいつ♥カリファは安物の雑魚マンコでしゆつ♥思  
い上がつてまひた♥ジヤンゴ様のおチンポ様に負けまひたつ♥んひいんつ♥♥♥」

突かれるたびにカリファはおれに屈服する。なんせ、突く度に快楽が大きくなる暗示  
をかけたからな。

無限に気持ちよくなつてくることに恐怖したんだろう。そして、心が屈服すると支配  
されたいという気持ちが増して——おれへの忠誠心が芽生えるというわけだ。

「カリファア！　お前はおれの何だ？」

「はつひい♥♥♥♥♥ ジャンゴさまあああああああつ♥♥♥♥♥ カリファアはつ♥♥♥私はつ♥♥♥♥♥ ジャンゴしやまの性奴隸でしゅつ♥♥♥ ジャンゴ様に突かれる度にイつてましゅ♥♥♥♥♥ また、イクツ♥♥♥♥♥ イクイクイクウツ♥♥♥♥♥ カリファアのマンコもおっぱいもアナルも全部ジャンゴ様のモノです♥♥♥♥♥ んひいいいいつ♥♥♥♥♥ またイキましゅうううううつ♥♥♥♥♥ 変えられひやう♥♥♥♥♥ ジャンゴ様のおチンポ様無しでは生きられない体になつちやううううつ♥♥♥♥♥ イクツ♥♥♥♥♥ イキましゅうううう♥♥♥♥♥ イグウウウウツツツ♥♥♥♥♥」

♥♥♥

心も身体も忠実な性奴隸へと変化したカリファアは奴隸になつたと宣言する。

嘘がつけないように暗示をかけたから、こいつの言葉は100パーセント本心だ。

マンコを懸命に締めながら、逸物を咥えて鼻水を垂らしながら腰を振る彼女は間違いなく無様だつた――。

さて、残りのCP9とやらをサクツと片付けて、エニエス・ロビーとやらに殴り込みに行くとしよう――。

相手が悪いのはどつちなのかはつきりさせるために――。

## エニエス・ロビーへ

「おいおい、どういうこつた。CP9って思つたよりも強いじゃねエか。六式使いの集団だつたんだな」

おれらの船にカリファがいることを突き止めたCP9と性奴隸なつかまたちの戦闘はまあまあ見応えがあつた。

特にリーダー格のルツチとやらは六式使いの能力者だけあつて、ロビンが武装色の霸氣を纏つた腕を無数に生やして関節技を決めてやつと倒せたほどだ。

グランドラインを進むとやはり強い奴と出くわすようになつてきたな。

「はい。CP9は戦闘訓練を受け続けた精銳ですから。殺しも許可された諜報員なのです。なのに……ルツチやカクまでこうも簡単にやられてしまうなんて。ジャンゴ様には恐れ入ります」

カリファは次々と自分の元仲間が蹂躪されるのを見て驚いていた。

こいつを強化すると、かなり強くなりそうだ。今のところロビンとたしげが特に強いんだが……。

「堅苦しい口調になつたな。もつと、柔らかくなつていいんだぜ。カリファのおっぱい

みたいに」

目上の人間には敬語を使うカリファは素の人格に戻すと少しだけ畏まるようになつた。

「おれはリラックスしろと、カリファの服に手を入れて生乳を揉む。

「あんっ・♥せ、セクハラです……！」

「感度は良くなつたみたいだな。結構なことだ」

セクハラだと可愛い抗議をするカリファはちよつとの刺激で気持ち良さそうな表情をした。

簡単にヤレる女になつてくれたみたいだ。

「で、この人たちどうするの？」

「倒したところで根本的な解決にはなりませんよね？」

「もちろん。こいつらを利用してエニエス・ロビーまで行く。長官つてヤツに灸を据えるためにな」

当然、おれはCP9をボコしたくらいで許すつもりはない。

こいつらの長官であるスパンダムに壊滅的なダメージを与えるつもりだ。

「キヤハハ、海賊が司法の島に向かうつてクレイジーな話よね」

「いやん！ ドキドキしちゃう！」

「それでも、そんな無茶を平氣でやるのはジャンゴさんらしいです」  
　　「……」  
　　「そういうわけで、おれらは全員がルツチたちに捕らえられたことにして司法の島を目指すことにした。」  
　　「催眠術を念入りにかけることで……。」

「お疲れ様です！　ロブ・ルツチ殿！」

「プルトンの設計図、ニコ・ロビンの捕獲。ヤツが隠れ蓑にしていたジャンゴ海賊団をも  
捕獲——手際の良さに脱帽です」

「…………」

「C P 9の方々は疲れておられる。丁重に護送しろ！」

「はっ！」

　　「ルツチたちC P 9に連行されるおれたち。どうやら海列車で司法の島を目指すらし  
い。」

　　「海列車の中には海軍の精銳や政府の連中も多く居た。

　　「おれはうまくルツチたちを操つて車両内の全員に催眠をかける。

今、車両の中で起きているのは、おれたちと暗示にかけられて海列車を運転している奴だけだ。

「思つた以上に簡単に入れたわね」

「この車両の連中にも全員催眠をかけてきた。海列車はもう、おれたちのモンだ」  
海列車を占領したおれたちはすでに勝利が確定したみたいな気分になつていた。  
まあ、実際に勝つたも同然なんだが……。

「じゃあさ、ヤツちやう？ 着くまでに時間はあるんでしょ♥」

「キヤハハ！ いいわね。海列車の中でセックスなんて」

ナミとミキータが服を脱ぎだして素っ裸になる。

こいつらのエロさも磨きがかかつてきただ。何も命令しなくともここまでするようになつたんだもんな。

「あ、あなたたち、こんなところでするの？」

「カリファもどうだ？ かつての仲間も前の車両にいることだし、いやらしい声を聞か

せてやれよ」

「そんなの……セクハラです。で、でも、ジャンゴ様がそうなさりたいのでしたら……」  
カリファをおれはセックスに誘つたが、羞恥心を戻しているので、ちよつと恥らつて  
いるみたいだ。

まあ、ヤル気はあるみたいだが……。

「んむつ ♪ んむつ ♪ んむつ ♪ 大きくしてくれて嬉しい ♪ ちゅつ ♪ ちゅつ ♪」

カリファが迷つてているうちに、ロビンはおれの逸物にしやぶりついて、ひよつとこ顔  
を見せる。喉の奥まで使つて上手に包み込むようなフェラによつて、おれのやる気も  
漲つた。

「二コ・ロビン……！ 横入りするの？」

「あら、そんなつもりはなかつたけど。あなたがどうしてもとお願いするなら順番を  
譲つてあげても良いわよ」

そんなロビンにカリファがムツとした顔をすると、彼女は頭を下げろとSつ氣のある  
ところを見る。

「…………いします」

「えつ？」

「お願ひします。先にオマンコさせて。昨日からずつとセックスしてたせいで、んんつ

♥ ジャンゴ様のオチンポ様を見ただけで、ここがこんなになつてしまつたの ♥ あんつ  
♥」

カリファはスカートを捲ると、ノーパンにさせているので割れ目が露わになる。

彼女は二本の指でそこを開くと愛液が糸を引くように滴つていた。

「あー、わかるわかる。私もしばらく火照りが止まらなくてチンポのことしか考えれない  
かつたもん」

「カリファさん。大洪水起こしていますね。膣口が物欲しそうに涎をダラダラ垂らします」

「あ、あまり見ないで…… ♥」

ナミとカヤがカリファのマンコの中をじっくりと観察すると、彼女は耳の後ろまで赤くなる。

「仕方ねエな。んじや、せつかくだ。みんなの見てる前でオナニーしてイケたらセツク  
スしてやるよ」

「えつ？ そ、そんなこと」

おれがカリファにオナるように指示すると彼女は躊躇する。

「じゃあ、ロビンが先だな。その次は……」

「ジャンゴさん。私のオマンコ使つてください ♥」

だから、ロビンや他の女の相手をするとビビが今度は服を脱いでおれに抱きついた。それをみたカリファはなんとも言えない表情で大声を出した。

「わ、わかりました！　お、オナニーします。私のオナニー見てください♥——んつんつ♥んつ♥んつ♥」

セツクスはどうしてもヤリたくて、我慢の限界になつたカリファは言うとおりにオナニーを始める。

割れ目に指を這わせ、さらにもう片方の手はブラの中に入れて乳房を優しく揉んでいた。

「んつ♥……んつ♥……見られてる♥……でも♥……んんつ♥気持ちいい♥」

カリファはくちゅくちゅと音を立てながら指を雌穴の中に入れて出し入れし始める。「あつ♥……んつ♥……んんつ♥……はあ♥はあ♥……んつ♥んつ♥んつ♥……ひんつ

♥あつ♥んつ♥んつ♥はつ♥はつ♥はつ♥」

一度快楽に身を任せると彼女はオナニーに夢中になつた。息づかいがどんどん荒くなる――。

「んんつ♥……はあんつ♥イクつ♥イクつ♥ああんつ♥……イクうつつつ♥♥♥はあ、はあ、はあ……」

そして、カリファは盛大にイつた。おれたちが見てる前で気持ち良さそうに指をマン

コに突っ込んで。

車両内はカリファの愛液の匂いが充満している。

「よしよし、良くやつたな。ご褒美だ。こっちに来て跨がれ」

「あ、ありがとうございます。はあ……♥やつぱり大きいわ……♥入れます……んんつ

♥イクつ♥あつ♥あつ♥あつ♥」

彼女は嬉しそうに座席に座っているおれに跨つて雌穴に逸物を当てる。

そして、すでに全身が敏感になつていたカリファは挿入した瞬間に軽くイつた。

「いいな。私も早くジャンゴさんとセックスしたいです♥」

「なんか、カリファのオナニー見てるとヤリたくてたまらなくなつちやつたわね♥」

「アソコが切ないです。ご主人様……♥」

「仕方ねエな。カリファと感覚を共有させてやるよ。カリファが突かれるのを見ると、自分が突かれていると錯覚する。ワントー・ジャンゴ！」

おれとカリファのセックスを羨ましそうに性奴隸たちが見ていたので、おれは彼女らとカリファの感覚を共有出来るように催眠をかける。

これで、おれとのセックスを知つてる女なら自分がヤツていると錯覚するほどの快感を得られるはずだ。

「「「んんんつああああ♥♥♥♥」」

催眠にかかつた性奴隸『なかも』たちは一斉に体を仰け反つて絶頂した。触られてもいないマンコから愛液を垂らしながら大きな喘ぎ声を出す。

「しゅごい♥なにこれ♥あんつ♥あんつ♥」

「きやはん♥マンコが突かれている♥んんつ♥」

「ジャンゴさん♥いいつ♥あつ♥あつ♥」

「いやん♥きもちいい♪♥ああんつ♥」

「あつ♥あつ♥あつ♥すごいわ♥んはつ♥♥」

「ご主人様あ♥そこつ♥んつ♥んつ♥も、もうだめ♥ああつ♥」

「イクツ♥♥♥イクツ♥♥♥イクうううううツ♥♥♥」

海列車の車両で女たちの艶声の大合唱が響き渡る。

司法の島に到着する頃には座席には愛液のシミがこびりつき、床には水たまりが出来ており、雌の匂いでむせ返るくらいの状態になつていた。

こりやあ、かなり掃除しねエと客は乗せられねエな。

エニエス・ロビーに着いたおれたちは長官のスパンダムと対面した。なるほど、嫌な顔をしてやがる。

やつは勝ち誇った顔をして演説を始めた。

「世界の人間達は、今日の日の我々の働きが、どれ程尊く偉大な仕事であつたかを知らん。それを知るのは、数年先の話になるだろう。おれに言わせりや今の政府のジジイ共の正義は生ぬるい！ 犠牲を出さねば目的は果たせねえ。こちとら、全人類の平和の為に働いてやつてんだぜ！ わかるか？ 弱小海賊団共！」

「あの人、何か言つてるわよ。ジャンゴ」

「ルツチ、カク、命令だ。やれ！」

「わかりました……」

聞くに耐えないスパンダムのセリフにイラッとしたおれはルツチとカクにやつをボコすように命令した。

あんな野郎におれの女を触れさせるのも気分が悪い。

「ぐえつ！ ゲホツ！ ゲホツ！ て、てめエら何を——ゴフツ！ があああああツ！」

「ルツチイイ！ カクウ！ 狂いやがつたか！ ぐつ、なんだこりやあ！」

「よよい。あつ！ 体がうごかなくなうい！」

「長官を助けられない……チャパパ」

スパンダムの元に居たCP9共はおれの暗示によつて既に動けなくなつてゐる。

連中は喚くだけで既に無力だ……。

「お前らもボコボコにしても良いが。長居すると面倒そうな場所だ。寝てろ。ワンツー・ジャンゴ！」

「ぐー、ぐー」

そして、スパンダム以外のCP9をおれは催眠術で眠らせた。

スパンダムは既に顔の原型がわからないくらいボコボコだ。

「さて、と。最後はてめエだな……」

「お待ちください。ジャンゴ様。スパンダムは5年の任務の褒美を取らせると言つておりました。何か貴重なモノかもしけません」

「ふーん。なるほどな。スパンダム。そいつを持つてこい」

「……はい」

おれはスパンダムに最後の暗示をかけようとすると、先に彼と話をしていたカリファが自分たちへの報酬を用意しているみたいだと口にしたので、おれはヤツにそれを持つてくるように命じた。

「悪魔の実だわ」

「それも2つもありますね」

「何の能力か分からるのは怖いわね」

「キヤハハ、変な能力者もいるし。食べるのは軽いギャンブルよ」

スパンダムからの報酬は悪魔の実だった。しかも2つもありやがる。  
どうすつかな。悪魔の実かア……。

「カリファ。お前の給料みたいなモンだろ。食いたきや食えよ。カナヅチにはなつちま  
うが」

「それでは、ジャンゴ様をお守りするために頂いてもよろしいですか?」

「おう。好きな方を選んで食え」

まずは、カリファの報酬だから彼女には優先して回そうと提案すると、彼女は迷わず  
食べること選んだ。

何の能力になるのかはあとのお楽しみだ——。

「残り一つはそうだな。後で考えるか。どうしても欲しいって奴がいるなら食べりやい  
いし」

「じゃあ、もう海列車に乗つて帰るの?」

「もちろんだ。——いいか、スパンダム。今から一時間後にこの司法の島に向かってバスター コールをかける。そこでこの島ごと吹き飛ばせ」

「わかりました。一時間後にバスター コールを発動させる……」

「よしよし、それでいい。お前ら、撤退するぞ」

「はいっ！」

おれはスパンダムにこの司法の島にバスター コールをかけるように暗示をかけて、海列車に乗つてウォーターセブンに戻つた。

その後……司法の島は壊滅した——。

「エニエス・ロビー……謎のバスター コールの指令で吹き飛ばされるつてか。政府も海軍もスイッチ一つでバカなことをしやがるぜ」

おれは新聞記事を読んで、連中のバカさ加減を笑つた。

確認もせずに軍艦でドンパチやるのはマヌケすぎる。

「おそらく、歴史で最も無意味なバスター・コールね。ジャンゴ、ありがとう。私のためにこんなに大それたことを……。本当は目立つ行動をしたくないはずなのに」

「バカ言え。お前を手に入れられたんだ。この位の労働は安すぎるぜ」

ロビンはおれを後ろから抱きしめながら、甘えてくる。

「こんないい女をモノにしたんだ。政府の機関を潰すくらい何の躊躇いもない。

「それでも私はあなたを愛してる♥心からそう言えるわ。んつ♥んんつ♥今日はどうしようもないくらいあなたが欲しい♥」

「いいぜ。ロビン。船が出来るまで時間があるからな。いくらでも相手をしてやるよ」

「嬉しいわ♥ちゅつ♥ちゅつ♥ああんつ♥」

そこから、ロビンの胸を揉みながらセックスに発展しようとしたとき、部屋の扉が乱暴に開いた——。

「——大変よ！ ジャンゴ！」

「ジャンゴさん、不味いことになつたかもしけないわ」

ナミとカヤが焦った表情をして部屋に入ってきたのだ。

「こいつらがこんなに焦るのは空島に行く前以来だな……。

「おいおい。今からってときなんだが……」

「私はあとで構わない。この二人が何の用事もなく邪魔なんてしないもの」

「そうか。何があつたんだ？ そんなに血相を変えて」

「とりあえず、ロビンとのお楽しみは後にして、カヤとナミに事情を聞くことにした。

「わ、私たちに賞金が付いてしまつたんです！」

「んだと!? マジかよ。一体どこの誰が……」

ナミが見せてくれた手配書からおれは自分に加えてカリファを除いた性奴隸たち全員に莫大な懸賞金がかかつてしまつたことを知る。

“1・2のジャンゴ”——懸賞金9億ベリー

“悪魔の子”ニコ・ロビン——懸賞金1億8000万ベリー

“裏切りの曹長”たしき——懸賞金1億7000万ベリー

“運び屋”ミキータ——懸賞金1億5750万ベリー

“謎の女”ミス・パピヨン——1億3000万ベリー

“泥棒猫”ナミ——懸賞金1億1600万ベリー

“ピンク・レイイザー”カヤ——懸賞金1億1500万ベリー

“アイドル海賊”ポルチエ——懸賞金1億ベリー

マジかよ。エニエス・ロビーを壊滅させるにしても動きが早すぎねエか——。  
ちつ、これから面倒が増えそうだぜ——。

# 怪人ペローナ

「あんつ♥イクつ♥イクつ♥」

「あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥ああああつ♥♥♥」  
 「んつ♥んつ♥んあつ♥ふつつつ♥♥♥」

「イ、イキますつ♥あんつ♥あああんつ♥♥♥」

大きな浴室で女たちの喘ぎ声が響き渡る。いやゝ奮發して良かつたぜ。

金を惜しみなく使つて出来上がつた船はサウザンドサニー号。

フランキーの造船を手伝つたアイスバーグが名付けた。

面倒くさい説明は省くが、船が出来るまでの間、ウォーターセブンでの身の安全を確保したりするためにおれは市長のアイスバーグの信頼を手に入れることにして、彼に催眠をかけた。

そして、ガレーラカンパニー総出でこの船の完成を急がせたのだ。

その結果、デカイ浴室にデカい寝室が幾つもあり、どこでもセックスが楽しめる最強の船が出来上がる。

すげー氣に入つたぜ。メリーア号には悪いけど比ベモンにならねエ。

「ジャンゴ様、どうですか？ アワアワの実の力は、気持ち良いですか？」

「ヌルヌルしてから気持ちいいぜ。ほら、今度はお前も気持ち良くなれよ」

カリファの食べた悪魔の実は、『アワアワの実』だつたらしく、彼女は泡人間となり体の至るところから泡を出せるようになつた。

浴室にマットを敷いて、そこに寝転んでいるおれの体に彼女は胸を泡まみれにして擦り付けていた。これが、なかなか気持ちいい。

「はいっ、ありがとうございます、んんっ、ああんっ、」

カリファの割れ目に指を入れると、彼女の中は泡によつて滑りが格段に良くなりヌルリと指を吸い込む。

こりやあ、具合いも良さそうだな……。

「ナミとビビは腕をきれいにしてくれ」

「わかつたわ、んつ、じやあ胸で挟んであげる、どうかしら、気持ちいい！」

「あんつ、ち、乳首がこすれて、んんっ！」

カリファの泡を全身に付けたナミとビビがこちらに寄つてきて、胸でおれの腕を奉仕する。

ナミは豊かなバストでおれの腕を挟み、ビビは丹念に乳頭を擦り付けていた。

「ミキータは全身で顔の上に跨がれ」

「キヤハつ ♪ ほら、体重軽いでしょ ♪ んんつ ♪ んんつ ♪ もつと舐めて ♪ んはつ ♪ 私の  
オマンコ ♪ 舐めてえつつ ♪ ああんつ ♪」

そして、ミキータは自信の体重を極限まで下げておれの顔に雌穴を擦りつけながら喘ぎ声を響かせている。

サニー号の浴室はこの世の中にある極楽浄土となっていた――。

「いやん！ 大きくてきれいなベッド ♪ あんつ ♪ いきなりなんだからつつ ♪ んつ ♪ んつ  
♪」

「ご主人様のオチンポ様にご奉仕します ♪ んむつ ♪ んむつ ♪ ジュぶつ ♪ ジュぶつ ♪」  
「ねえ、キスして ♪ んつ ♪ ちゅつ ♪ ちゅつ ♪ んんつ ♪」

サニー号の寝室の中の一つ。ここには5人が横になつてもスペースが余るくらい大きなベッドを入れている。

ポルチエの胸を揉みながら、カヤとキスをして、たしぎにフェラさせているが、またたく窮屈さを感じない。

「じゃあ入れますね ♪ んつ ♪ んあつ ♪ おつきいですつつ ♪ ♪」

「ご主人様つ ♦ ポルチエ、イッちやう ♦ あああんつ ♦ ♦ ♦」  
「んつ ♦ 次は私のオマンコ使つてね ♦ ちゅつ ♦ ちゅつ ♦」

4Pも軽くこなせる夢のような寝室に、いくら抱いても飽きない美女が必死で奉仕してくれる。おれは夢の船を手に入れた。

やっぱ、新しい船は違うな。これでもつといい女を手に入れても窮屈な思いをさせないで済む。

おれはウォーターセブンを出発して最高の船旅を満喫していた――。

「つたく。クソみてエな島に着いちまつたな」

「お化けが出そうですね」

「この船にも変なのが乗り込んでますしね」

「サニーアー号を走らせて数日後、変な箱を開けちまつたことが原因なのか怪しげな島に引

き寄せられちまつたおれたち。

「何なんだよ？　ここは——。」

「いやん♥変なところ触らないでえ♥」

「あ、あんつ♥」

「んつ　♥」

『うそだろ。こここのクルー全員ノーブラ、ノーパンかよ！』

島を船から覗いていたら、女どもが胸や股を押さえながら甘い声を漏らす。

ついでにヤローの声も聞こえてきた。ほう、おれの女に手を出すとはい度胸じやねエか。

「んつ　♥きやはんつ　♥揉まれちゃつたら　♥あんつつつ　♥」

『しかもあり得ないくらい感じやすいぜ』

「おう。そろそろ一生分楽しんだどう？　姿を見せろ。おれの言うことを聞け。ワンツー・ジャンゴ！」

しばらく遊ばせてやつた優しいおれは、催眠術で姿を見せるように命令した。

見聞色の霸気でも居場所は分かるが、海の中に逃げられたらめんどくせーからな。

「はい。わかりました……」

姿を見せたのは獣みたいな見た目の男だつた。

とりあえず、知つてることを全部話させるか。

「王下七武海のゲッコー・モリアかア。興味ねエけど、ちよつかいをかけられちまうのはムカつくな」

「カゲカゲの実の能力は戦闘力の高い人の影があればあるほど優秀な兵士が手に入る。高額賞金首になつたから、狙われるのも仕方ないかもね」

透明人間になれる能力者のアブサロムによると、どうやら、この島はゲッコー・モリアの縄張りみてエだ。

この海賊は影を奪つて、部下に作らせたゾンビ兵に付与することで、その影と同じ戦闘力の忠実な兵士を手に入れることが出来る。

つまり、奴は高い懸賞金がついたおれたちの影を狙つてゐるらしい。

「いやん！ モリアといえば、四皇のカイドウと張り合つたと聞いたことがあるわ」

「どうするの？ ジャンゴさん。ログが貯まるまで大人しくしててという手もあるわよ」

「そつちの方が面倒だ。さつさとモリアの奴を処理してゆつくりしてエ」「同感です。敵の本拠地で防戦するほうが危険ですし」

「じゃあ攻めるか。ゲッコー・モリアの居城を……」

アブサロムから、モリアやその部下の情報を引き出すだけ引き出して、おれたちは奴の元へと向かつた——。

「ホロホロ、ホロホロ……！　どんなに強かろうが、このゴーストにかかるべ怖いもの無しだ」

ウェーブのかかったピンクの長髪と丸くて大きな目の可愛らしい容姿の女がおれたちの前に立ちふさがつた。

こいつがペローナか……。ホロホロの実の能力者で精神に干渉する力を持つている珍しいタイプの能力者だ。

「ネガティブホロウか……。おもしれ工能力だ。よし、面も悪くねエし、生意気そうな態度も気に入った。お前、今日からおれの性奴隸な。定期的におれの精液を摂取するまで発情し続けて、一切の口ごたえを許さねエ。ワンツー・ジャンゴ！」

おれはひと目でペローナを気に入つて性奴隸なまかまにしようと決めた。

さあて、どうやつて遊ぼうかな……。

「はうつ……♥ な、何しやがつた？ てめエ……。はあ……♥ はあ……♥」

ペローナは催眠術にかかると、ビクンと体を震わせて、内股になりながら股間を押さえてしまがみ込み、そのまま消えてしまった。

「消えた……」

「どうやら、あれは本体じやないみたいね」

「それでも催眠が効くんですか？」

「視覚も聴覚も使つてジヤンゴさんのことを認識してますから。遠くに居ても効いてしますよ」

「んじや、見聞色の霸氣でペローナとやらの居場所を察知したし、遊んでくるぜ。モリアは適当にやつておけ。影だけは取られるなよ」

そう、目の前のペローナは幻影だつた。おれもそれには気付いていたが、こつちを見ていることには変わりねエので、構わずには構わずには催眠術をかけたのだ。

モリアは性奴隸たちに任せて、おれはペローナの元に向かつた——。

「よう。随分といい部屋じやねエか。デカいベッドもあるし、ヤルには最適だ」「な、何を言つてやがる！　この変態が！」

ペローナの部屋はデカいベッドがあり、セツクスするにはなかなか快適そうだった。  
こんなに準備がいいとは思わなかつたな。

おれはズボンを脱ぎさり、逸物を見せると、ペローナは顔を真っ赤にして罵声を浴び  
せてきた。

「んなこと言つてるけどよ。本当はこいつが欲しくて堪らねエんだろ？」

「バカ野郎！　誰がそんなモノ……、ほ、欲しくなんか…………んつ　♥な、なんで目が離せ  
ねエんだ……？」

催眠術でおれの逸物を欲しくて堪らなくさせてしているので、ペローナは気付かない内に  
股間に指を這わせながら、おれの下半身を凝視している。

「ほら、もう少し近付けてやるよ」

「ひつ……♥く、臭いつ♥なのにつ♥なんで……♥すんすん♥」

ペローナの鼻先に当たるくらいまで逸物を近付けると、彼女は犬みたいに匂いを嗅ぎ  
ながら、涎を垂らしていた。

そして、ついに我慢出来なくなつたのか、彼女はおれのブツを舐め始める。  
「ぺろつ　♥ちゅつ　♥んむつ　♥んむつ　♥んむつ　♥んむつ　♥」

「なんだ、そんなに美味そうにしゃぶりやがって。そんなにこれが好きなのか？」

取り憑かれたように夢中になつて必死でフェラするペローナ。

テクはイマイチだから仕込む必要があるが、この征服感はいつも堪らない。「う、うるせエ！　お前、何かしただろ!?　んむつ♥　んむつ♥　んむつ♥　んむつ♥　だ、ダメだ……、止まらない♥　じゅぷつ♥　じゅぷつ♥　じゅぷつ♥」

「出すぐ。全部口に含め」

水音を立てながら美味しそうに逸物をしゃぶっているペローナの口の中に俺は遠慮なく大量の精液を流し込んだ。

「んんっ♥　♥　んぐつ♥　んぐつ♥　んつ♥　んむつ♥　んつ♥　んんつ♥　♥」

彼女は命令に従つて頬を膨らませながらも、おれの精液を口の中に溜め込む。態度は反抗的だが、既に命令には絶対服従となつている。

「口に含んだまま、大きく口を開けてうがいしろ」

「ああーん……、ガラガラガラガラ」

彼女は馬鹿みたいな命令にも従つて精液でうがいを始めた。

白い泡が口中に広がっているのを見るのは何とも滑稽で面白い。

「くづくづくづ。いい表情だな。ゆっくりと飲み込め。飲み込んだらもつと発情するぞ」

「ごつくん♥て、てめエ、よくもこんな臭エもん飲ませやがつて！ 絶対にぶつ殺す！ んつ……♥ 体がムラムラする……♥ んんつ ♥ あんつ ♥」

ペローナはおれを睨みながら、ついにショーツの中に指を突っ込んでオナニーを始めた。

体の疼きが止まらなくなってきたみてエだな。

「なんだ、強気な態度かと思つたら、人前でオナニーか。びっくりするくらい淫乱な女だな」

「違うつ！ んあつ ♥ てめエが何かしたからだろ？ んんつ ♥ アソコが熱いつ ♥ んつ ♥ んつ ♥ んつ ♥ 頭じやてめエがムカついて仕方ねエのに ♥ んんつ ♥ くそうつ ♥ さつさと 私の中に入れやがれ ♥ ♥」

彼女はおもむろにショーツを脱ぎだして、ケツを突き出し、くばあと割れ目を開く。そして、屈辱に打ち震えながらもマンコに入れろと要求してきた。

「その態度はねエだろ。お前の粗末なマンコ使つてやるんだ。もつと媚びるようにお願ひしろよ」

「なんだつ？ 調子に乗りやがつて！ んあつ ♥ あんつ ♥ あんつ ♥ やめろつ ♥ 指を入れるなつ ♥ んつ ♥ ああんつ ♥ ♥」

おれがペローナの雌穴に中指と薬指を入れてみると、粘り気を帶びた愛液で満たされ

た中は天然のローションで滑りが良くなり指を咥え込む。

発情して感度が高くなつたマンコは少し弄るとあつけなく潮吹いて、ペローナは全身を痙攣させながら絶頂した。

「おー、ちょっと弄つただけで潮吹きやがつた。だが、発情しつばなしなのは治まらね工はずだ。もどかしいだろ？ 子宮がおれの精子を求めて」

「くうつ！ クソ野郎ッ！ わ、私の粗末な雑魚マンコに♥チンポを恵んでくれつ♥思いつきり子宮をつきやがれ♥お願ひだ♥♥」

ペローナは今度はまんぐり返しの体勢になり、両手で割れ目を開きながら挿入するよう懇願した。

涙目になつて、そつぽを向きながらも逸物を欲しがる様子に満足したおれは、彼女の願いを叶えてやることにした。

「んあつ♥んんつ♥んつ♥んつ♥す、すごいつ♥あつ♥あつ♥あつ♥あつ♥ああんつ♥イクつ♥イクつ♥イクううううつ♥♥♥」

発情しつぱなしで、敏感になつているペローナの中はなかなか締め付けがキツくて、具合いが良かつた。

何度かピストン運動を繰り返すと快感に身をくねらせながら絶頂して、膣をさらに締めて精液を奪い取ろうとする淫乱マンコだ。

「ペローナはイカされるほど、おれのことが好きになる。ワンツー・ジャンゴ！」

「ちくしょうつ ♦ あんつ ♦ あんつ ♦ あんつ ♦ んんんつ ♦ ♦ またイクつ ♦ んああんつ ♦

♥ ♥」

絶頂すればするほど、おれに対する好感度が上がるよう暗示をかけると、最初は涙目になりながら感じていたペローナは次第に素直に快感を貪るようになつてきた。

「今度はお前が跨つて腰を振れ」

「め、命令すんな！ し、仕方ねエな。い、入れてやるよ。で、デケエな ♦ んふつ ♦ は、入つた ♦ んつ ♦ んつ ♦ んつ ♦ キ、気持ちいいつ ♦ あんつ ♦ あんつ ♦ んんああんつ ♦ ♦

♥」

「ほら、イつてばかりいねエで、キスしろよ」

「わ、わかつた ♦ おらよ、舌だせ ♦ ちゅつ ♦ ちゅつ ♦ ちゅつ ♦ んんつ ♦ ♦」

そして、絶頂の回数が10回を超える頃には生意気な態度は残るもの、おれが気持ちよくなれるように必死で腰を振りながら、嬉しそうにディープキスをするまでになつていた。

さてと、仕上げるか——。

おれはここから、さらにペースを上げてペローナをイカセ続けた。  
すると——。

「しゅきつ ♦ セツクスキもちいいつ ♦ んつ ♦ んんつ ♦ あんつ ♦ あんつ ♦ あんつ ♦ 」  
 呂律が回らなくなりながらも性行為にどハマリしたペローナは全裸でおれに抱きつきながら幸せそうな顔をしていた。

「性奴隸になれば、毎日イカせてやるぞ」

「にやるつ ♦ 性奴隸につ ♦ にやるからあつ ♦ ♦ はあつ ♦ はあつ ♦ もつと中に出してくれ  
 ♦ はうううううううううつ ♦ ♦ ♦ イツグううううつ ♦ ♦ ♦ ♦ 」

彼女は完全に心も体も屈服して性奴隸になると誓つたので、おれはペローナの子宮の奥に精液を注ぎ込み、彼女をモノにした。

「んむつ ♦ んむつ ♦ んむつ ♦ ちゅつ ♦ ちゅつ ♦ れろつ ♦ 」

「随分と従順になつたじやねエか」

「う、うるせエつ ♦ んむつ ♦ 性奴隸になつたんだから当たり前だろつ ♦ バカなこと言つてねエで、早くオマンコしろよつ ♦ んむつ ♦ んむつ ♦ ちゅつ ♦ ちゅつ ♦ 」

嬉しそうに精液と愛液にまみれた逸物をきれいに舐めとるペローナの口調は生意気

だが、実は尽くすタイプのセックスが好きみたいだ。

そこから、従順になつた彼女とのセックスをしばらく楽しむ。

そういうや、モリアつてどうなつたんだつけ……。

ペローナを性奴隸(な かま)にしたあと、モリアと戦つている性奴隸(な かま)たちの様子を見に行つた。追い詰められた奴は島中の影を自分の体に集めて戦闘力を強化する手段に出やがつた。

普通に戦うと島が破壊されたりして面倒になるだろうから、催眠術で影を全部持ち主に返すように命令してやる。  
ついでに部下を連れて島から出るようにも——。  
それで決着がついた——。

新たな性奴隸(な かま)も手に入れ、航海に出たおれたちだが、次の目的地は意外な形で決まることになる。

「『海賊女帝』ボア・ハンコックかア」

絶世の美女として知られる彼女におれは会つてみることに決めた——。  
きっかけは、一隻の軍艦と鉢合わせしたことだつた——。